

ギヤスケル論集

第 33 号

小池 滋先生追悼号

2023

日本ギヤスケル協会

役員名簿			
会 長	大野 龍浩	(立正大学教授)	第17・18期(2020年4月～2024年3月)
			全体の責任者/『ギヤスケル論集』編集委員(査読担当)
副 会 長	閑田 朋子	(日本大学教授)	第18期(2022年4月～2024年3月)
			会長の補佐/『ギヤスケル論集』編集委員(査読担当)
事務局 長	芦澤 久江	(静岡英和学院大学短期大学部教授)	第17・18期(2020年4月～2024年3月)
			事務局(事務局長)・英国協会連絡
幹 事	石塚 裕子	(神戸大学名誉教授)	第18期(2022年4月～2024年3月)
			『ギヤスケル論集』編集委員(査読担当)
	大前 義幸	(岩手県立大学宮古短期大学部講師)	第18期(2022年4月～2024年3月)
			研究会担当
	木村 晶子	(早稲田大学教授)	第18期(2022年4月～2024年3月)
			『ギヤスケル論集』編集委員(査読担当)
	桐山 恵子	(同志社大学准教授)	第18期(2022年4月～2024年3月)
			「ニューズレター」編集委員長
	齊木 愛子	(熊本大学非常勤講師)	第17・18期(2020年4月～2024年3月)
			ML管理
	杉村 藍	(鳥取大学教授)	第18期(2022年4月～2024年3月)
			『ギヤスケル論集』編集委員長
	鈴木美津子	(東北大学名誉教授)	第18期(2022年4月～2024年3月)
			『ギヤスケル論集』編集委員(査読担当)
	瀧川 宏樹	(大阪工業大学特任講師)	第17・18期(2020年4月～2024年3月)
			事務局補佐
	松本三枝子	(愛知県立大学名誉教授)	第17・18期(2020年4月～2024年3月)
			『ギヤスケル論集』編集委員(査読担当)
	村山 晴穂	(元三育学院短期大学教授)	第17・18期(2020年4月～2024年3月)
			『ギヤスケル論集』編集委員(査読担当)
会計監査	猪熊 恵子	(東京医科歯科大学准教授)	第17・18期(2020年4月～2024年3月)
	早川友里子	(大妻女子大学専任講師)	第17・18期(2020年4月～2024年3月)

— 日本ギヤスケル協会倫理規程 —

日本ギヤスケル協会は、協会設立の目的を推進するために、以下の規定を定める

1. 会員は、人種、国籍、性別、障害などのいかににかかわらず、すべての人に対して公平かつ誠実に行動しなければならない。
2. 会員は、学会内外の活動において、すべての人のプライバシーおよび人権を尊重し、社会人としての規範を守らなければならない。
3. 会員は、他の研究者の研究・および発表・発言の自由を尊重しなければならない。
4. 会員は、研究成果を公表する際、盗用、改竄、その他不正な行為をしてはならない。
5. 『ギヤスケル論集』に掲載された論文は、著作権は投稿者に、著作権は日本ギヤスケル協会に帰属する。『ギヤスケル論集』に掲載された論文を著書などに収録する際はその旨、断り書きをする。

ギヤスケル論集

第33号

小池 滋先生追悼号

2023

日本ギヤスケル協会

故 小池 滋 東京都立大学名誉教授



小池 滋先生 《略歴》

- | | |
|-----------------|-------------------------|
| 1931 年 7 月 | 東京に生まれる |
| 1953 年 3 月 | 東京大学英文学科卒業 |
| 1958 年 3 月 | 同大学大学院博士課程満期退学 |
| 1958 年 4 月 | 國學院大学講師 |
| 1959 年 4 月 | 東京都立大学講師 |
| 1962 年 4 月 | 同大学助教授 |
| 1980 年 4 月 | 同大学教授 |
| 1985 年 4 月 | 同大学人文学部学部長（～1989 年 3 月） |
| 1989 年 3 月 | 同大学退官、東京都立大学名誉教授 |
| 1989 年 4 月 | 東京女子大学文理学部教授 |
| 2000 年 3 月 | 同大学定年退職 |
| 1991 年～2000 年 | ディケンズ・フェロウシップ日本支部長 |
| 1999 年～2006 年 | 日本ギャスケル協会副会長 |
| 2000 年～ | 日本ギャスケル協会名誉会員 |
| 2023 年 4 月 13 日 | 逝去（享年 91 歳） |

《主な業績》

主要著書

- 『幸せな旅人たち』南雲堂、1962年
『ロンドン ほんの百年前の物語』中公新書、1979年
『ディケンズ 19世紀信号手』冬樹社、1979年
『英国鉄道物語』晶文社、1979年（毎日出版文化賞受賞）
『島国の世紀 ヴィクトリア朝と日本』文藝春秋、1987年
『もう一つのイギリス史 野と町の物語』中公新書、1991年
『ロンドン 世界の都市の物語』文藝春秋、1992年
『英国流立身出世と教育』岩波新書、1992年
『英国ゲージ戦争』岩波書店、1995年
『ゴシック小説をよむ』岩波書店、1999年

主な翻訳

- エリザベス・ギヤスケル『女だけの町』岩波文庫、1986年
チャールズ・ディケンズ『オリヴァー・トウイスト』講談社、1970年
『バーナビー・ラッジ』集英社、1975年
『エドウィン・ドルードの謎』講談社、1976年
E.M. フォスター『ハワーズ・エンド』みすず書房、1970年
C. ブロンテ『ジェイン・エア』みすず書房、1992年
ジョージ・ギッシング『南イタリア周遊記』岩波文庫、1994年
『ギッシング短編小説集』岩波文庫、2007年
『世界鉄道推理傑作選』I・II 講談社文庫、1979年
R. D. オールテック『ロンドンの見世物』全3巻 監訳 国書刊行会、1990年

主な編集

『シャーロック・ホームズ全集』全21巻 東京図書、1982年

『ギッシング選集』秀文インターナショナル、1988年

『ヴィクトリア朝時代のロンドン』編著 ドレ画 社会思想社、1994年

『ヴィクトリアン・パンチ』全7巻 柏書房、1995年

『エリザベス・ギヤスケル全集』大阪教育図書、1999～2006年

その他

『シンポジウム英米文学6 ノヴェルとロマンス』報告 学生社、1974年

追記

本稿作成にあたりましては、神戸大学名誉教授 石塚裕子先生のご協力を頂きました。心より御礼申し上げます。

(『ギヤスケル論集』編集委員長 杉村 藍)

目 次

追悼 小池 滋先生

- 小池滋先生 —ギヤスケル協会／クランフォードの護りびと—
..... 鈴江 璋子 1
- 学問上のメントール、小池滋先生
..... 松岡 光治 3
- 忘るる間ぞなき ゆく年月
..... 石塚 裕子 7
- 生々流転 —See You in the Next World, Professor KOIKE!—
..... 大野 龍浩 9

講 演

- イギリスと日本の社会小説比較
..... 石塚 裕子 13
- エリザベス・ギヤスケルと煽情小説
..... 松本 三枝子 31

論 文

- 囁く母親たち —「リジー・リー」における女性たちの言葉と沈黙—
..... 早川 友里子 45
- 『ラドロー卿の奥様』における包摂的社会の構築とその限界
..... 玉井 史絵 61

奨励賞受賞論文

- エリザベス・ギヤスケルの『ルース』における中産階級男性障害者の表象
..... 星 志乃 77

2023 年度日本ギヤスケル協会奨励賞応募論文審査報告

…………… 日本ギヤスケル協会会長 大野 龍浩 …………… 91

書 評

Lesla Scholl, *Food Restraint and Fasting in Victorian Religion and Literature: New Directions in Religion and Literature*

…………… 村上 幸太郎 …………… 93

日本ギヤスケル協会会則…………… 98

編集後記…………… 99

小池 滋先生

—— ギヤスケル協会／クランフォードの護りびと ——

鈴江 璋子



第18回日本ギヤスケル協会例会（2006年6月3日）講演中の小池滋先生 実践女子大学渋谷キャンパスにおいて

小池滋先生は中岡洋初代副会長退会の後を承けて1999年に日本ギヤスケル協会副会長に就任され、2006年3月まで、山脇百合子会長を支え、ギヤスケル協会を護る、魅力あふれる副会長でいてくださった。小池先生は、細かいことには口を出さずに見ていて、本当に重要なことは大きな声で決断されるという、理想的な存在であられた。日本英文学会など外の世界では、構造主義・脱構造主義・新歴史主義など文学批評の流れが急速に変化していくのに、ここギヤスケル協会では、アマゾンたちがひたすらギヤスケルの世界に浸っている、そのギャップに、小池先生は小さなクランフォードを見つけて、面白がっていらしたのかもしれない。

先生のクランフォード論「メアリー・スミスへの花束——あるいはドランプル流の愛情」は、語り手メアリー・スミスが無色透明の語り手ではなくて、大商業都市ドランプルに身を置く、若い、近代的なリアリストであり、クランフォードのレディたちの前時代的な生活を具体的に描写して、その風刺がユーモアを生むに至る、鋭いが暖かい批判精神と行動力を称賛している。見栄っ張りは偽善にも繋がるのだが、先生は「風刺の毒というネガティブな愛情」については早々に切り上げて、建設的な愛情へと論を転じられている。

名司会者ぶりを発揮されたのは、井出弘之先生の講演「ギヤスケルとヴィクトリア朝メロドラマ——D. ブーシコーによる翻案劇」の時。『メアリ・バートン』が『ロング・ストライキ』として翻案・上演されたとき、劇作者本人も船長役で出演したとのお話には、私は「どうしてもっと良い役で出なかったのですか？」と質問してしまった。すかさず「鈴江さん、船長は良い役ですよ」と小池先生。その一言で、なるほど、演劇では敵役が映えるのだ、と理解できたのたのだった。

伸びの良い、明るいテノールをお持ちの先生は、カラオケもお好きなのだと、二代目事務局長の多比羅真理子さんに耳打ちされて、例会の後だったろうか、日野駅近くのごく素朴なカラオケ店にお供したこともある。「瀬戸の花嫁」を一同で唱和した記憶がある。

2003年春に、山協会長がそろそろ会長を次に譲りたいと発言なされたとき、小池副会長が後を継がれるに決まっている、と皆が思った。しかし小池先生は頑として受諾されなかった。「自分は研究と教育の場を離れた人間であり、学会の会長にはふさわしくない」という信念。他者には寛大だが、ご自身には厳しい、その律の厳しさがここで明らかになった。一方で、私が実践女子大定年後、創価大学大学院客員教授になったことを「それは良かった」と喜んでくださった。

2006年6月3日快晴の土曜日、実践女子大学渋谷キャンパスで開催された第18回日本ギヤスケル協会例会は、小池滋先生の講演『『クランフォード』は落語的ソープオペラ』と、英国からお招きした英国ギヤスケル協会事務局長ジョウン・リーチさんの「ギヤスケルの時代のナッツフォードとチェシャー」の二枚看板である。小池先生は『クランフォード』という小説と、落語、ソープオペラという三つのジャンルを横断するものは庶民性とポーキー・ヒューモア、つまりスコットランドの男性に起源がある、面白さを全然見せない仏頂面をして面白いことを言って笑わせる、プロの語り口をギヤスケルが持っていることから、『クランフォード』はまさにそれを使った成熟した作品であることへと、話を進められた。

特定の噺を例に出されなかったので、私は「芝浜」の終わり方を考えた。芝浜で大金の入った革財布を拾った＜事実＞を泥酔の果ての＜夢＞だとされた魚職人が、懸命に働いて店を持てるようになった三年後、あれは＜事実＞だった、と明かされ、祝い酒を勧められたときの落ちが「うん、そうだな、じゃあ呑むとするか」「止そう。また夢になるといけねえ」である。ずっと消息不明だったその家の長男が、外地で成功して、財産をたっぷり持って帰ってきた、めでたし、めでたし、という『クランフォード』の終わり方が、なんとなく「また夢になるといけねえ」という不安を感じさせる、と言ったら、先生はこちらを向いてにつこりして下さるだろうか。

(日本ギヤスケル協会第2代会長、実践女子大学名誉教授)

学問上のメントール、小池滋先生

松岡 光治

私は広島大学の学部時代にディケンズ研究者の田辺昌美先生の影響を受けて『大いなる遺産』で卒論を書き、そのまま大学院に進んだが、入学直後に恩師が急逝されて途方に暮れてしまった。しかし、ディケンズを専門とする院生が多かったこともあり、修士1年の時に小池滋先生が、2年の時に松村昌家先生が集中講義に来てくださった。小池先生は『オリヴァー・トゥイスト』をテキストに執筆当時のヴィクトリア朝の時代精神や社会風潮をロンドン民衆の生活と絡めて解説してくださったが、その博覧強記ぶりに私を含めた受講生は哑然とするばかりだった。人間の頭の良さはサイズの大小とは関係ないはずだが、頭の大きな先生にはそれだけ多くの知識が詰まっているに違いないと愚考したものである。実は、初めて拝眉の栄に浴したのは学部3年生の時に広島大学で春季大会が開催された時で、オリヴァー・トゥイストは孤独からロンドンへ逃走した後にフェイギンの盗賊団で家庭的な人間の絆を得られた、という先生の指摘が社会に対する皮肉な逆説であることに気づいたのは、恥ずかしながらもずっと後のことだった。私は先生の直接の指導生ではないが、院生として集中講義を受けて以来、(私が勝手に思っていることだが)先生は学問上のメントールとなった。



1980年の集中講義後の打ち上げにて(広島・酔心、小池先生49歳)

日本ギヤスケル協会の全国大会は、以前は実践女子大学の日野キャンパスで開催されていた。20世紀最後の年だったと思うが、大会の懇親会に続いて大野龍浩先生と私は駅前で小池先生と一緒に二次会をさせていただいた。そこで先生が1986年に岩波文庫から出された『女だけの町——克蘭フォード』の話のうちが、ちょうど名古屋大学の教養英語の授業でギヤスケルの短篇を使っていた私は、先生の励ましもあって『ギヤスケル短篇集』を上梓することができた。2006年の渋谷キャンパスにおける例会では、小池先生の講演「『克蘭フォード』は落語的ソープオペラ」に続いて、その年に招待された英国本部の事務局長、ジョウン・リーチ女史の講演“Knutsford and Cheshire in Elizabeth Gaskell’s Life and Works”を拝聴できた。その翌日、犬山市・明治村の観光に同行したとき、鉄道史研究者でもある小池先生の講演はいつも日本の鉄道らしく時間厳守で定刻通りに終わる（とは先生自身の言葉である）、と私が伝えると女史は破顔一笑してから、『克蘭フォード』とソープオペラの類似性の指摘に感心しておられた。

松村昌家先生が初代会長として2001年に創設された日本ヴィクトリア朝文化研究学会では、私もホームページ担当者として尽力させていただいたが、一番の思い出は2007年大会の「二つのジュビリー」というシンポジウムの企画で、小池先生も加えた3人で名古屋駅に集まり、話し合い後の飲み会で分不相応な時間を過ごせたことである。鯨飲される小池先生は30分ごとにトイレに行かれていたが、その際に聞かされた「君も私ぐらいの年齢になると近くなるよ」という言葉が、その時の先生と同年になった今の私には現実味を帯び、夜中に起きてトイレに行くたびに先生のことを思い出すようになった。

私が研究の対象をディケンズからギヤスケルとギッシングへ広げて行ったのは完全に小池先生の影響である。『ギッシングの世界』（英宝社、2003年）では「ギッシングとディケンズ」を、『ギッシングを通して見る後期ヴィクトリア朝の社会と文化』（溪水社、2007年）では「教育——そのタテ前と本音」という論考を寄稿していただいた。これまで先生からは何度も論文、巻頭言、エッセイの原稿を送ってもらったが、パソコンとは一線を画される先生の原稿はすべて手書きであった。200字詰原稿用紙や普通の紙に書かれる先生の文字は解読に苦勞することもあったが、枚挙にいとまがない先生の学術書、啓蒙書、翻訳の手書き原稿を出版社の人たちも喜んで解読・テキスト化されたに違いない。

小池先生は今から 60 年前のロンドン在外研究中に、それ以後のギッシング研究で中心人物となるフランスのピエール・クスティヤス先生と一緒に『ギッシング・ニューズレター』（1991 年以降は『ギッシング・ジャーナル』）を創刊されたが、1989 年にはクスティヤス先生とエレヌ夫人を日本に招待され、当時はまだ先生の指導生だった金山亮太先生をはじめ、多くの日本人研究者やギッシング愛好者に紹介されている。2018 年にクスティヤス先生は 88 歳の誕生日直後に逝去されたが、ちょうど『ディケンズとギッシング』（大阪教育図書）の出版準備をしていた私は、哀悼の意を表するために小池先生に「巻頭言」をお願いした。それから 5 年後の今年、同じ英文学研究の泰斗、小池先生もまた 91 歳で幽明境を異にされた。巨星落つの感があるが、少子化で英文科の存在意義も薄れている昨今、後輩の私たちは先生が残されたギヤスケル、ディケンズ、ギッシングの研究書や翻訳の意義を後世に長く伝えて行かねばならない。

(名古屋大学名誉教授)

忘るる間ぞなき ゆく年月

石塚 裕子

本の詰まった紙袋を手に先生はいつも吉祥寺からぶらぶら歩いて東京女子大に非常勤で来られていた。先生はお身体はほっそりとしているものの、大仏さまを思わせる大きなおつむの持主で、授業では次から次へと学識が披露された。あの頭の中には一体どれほどの知識が詰まっているのかしらと、ただただ感嘆して聴いていた。また先生の講義の特徴は難しいことをかみ砕いて素人にも分かるような説明をされることだった。

学部の時「1950年代の文学」、都立大では「探偵小説の系譜」の講義を聴いたが、個々の作品はもとより、英国の若者文化や探偵小説が生まれた時代背景など、その時取ったノートは、教養部解体に伴い、英文学から英文化へと専門を変えざるを得なかった私のまさに救世主だった。先生は特に19世紀は時代背景の考慮なしに小説を理解することはできないと、時代や作家の生い立ちを丁寧に説明され、現代隆盛をみる文化研究を思えば50年前すでに実践されていた。

演習の授業で、“a chair in the window”という箇所、朴念仁の私は詰まり、この“in”はどういうことでしょうかと質問した。「窓のそばの椅子」と訳せば済むことで、案の定、他の受講者たちから苦笑された。だが先生は「窓の下についている椅子でしょう」と答えられた。その時、傍目には馬鹿げているようだが、この先生について行きたいとおこがましくも心に決めた。

先生は女子大でも都立大でも授業ではとても怖く厳しくて、演習の前の日など私は眠れなかったし、よく腹痛も起した。それは学生を叱れるほど、ご自身も隅から隅まで授業準備を怠っていないということであり、また学生が将来社会人になった時、責任感のある人間に育っていなければならないという思いからだったのだろう。現代は大学の先生に専門性しか求めないが、先生は学者・教育者はもとより、人間としても尊敬できる人格を、さらに指導者としての卓越したカリスマ性も備え、その決断力は、東京の中央線を定規で引いたように、真直ぐブレがなく、安っぽい人情に惑わされず冷酷なまでに厳格であった。

都立大移転の時、先生は学部長に選ばれ、授業によく「学部長なんて、嫌だ、

嫌だ」とこぼして入ってこられた。その時ポツリ言われた言葉で「理系学部にとって移転は切実な問題なんだよね」と、東横線都立大の「跡地に何か建物の一つも残しておけばいいのにね」が今でも印象に残っている。学長選出を回避し（教育学の山住正巳氏が学長となり、その後じきに亡くなって、奥さまに恨まれたそうだが）、先生は東京女子大に移られ、そこでも役職は一切なしの条件をつけられたという。東大文学部でも青木雄造先生の後任ポストを、「都立に骨を埋める」とお断りになった。青木先生体調不良の折りには、東大に出向き代わって卒論か修論の審査をされたそうだ。確か米作家ソール・ベローが来日した際、機嫌を損ねてしまい、そこでお気に入りのウイスキーを持参して、先生は説得に当たり、翌日の講演に漕ぎ着けたという。

もちろん大学でも院生をカラオケやバーに引き連れ、趣味の鉄道話やカラオケを披露し、よく奢ってくださったが、こと学会になると、あの厳しさはどこ吹く風、先生は好々爺に一転したのは驚いた。学会は学術団体であると同時に、研究者間交流の場でもあるとの認識からだったのであろう。ギヤスケル協会も創立当初は実践女子大学関係の会員が多数を占め、端で見えても先生は良妻賢母型の女性たちに囲まれ、ちょっと居心地が悪そうだった。それでも余程ほかに用事がない限り、決まって学会に出席され、名だたる講師の招聘に尽力され学会を影ながら後押しされていた。山脇百合子先生がギヤスケル協会を立ち上げた時、先生はそれを支えると決められたのだと思う。

当時の都立大は篠田一士氏を始めとして、今よりも遙かに男臭い男性中心社会で女の出る幕などなく、私自身も男性研究者が相手にしないような隙間で何とか生活の道が開ければいいぐらいにしか思っていなかった。そんな卑屈な態度を見てか、ある時先生は「男だって、女だって同じでしょう」とおっしゃった。先生に女性の地位向上を図る進歩的な考えがあったとは、それが新たな勇気につながった。今は日本ギヤスケル協会も研究レベルが随分上がったように思う。男も女も同じなのだ。

私の定年退職後、盛岡大学に再就職した夏が先生との最後となった。図書館に蔵書が少なく、ディケンズの『書簡集』を頂きに伺ったお宅の戸口には昔ながらの黒電話が目についた。コロナ拡大でその後お会いすることも叶わなかった。巨星墜つ。『書簡集』は盛岡大に寄贈した。

(神戸大学名誉教授)

生々流転

—See You in the Next World, Professor KOIKE!—

大野 龍浩

2022年9月に父を亡くした。享年91。長年熊本県の県立高校で英語教師を務め、退職後は私立高校でも教鞭を執った。私が地元を離れ、在京私大に転勤したため、最後を看取ることはできなかった。帰省する度に施設に見舞い、日に日に痩せていく姿を見ていたが、こんなに急に逝くとは思わなかった。会う度に「家に戻らん [自宅に戻りたい]」とかすかな声で繰り返していた。「呆け防止に」と、自らの卒論で扱った *Tess of the d'Urbervilles* (Oxford UP) を渡したが、もう読む気力はなくなっていたのかもしれない。棺を閉じる前に、冷たくなった顔を両手で挟み、「長い間お疲れさまでした」とつぶやいた。親を亡くして思ったことは、親は自分の生き様を通して子供にその将来の姿を教えてくれているということだ。私もやがて父のように衰え、来世へと旅立つときが来る。

2023年4月13日に日本の英文学研究の泰斗、小池滋先生が亡くなられた。享年91。1931年7月15日のお生まれというから、父と同学年であられた。

ご著書を通してしか存じ上げなかった大先生とお話できるようになったのは、ギヤスケル協会を通してだった。先生のご勧誘により *The Gissing Journal* を購読するようになり、毎年自筆で住所を書いて送ってくださるのに恐縮した。いつだったか、日野の実践女子大学で開催された会合の帰り、名古屋大の松岡光治先生と私をお誘いくださり、3人で駅前の居酒屋で30分ほど歓談させていただいたことがあったが、大先生に奢っていただいたのにもいたく恐縮した。また、一番恐縮したのは、山脇百合子先生が協会の会長にと私をご推薦くださったとき、まだ40代だった私は「若すぎる」と思いながら成り行きに任せていたが、副会長をされていた小池先生が「年齢など関係ない」と言ってくださっていると知ったときだ。

2006年6月に英国ギヤスケル協会の創設者 Joan LEACH 女史を迎えて、山脇先生主催による歓迎会が目黒にある香港園で開かれた折りには、日本の英文学研究

をリードする先生方と共に出席され（写真①）、翌日実践女子大学で開かれた例会では女史の前の講演を引き受けられた（写真②）。同年9月30日（土）には、役員会の帰り、翌日の大会で講演をお願いした岡照雄京都大学名誉教授を囲んで、京王プラザホテル多摩で小池先生、鈴江璋子先生、井出弘之先生らとお話をした。

このように、先生とはギヤスケル協会の会合を通してご挨拶することが続いていたが、やがて2007年9月30日（日）に中央大学駿河台記念館で開催された大会を最後に、協会の集会でお目にかかることはなくなった。先生は76歳になられていた。1999年から7年続いた山協会長、小池副会長の時代が終わり、協会の運営は鈴江会長、東郷秀光副会長へと引き継がれた。

今春、先生の訃報に接し、同学年だった父を昨秋亡くしたばかりだったことと重なり、人生の意味についてあらためて考えさせられた。協会が発足して34年。当初は30代だった若手研究者が、中堅を経て、今は年長者の部類に入っている。この間、何人かの有力会員が協会を去り、有望な若手が加入し、著名な先生方が亡くなられた。自分もやがてこの世を去るときが来る。生々流転。

「あんな集中力をもってしたら、一生のうちにどれだけの仕事ができるんだろうって。万さん見てたら、人生って僕が思っているよりずっと濃くて。たくさんものが入る器なんだなって思えて。その器をパンパンにしていけることが、生きるってことなのかなって。僕も探したいな。何か僕の一生をパンパンにできること。」（NHK「らんまん」より）

小池先生がDickensianとして多くの仕事をなされたように、私もGaskellianの一人として、何かを残さなければ……。

（日本ギヤスケル協会第6代会長 立正大学教授）



(①2006年6月2日(金)、Joan LEACH女史を囲んで、目黒香港園)



(②2006年6月3日(土)、ギヤスケル協会例会、実践女子大学)



(©2006年6月3日(土)、例会後の懇親会、Joan LEACH女史を囲んで、実践女子大学)

イギリスと日本の社会小説比較

石塚 裕子

1 はじめに

イギリスでは十九世紀の未熟な資本主義のもとに生じた社会問題、長時間労働や児童・女性の低賃金での搾取など労使問題を社会小説と称するが、日本では時代はやや遅れるものの、プロレタリア小説と呼んでいるようだ。その理由はおそらく日本では『蟹工船』(1929)の小林多喜二(1903-33)など、社会告発した作家が自ら体を張って労働者の身になるからであり、イギリスの小説家たち、ディズレーリ(Benjamin Disraeli, 1804-81)、キングズリー(Charles Kingsley, 1919-75)、ギヤスケル(Elizabeth Gaskell, 1810-68)やディケンズ(Charles Dickens, 1812-70)などはいずれも小説作品において様々な社会の歪みを告発しても、自らは中産階級にとどまり、労働者のリーダーとなって雇い主に立ち向かうということはない。ここではギヤスケルとディケンズの社会小説と、日本からは小林多喜二や『あゝ野麦峠』(1968)をとりあげ、日英両国のそのあたりの事情や、働く人間のほぼ半数が非正規雇用という現状から現代日本の社会問題小説も考えてみたい。

2 ギヤスケルの社会小説の特徴

社会小説というジャンルはルイ・カザミアン(Louis Cazamian)『イギリスの社会小説』(1903)に遡るが、その代表的作品の例として、ギヤスケルでは『メアリ・バートン』(*Mary Barton*, 1848)と『北と南』(*North and South*, 1854-55)が挙げられる。『メアリ・バートン』は一面的に労働者側への同情という視点で描かれ、『北と南』になると工業都市マンチェスター(ヘルストン)を舞台に多角的に労使双方の側から社会の全体像を見据えている。また両者にはチャーティスト運動華やかし頃と、それが落ち着きを見せはじめてからと、取り巻く社会状況には変化がでてきている。とまれ両小説が産業革命のあと、産業資本主義の台頭、中産階級の繁栄、その犠牲としての労働者階級の窮乏、様々な社会の歪みなどの実情を背景とする社会告発の作品である事に変わりはない。ギヤスケル文学の根底にあるのは正直であることであり、見聞きした現実を写実に徹し文学の形にまとめた。

まず、ギaskellが社会小説を描いた動機は労働者階級の生活の惨状を、中産階級の人々に伝える義務からだった。

... I bethought me how deep might be the romance in the lives of some of those who elbowed me daily in the busy streets of the town in which I resided. I had always felt a deep sympathy with the care-worn men, who looked as if doomed to struggle through their lives in strange alternations between work and want; tossed to and fro by circumstances, apparently in even a little greater degree than other men. ... I saw that they were sore and irritable against the rich, the even tenor of whose seemingly happy lives appeared to increase the anguish caused by the lottery-like nature of their own. ...

The more I reflected on this unhappy state of things between those so bound to each other by common interests, as the employers and the employed must ever be, the more anxious I became to give some utterance to the agony which, from time to time, convulses this dumb people; the agony of suffering without the sympathy of the happy, or of erroneously believing that such is the case. (*Mary Barton* 37-38)

ギaskellは牧師の妻として、日々マンチェスターの労働者のどん底の貧しい悲惨な現状を目にし、貧者を訪問し、慈善活動も熱心に行い、同情を寄せていたが、この貧民の実情を描き、とりわけ中産階級に知らせる目的があった。

それでも根本的に資本家側の立場にあると断言する批評家もいる。

... like the Manchester economists, Gaskell always favors capitalism. Officially, she takes her stand almost always with the masters. Gaskell is still defending the masters six years later in *North and South*. (Bonaparte 137)

二番目にギaskellの視点は、一貫して労働者が社会の犠牲者、善良で道徳的、礼儀正しいが弱い立場にある人間だ、というものだ。以下のダヴェンポート家の貧困の場面がこれを端的に示していよう。

... no one can be surprised that on going into the cellar inhabited by Davenport, the smell

was so foetid as almost to knock the two men down. Quickly recovering themselves, as those inured to such things do, they began to penetrate the thick darkness of the place, and to see three or four little children rolling on the damp, nay wet brick floor, through which the stagnant, filthy moisture of the street oozed up; the fire-place was empty and black; the wife sat on her husband's chair, and cried in the dank loneliness. (*MB* 98)

この点、ディケンズも同じく労働者や『オリヴァー・トゥイスト』(*Oliver Twist*, 1838) など貧困生活の惨状を描き、社会の犠牲者への同情を寄せる姿勢に変わりはないのだが、同時に悪党の労働者スラックブリッジなども登場させている。十九世紀末、失業率の高い構造不況の時代を背景とするギッシング (George Gissing, 1857-1903) の小説になると、労働者間の優劣を内側からの視線で捉えている。外側から見れば、労働者は一様だろうが、労働者にもそれぞれ個がある。それが二十世紀の D.H. ロレンスになると、労働者は妻にも疎まれる墮落した人間としても捉えられるようになり、一面的ではない善も悪も弱さも持つ情けない一人の人間として、より幅広い多面性が労働者階級に投射されるようになる。以下は *Sons and Lovers* からの一節である。

Morel, at these times, came in churlish and hateful.

“This is a nice time to come home,” said Mrs Morel.

“What's the matter to yo', what time I come whoam,” he shouted.

And everybody in the house was still, because he was dangerous. He ate his food in the most brutal manner possible, and when he had done, pushed all the pots in a heap away from him, to lay his arms on the table. Then he went to sleep.

Paul hated his father so. The collier's small, mean head with its black hair slightly soiled with grey, lay on the bare arms, and the face, dirty and inflamed, with a fleshy nose and thin, paltry brows, was turned sideways, asleep with beer and weariness and nasty temper.

(87)

夫の風貌、飲み方や食べ方、性格など労働者然とした汚くてだらしない醜態がリアリスティックに描かれている。ギヤスケルの善良で気の毒な労働者とは隔世

の感がある。

三番目の特徴は、ロマンス作品という枠構造を取っている点だ。例えば、メアリとジェム、マーガレットとソーントンが思い浮かび、いずれもハッピー・エンドで終わる。或いはジェムの無罪を晴らすためリヴァプールでの手に汗握るメアリの冒険談も見逃せない。社会小説らしからぬメロドラマ性であり、レイモンド・ウィリアムズ (Raymond Williams) など左翼批評では攻撃の対象とされるが、¹これにより中産階級、とりわけ女性たちといったより幅広い読者層を獲得してもいるし、労働者のおかれている生活環境の惨状を知らしめる結果にもつながった。

四番目として、背後にキリスト教的慈善が挙げられる。今ある不幸も神による試練であり、より高い善に至るための神が与えた苦しみだ。現世で満足して幸せに暮らす人がそれを軽減するのも神の計画だという。中産階級による慈善のシステムがここにある (Guy 151)。つまるところ貧者には現世の不平等も、耐え抜けばあの世では逆転するということを暗に示す都合のいい幸せな思想だ。

I have lived long enough, too, to see that it is part of His plan to send suffering to bring out a higher good; but surely it's also part of His plan that as much of the burden of the suffering as can be, should be lightened by those whom it is His pleasure to make happy, and content in their circumstance. (MB 457)

作家は牧師の妻であり、キリスト教への帰依が人一倍強い。“Margaret Hale’s religion changes from an emphasis on charity and good works to active reform, and Elizabeth Gaskell implies that she is the better Christian for it.” (Lansbury 104) と、キリスト教徒でも社会改良家としての側面もあらたに見せている。

さらに五番目は、労使の反目ではなく、カースンとバートンのように雇い主と労働者の和解で締めくくる点だ。金銭上の契約のみならず、愛と尊敬の絆によって、両者は結ばれるのだ。この結論づけは労使間の社会経済問題を、個人間の信頼というすり替えて終わらせているとも取れるかもしれない。四番目と五番目は連動している。“... and to have them bound to their employers by the ties of respect and affection, not by mere money bargains alone; in short, to acknowledge the Spirit of Christ as the regulating law between both parties” (MB 460)。このように愛と尊敬の絆を支えている

のがキリスト教の精神であるからだ。

六番目として、法の裁きに関し、ギヤスケルは必ずしも法が正義ではないというスタンスを取る。例えば、殺人を犯したジョン・バートンは法ではなく、良心の呵責で苦悩しつつも病で亡くなるし、『北と南』のフレデリックも反逆者の汚名をきせられたまま逃亡者として生きのびる。

3 ディケンズの社会小説の特徴

ディケンズの社会小説の代表といえば、『ハード・タイムズ』(*Hard Times*, 1854)であり、コークタウンという架空の炭鉱町を舞台に、厳格な功利主義者の元経営者である父グラッドグラインドの教育方針のもと、その犠牲者となり愛も感情も失った姉と弟、その対極にあるサーカス、これは自由な想像世界を表しているが、如何せん、ディケンズは功利主義攻撃を意図し、イデオロギーへの関心が強すぎて、色調も悲観的で小説としての出来映えはあまり芳しくない。離婚は金持ちの特権で、アル中の妻レイチェルを抱え、金がなく離婚できないスティーヴンをはじめとし、登場人物たちはみな救いがなく、また幸せにもならない。

ディケンズは自らの文学作品においても慈善活動においても終始労働者や弱者に同情を寄せ、『オリヴァー・トゥイスト』をはじめとし、その悲惨で劣悪な生活環境や搾取を描写・告発し、行動でも示した。

以下はお爺さんとネルが道中バーミンガム近くで目の当たりにする、チャーティスト運動に絶望した不機嫌そうな労働者たちを描いた『骨董屋』(*The Old Curiosity Shop*, 1841) からの一節である。

But night-time in this dreadful spot!—night, when the smoke was changed to fire; when every chimney spirited up its frame; and places, that had been dark vaults all day, now shone red-hot, with figures moving to and fro within their blazing jaws, and calling to one another with hoarse cries—night, when the noise of every strange machine was aggravated by the darkness; when the people near them looked wilder and more savage; when the bands of unemployed labourers paraded in the roads, or clustered by torchlight round their leaders, who told them in stern language of their wrongs and urged them on to frightful cries and threats; when maddened men armed with sword and firebrand, spurning the tears and

prayers of women who would restrain them, rushed forth on errands of terror and destruction, to work no ruin half so surely as their own—night, when carts came rumbling by, filled with rude coffins (for contagious disease and death had been busy with the living crops); when orphans cried, and distracted women shrieked and followed in their wake—night, when some called for bread, and some for drink to drown their cares; and some with tears, and some with staggering feet, and some with bloodshot eyes, went brooding home—night, which, unlike the night that Heaven sends on earth, brought with it no peace, nor quiet, nor signs of blessed sleep—who shall tell the terrors of the night to that young wandering child! (425-26)

この町には貧困と病が蔓延していたが、夜になると、通りには新たな危険が現れる。暴徒化した労働者たちは恐怖と破壊の使者となり、むしろ破壊するのは自らののだ。ディケンズは暴徒化した労働者の絶望の姿と武装するデモ隊の恐怖をも描写している。ギヤスケルの場合と異なり、労働者が必ずしも善人ではないというのが、ディケンズの社会小説の特徴でもあろう。『ハード・タイムズ』では、組合のリーダー、スラックブリッジは経営者側とも与する悪党である。

とはいえ、ディケンズ自身は上昇志向の人間であり、中産階級での安定を望み、労働者階級に転落することを何よりも恐れ、労働者階級と同一化など絶対にできなかった。“Dickens’s real sympathy was always with the interests of the middle class, and particularly with the interests of his middle-class readers.” (Guy 123) と中産階級に共感を寄せて、作品の読者対象も中産階級に定めていたのは間違いない。例えば『デイヴィッド・コパフィールド』 (*David Copperfield*, 1850) の、労働者階級の子供たちに混じって作業し、その中で誇りを打ち砕かれ、情けない思いを口にも出せず噛みしめる主人公デイヴィッドの悲しみを描いた瓶詰め工場の場면을思い出してもらいたい。

No words can express the secret agony of my soul as I sunk into this companionship; compared these henceforth every-day associates with those of my happier childhood . . . and felt my hopes of growing up to be a learned and distinguished man, crushed in my bosom. (151-52)

4 日本の社会小説

日本の社会小説はどうか。「社会問題とは、現在の社会組織が正義・真理の基準に適合するものであるかどうか、現在の社会の苦難が社会組織の不正に由来するものであるかどうかを論究する」(89)と太田英昭は定義して、あまり日本特有の問題点を念頭に指摘してはいないようだ。明治後期、日清戦争後から社会小説と分類されるジャンルは高山樗牛らに論議されるが、例えば『あゝ野麦峠』は、後発の帝国主義国家として歩み始め、軍備拡張、運輸・通信網の拡充、金融機関の整備といったインフラ整備、綿糸紡績、また戦勝に乗じて、東アジア市場へ本格進出し、急成長を遂げるものの、その背後に紡績女工をはじめとする労働問題が生じたわけだが、後の時代の山本茂実が、労働者の極端な低賃金、長時間労働、待遇の劣悪さ等を聞き取り調査し告発したもので、ルポルタージュ文学になろう。

むしろ『蟹工船』などのプロレタリアート文学が日本の社会小説の代表と一般には考えられる傾向にあるのではないか。イギリスの社会小説では執筆した作家は中産階級に属し、広く社会に労働者の惨状や女性子供への搾取など外側から伝え告発するが、日本の場合は多くは作家自身がプロレタリアートであり、私小説的側面を合わせ持つ。小林多喜二は秋田の生まれで伯父の援助で小樽に渡り、成績優秀で現在の小樽商科大学を卒業し、北海道拓殖銀行(バブルで破綻したが、当時は北海道の一流企業)に就職している。学生時代から人道主義から社会思想、労働運動に興味を持ち、プロレタリアート作家として国家権力に抵抗する労働者、農民、共産主義の人間を描き、また自身も共産党に入党し、非合法活動中に検挙され官憲の拷問を受け、虐殺される。エリートとしての道が約束されているのに、労働者の味方となり自ら破滅の道を選択している。

題材が、ギヤスケルやディケンズの中産階級的視点からの労働者への同情、告発といったスタンスとは異なり、作家自身が自ら暮らしの中で同胞として見聞きし苦悩し体験もしたテーマとなっている。『不在地主』(1929)では、開拓農民の赤貧と苦悩と怒りが描かれる。国策にのせられ、夢を描き北海道開拓民として移住してきたものの、現実には甘い夢物語ではなかった。

S村は開墾されてから三十年近くになっていった。ではS村の百姓はみんな五町歩乃至十町歩の「地主」になっていたか？ 草小屋は桎屋に改築されて

いたか？…

健達の一家も、その「移民案内」を読んだ。そして雪の深い北海道に渡ってきたのだった。彼等もまた自分達の食料として取って置いた米さえ差し押さえられて、軒下に積まざっていながら、それに指一本つけることのできない「小作人」だった。(166-7)

『防雪林』(1928)では、お芳は金持ちの北大生と懇ろになり、家出するが、捨てられ、身重になって帰って来るものの、ふしだらな娘と実家から拒絶され、首を吊る。ギヤスケルの描く未婚の母たちの末路と変らない。この出来事を契機に、他に警察の拷問事件もあり、生活が極度に追い詰められ、農民達は立ち上がる。小林の場合は人ごとではない、国策に踊らされた、周りの身近な開拓農民達の、食うか食われるかの日々貧乏のどん底での悲惨な生活を目の当たりにしてきた。

『蟹工船』では、実際に小林がカムチャッカの領海に侵入して蟹を捕り、これを加工して、缶詰にするために仕立てられたぼろ船に乗り込んだ体験談をもとに描かれている。「航船」でない「工場船」のため航海法が適用されず、季節労働者として北海道で雇い入れられた農民、抗夫、漁師、土方、学生、貧民などが、人間の権利を剥奪され、会社の利潤と帝国の国策のため虐待、酷使される。

「云うまでもなくこの蟹工船の事業は、ただ単にだ、一会社の儲け仕事と見るべきではないのだ…」

「…ともかくだ、日本帝国の大きな使命のために、俺たちは命を的に、北海の荒海をつつきって行くのだということを知って、貰わなきゃならない。だからこそ、あっちへ行っても始終我が帝国の軍艦が我々を守ってしてくれることになっているのだ。…」(20-21)

蟹工船はどれもぼろ船だった。労働者がオホツクの海で死ぬことなどは、丸ビルにいる重役たちには、どうでもいい事だった。資本主義が決まりきった所だけの利潤では行き詰まり、金利が下がって、金がダブついてくると、「文字通り」どんなことでもするし、どんな所へでも、死に物狂いで血路を求めだしてくる…(34)

ここで「国策」ということが明確に示されている。日本の社会小説はイギリスのそれとは違い、労働者と資本家という二者の対立ではなく、国家が介入する三者間のせめぎ合いになる。イギリスもチャーティスト運動の1830～40年代には、新救貧法や穀物法なども含め、労働者の人権を求める政治的要素を多分に孕んだデモが活況を見せた。例えばジョン・バートンはチャーティストの代表として、仲間たちと自分たちの権利を請願すべくロンドンへ行くが、あえなく請願書は却下され“*As long as I live, our rejection that day will bide in my heart; and as long as I live I shall curse them as so cruelly refused to hear us; but I'll not speak of it no more*” (MB 144-45) と口に出せない無念さを吐露している。労働者の人権が認められない苦い挫折感を味わうのだ。言い換えればチャーティスト運動に敗北するということは、労働者の人間としての権利、具体的には例えば選挙権を獲得できないという政治的要素が薄れるということになる。もちろん労働者のストや暴動が起きれば、軍隊や警察の出勤という事態は起きるが、以降は基本的には私的な労使間の経済に関する側面、労働者の待遇改善の争いなどが焦点となり、労働者と資本家の二者による対立となる。政党として労働党が結成されるのは二十世紀になってからだ。

国策という点に関し、『あゝ野麦峠』の背景を振り返ってみたい。その解説によれば、² 仕組みは次の通りだ。生糸貿易がクローズアップされ、生糸を輸入しポンド、ドルを得る。これで海外から綿花を買う。インド、アメリカから輸入した綿花を加工し綿製品を作り、海外に輸出する。こうして得た外貨によって機械・石油などを輸入する。欧米列強に出遅れた日本は新鋭海軍を作り、日清・日露の危機を乗り越える。

日本の産業革命たる戦前の日本社会と日本の資本主義の特徴を描き、明治から大正にかけて野麦峠を越えて岡谷の製糸工場へ働きに出た、飛騨地方の農家の娘たち、吹雪の中を危険な峠雪道を越え必死に働くが、「赤い腰巻きにわらじを履いて、髪は桃割れに結び、背中には風呂敷包みをけさがけに背負い、吹雪の峠路を飛騨に帰っていく」姿があった。女工の賃金にばらつきがあるものの、実家の農家で働いたほうがきつかった。戦前の日本農村社会、地主に出来高の六割を納め、米を口にできない小作人の生活があったからだ。一年働いて得た金を父母に渡すと、これで年を越せると拝む両親を見て喜ぶという、家族や共同体のために個人が犠牲になり、これを美德とする時代であった。大日本帝国の富国強兵の政

策において、有力貿易品の生糸の生産を支えた口減らして貧しい農村からの女性たちのひどく低賃金で長時間労働、粗食、また結核や他の病で死んでいく姿を描いた。しかも気温四十度の職場環境で一日十五時間以上働き、結核が蔓延し、感染症対策や公衆衛生、社会保証制度も充実しておらず、とても人として扱われてはいないが、ほとんどが行って良かったといい、工場の悪口は言わなかった。「湖水にとびこむ女工の亡骸で諏訪湖が浅くなった」とも揶揄されている。この作品は、糸値に翻弄される製糸家の厳しい実情に言及し、日本の貧しい苦しい時代を懸命に生き抜いた人々を描き、岡谷の大製紙会社でのストライキ、憲兵の全面的介入と弾圧の中での戦前の労働運動の姿を教えてくれる。民衆史として大変重要な作品だ。このように、経営者側と労働者側のほかに、日本の場合は欧米列強に後れを取った国家の存在が見過ごせない。その犠牲になっているのが貧しく無力な庶民だ。

イギリスにおいて社会小説がもっぱら中産階級の作家の手によるもので、労働者が自ら社会告発の小説を発表できなかった理由の一つは、初等教育法制定が1870年と遅く、長らく労働者には公教育の機会が与えられなかったからでもあり、それに対して西欧に出遅れた日本では、明治政府が学制を制定したのは1872年と、両者にはたった二年しか違いがない点にある。文字の読めるチャーティストは限られており、ギヤスケルは労働者の教育を深く気にかけていた (Vargo 143)。

5 労働組合への嫌悪、疎ましき

組合の権威への疑いは、イギリスも日本の社会小説にも共通してみられる。『ハード・タイムズ』ではスティーヴン・ブラックプールは組合に不信感を抱き“*He took no place among those remarkable ‘Hands’*”(103)と距離を置き、すると“*Even your own Union, the men who know you best, will have nothing to do with you*”(182)と見られてしまう。さらにリーダーのスラックブリッジからも“*I propose to you . . . that this meeting does Resolve: That Stephen Blackpool, weaver, referred to this placard, having been already solemnly disowned by the community of Coketown Hands . . .*”(268)と切り捨てられ、救いの手を差し伸べてはもらえない。ギヤスケルも組合の権威について、ジョブ・リーに以下のように言わせている。

‘You see my folly is this, Mary. I would take what I could get: I think half a loaf is better than no bread. I would work for low wages rather sit idle and starve. But, come the Trades’ Union, and says, “Well, if you take the half-loaf, we’ll worry you out of your life. Will you be clemmed, or will you be worried?” Now clemming is a quiet death, and worrying isn’t, so I choose clemming, and come into th’ Union. But I wish they’d leave me free, if I am a fool.’ (MB 250)

組合の意向に従って、何もせずみすみす飢え死にするくらいなら、パンが全然ないより、半切れでもほしいし、半分の賃金でも働きたいと訴える。組合ががんになっている。組合は自分のことを放っというてほしいと願うのだ。だが平穩無事のためだけに組合に留まっている。

晴れて無罪を勝ち取ったジェムも工場仲間から村八分に会う。法的容疑が晴れても、人々の心のわだかまりはそう簡単には消えない。

‘I was not just to say turned off, though I don’t think I could have well staid on. A good number of the men managed to let out they should not like to work under me again; there were some few who knew me well enough to feel I could not have done it, but more were doubtful; and one spoke to young Mr Duncombe, hinting at what they thought,’ (MB 429)

組合という集団の怖さがここにはある。組合は、ディズレーリの『シビル』(Sybil, 1845) に描かれているような人目はばかりの初期の秘密結社的存在から、産業・工業がもっとも利益を上げる投資先と認められるようになると、工業都市では容認され確固とした組織体へと変貌を遂げる。労働組合はこうして力をつけ、組合の意向が最優先となり、組合員個人の自由を縛るようになる。組合は資本家と対峙する集合体であるばかりでなく、組合員たちが同根であり、態度や忠誠心の基準を課す社会・コミュニティでもあった。『北と南』では組合の増大する力はますます強固なものとなり、ソーントンにストを続ける組合員たちに代わり、働き手をアイルランド人に求めざるを得なくなる。

Yo' know well, that a worser tyrant than e'er th' masters were says, "Clem to death, and see'em a' clem to death, ere yo' dare go again th' Union." Yo' know it well, Nicholas, for a' yo're one on 'em. Yo' may be kind hearts, each separate; but once banded together, yo've no more pity for a man than a wild hunger-maddened wolf.' (155)

パウチャーは厳しい組合のリーダー、ヒギンズの命令と貧しい大家族を養わなければならない家長としての役割の板挟みとなり、組合より暴君の方がまじだと、自殺の道しかなくなるのだ。事実、資本家に対し個人では交渉できないので集団交渉の必要性から、組合の結束のため、初期労働組合においては「仲間の約束事は守らなければならない。足を引っ張る者、抜け駆けする者、仲間を裏切る者、掟を破る者、これらを許さない」し、ストライキに加わらなかった者の顔に硫酸を浴びせかけたり、スト破りを射殺するため、組合が賞金をかけたりしていた例もあった（木下 45）。ジョン・バートンも組合のくじ引きに当たり殺人を犯す。ヒギンズは "It's the only way working men can get their rights, by all joining together." (292) 或いは "I'm a member o' the Union; and I think it's the only thing to do the workmen any good." (292) と、宗教のように組合に心から信頼を寄せている。

* * * *

資本主義どころか、明治政府のもと富国強兵と産業化を推し進めた大日本帝国社会において、庶民の人権など気を配るべくもなく組合の組織化など達成できる見込みはなかった。アメリカ経由で高野房太郎、片山潜らにより 1897 年労働組合期成会が創立されたとはいえ、1900 年政府は治安警察法を制定し労働者の団結を禁止した。それでも労働争議、暴動、ストは発生したが、軍隊、警察の出勤・検挙により労働者側は敗北していく。1922 年結成された共産党がむしろ政党というイデオロギー集団のもと、政治では普通選挙権、ストライキの権利など、経済では労働時間、社会保障、最低賃金制などを求め、長時間労働や劣悪な生活環境に苦しむ労働者たちを牽引していこうとしたものの、非合法組織として激しい弾圧を受け、地下運動を続けていく。やはりその中でも党の意向が最優先となり、党員個人の自由を脅かしていく。共産党内部での多義にわたる思想の違い、内部

抗争、スパイ活動、密告、それらが個の自由を求める作家たちには疎ましかったり、或いは党の方針と対立したりと、後の佐多稲子や平林たい子、中野重治、野間宏、林房雄など、内部対立による離反、脱退、転向の道を選ぶか、除名されることになった作家も少なくない。このように世界最先端を走っていたヴィクトリア時代のイギリスと後進国日本では大きく事情が異なり、ここでも政治が幅を利かせることとなったのだが、それでもそれぞれの集団の中であって、集団か個かと苦悩する労働者の姿には共通点が見られるのだ。

6 現代日本の労働者と労働問題

現代イギリスではむしろイギリス人労働者の職を脅かす、押し寄せてくる移民・難民たちに歯止めをかける移民問題が焦点となっている。これは十九世紀に遡りエンゲルスもすでに指摘し、『北と南』でも言及され、労働者たちは“*Irishmen were to be brought in to rob their little ones of bread.*”(177)とアイルランド移民への脅威を覚えている。³アイルランド移民は1841年の統計によれば、四十万人以上にも上り、賃金の最も安い未熟練工だったという。日本では非正規雇用労働者が焦点となろう。渋谷和宏によれば、⁴1966年に日本初の人材派遣会社が設立された。1985年の労働者派遣法では非正規雇用は専門職、通訳や秘書に限られていたが、その後再三にわたる規制緩和ですべての業種で派遣労働が可能になった。当初は女性を念頭に置いていたが、バブル崩壊で就職氷河期現象が起き、男性の非正規雇用が増す事態となった。さらにグローバル化による生き残りのため企業のスリム化、市場激化で自営業や家業など小規模な会社・企業が減少し、人件費の削減により、変化する経営環境に身軽に対応しようとした。これにより男性の非正規雇用が一段と労働市場に参入してくることになった。かくして女性ばかりか男性の非正規雇用も増大の一途をたどり、追い打ちをかけたのが2008年のリーマンショックによる不況の波だった。その結果所得の減少や共働きの増加を見、正社員と非正規社員の間で年間約三百万円の格差が生じ、また女性の非正規雇用は男性の三倍にのぼる。

双方のメリットとしては、雇用主側には非正規雇用は低賃金で雇用でき、速戦力となり、一時的仕事の繁忙期に対応するには便利である。また解雇が容易で、ボーナスも不要だから、大変都合のいい雇用形態になる。労働者側では、非正規

雇用は働きたいときに自由に働けるし、女性や学生の場合、家計・学費補助として便利であり、責任が軽く、残業・異動がないのも有難いし、職場内の人間関係（パワハラやセクハラも含め）や組織に縛られることなく悩まなくて済むし、すぐやめられる。けれどもいい事尽くめではない。非正規雇用を選んだ理由に「正規雇用員として働ける会社がなかった」と回答している人が33.1%に上っている。（日本経営協会7）

非正規雇用のデメリットは、労働者には低賃金であり、いつ解雇されるかも分からないし、ボーナス支給もなく、各種保険の加入もままならず、従って生活不安定となって未婚男性が増加する。これでは少子化に拍車がかかることになり、さらに非正規雇用では専門職や熟練工など時間をかけて育成する、その道のプロが育たない。

桐野夏生の日本推理作家協会賞受賞作『Out』（1998）では、女性たちのおかれている切羽詰まった生活が描かれる。深夜東京郊外の弁当工場で働くパートの平凡な四人の女性たちだ。主人公雅子は優秀な信用金庫社員だったが職場で孤立し退職する。リストラされた夫と引きこもりの息子とを抱えて家庭崩壊状態だ。よしえは姑の介護と娘三人のカツカツの日銭生活で苦しい限りだし、邦子は買い物依存症で多重債務におちいつている。弥生は夫が中国から来たホステスに入れあげ、バカラ賭博で夫婦の貯金を無くし、挙げ句争ううちに、夫を殺してしまう。雅子は三人と自宅風呂場でこれをバラバラ死体にし、分散投棄するが、性格の雑な邦子が公園に捨てたために事件が発覚してしまう。その他ブラジルからの出稼ぎ労働者もいるし、新宿のヤクザなども登場する。家庭崩壊、パートタイム、外国人労働者問題など、推理小説というジャンルの背後には、派遣労働ではなく直接雇用ではあっても、所詮低賃金のパートで、人が眠りにつくはずの真夜中にコンビニ弁当をこしらえて生活の足しにしている、救いなき生活に苦悩するまさに出口なしの女性たちの実態がリアルに描写されている。

最近芥川賞を受賞した砂川文次『ブラックボックス』（2021）も、非正規雇用労働者の明日の希望の見えない、その日暮らしの生き方を私小説の立場で捉えている新しいプロレタリアート小説と言えよう。

今日の稼働率を考える。午前中いっぱいとは多分潰れた。午後にとどのくらい走

れるだろうか。今日の取り分は、多分良くて八千円、実際は七千円前後だろうと見積もる。今月の平均からはだいぶ下回るが致し方ない。毎度のことだが、そういう胸算用はいつの間にか夢想到達して、気が付けば来月は新しいホイールでも買おうかなどと思案している。すぐに揺り戻しが来て、家賃、携帯料金、光熱費、その他諸々の費用が押し寄せ、来月の頭はまた振り出しだ。(19)

主人公は自転車で配達するメッセンジャーで、圧迫感から家を出て職を転々とする。自衛隊を二年で辞め、不動産屋の営業職につくが、薄給激務のブラック企業で、社長の馬鹿息子と衝突し、首になる。その後は飽きっぽく職を転々とする。さらにコンビニで知り合った女性と同棲しているが、相手が妊娠する。払う金と貯金がイコールの、その日暮らしの生活が続き、納税を忘れている。税務署の役人がやってくるが、これを殴ると道で居合わせた警官とぶつかり突き倒してしまい、刑務所暮らしを経験する。いわゆるフリーターで将来の展望がないものの、かといって年上の人たちの地道な生き方を受け入れられない。

改正パートタイム労働法が2012年、2015年と制定され、正社員への転換制度を確立しようとしているが、達成率は微々たるものであり、処遇改善の喚起が焦眉の課題だ。あるいは欧米の正規であろうが非正規であろうが、関係なく同一職種同一賃金を目標とする道もあろう。いずれにせよ、大切な資源である人材は敬意と誇りを持って育て上げるものであり、決して“hands”と扱い、切り捨ててはならないのだ。国の衰退をも大きく左右しかねない重大問題だ。

注

本稿は第34回日本ギヤスケル協会全国大会（2022年10月1日、於日本赤十字看護大学）における講演に基づいている。

- 1 Vargo, 134. レイモンド・ウィリアムズの『文化と社会』(Culture and Society, 1958)の援用。
- 2 同書解説 pp. 418-433 による。
- 3 トムスン、pp.510-17. エンゲルス (Engels, Friedrich) 『イギリスにおける労者階級の状態』(The Condition of the Working Class in England, 1845)の援用。
- 4 渋谷、巻末の付録「労働者派遣の歴史」 pp. 177-189、内閣府『平成18年度年次経済財政

報告』、「第一節、雇用の変化とその影響」www5.cao.go.jp、厚生労働省『平成 25 年度労働経済の分析』、「構造変化と非正規雇用」mhlw.go.jp、リクルートワークス・ユニヴァーシティ『労働政策講義 2019 パートタイム労働者・有期雇用労働者・フリーター』works-i.com、阿部正浩「非正規雇用増加の背景とその政策対応」esri.cao.go.jp, 439-68 (最終閲覧日 2023/4/29)による。

引用文献

- Bonaparte, Felicia. *The Gypsy-Bachelor of Manchester: The Life of Mrs. Gaskell's Demon*. UP of Virginia, 1992.
- Lawrence, D.H. *Sons and Lovers*. Cambridge UP, 1993.
- Dickens, Charles. *The Old Curiosity Shop*. Penguin, 1978.
- . *Hard Times*. Penguin, 1974.
- . *David Copperfield*. Penguin, 1996.
- Gaskell, Elizabeth. *Mary Barton*. Penguin, 1987.
- . *North and South*. Oxford UP, 1982.
- Guy, Josephine M. *The Victorian Social-Problem Novel*. Macmillan, 1996.
- Lansbury, Coral. *Elizabeth Gaskell: the Novels of Social Crisis*. Elek, 1975.
- Vargo, Gregory. *An Underground History of Early Victorian Fiction*. Cambridge UP, 2018.
- 太田英昭『日本社会主義思想史序説』日本評論社、2021年。
- 木下武男『労働組合とは何か』岩波新書、2021年。
- 小林多喜二『防雪林・不在地主』岩波文庫、2010年。
- 。『蟹工船』新潮文庫、2003年。
- 渋谷和宏『働き方は生き方』巻末の付録「労働者派遣の歴史」pp. 177-189、幻冬舎文庫、2016年。
- 砂川文次『ブラックボックス』講談社、2021年。
- 日本経営協会『非正規社〈職〉員の働き方の意識と実態に関する調査報告書』、2022年。
- 山本茂実全集刊行会（編集）『あゝ野麦峠』角川書店、1998年。
- トムスン、エドワード P.『イングランド労働者階級の形成』青弓社、2003年。(原著: *The Making of English Working Class*, 1963)

(神戸大学名誉教授)

A Comparative Study of the Victorian Problem Novels and the Proletariat Novels in Japan

Hiroko ISHIZUKA

This paper examines the differences between the social novels in England and those in Japan. Gaskell had personal contact with the misery and squalor of the poorest districts of Manchester.

Gaskell's purpose of writing *Mary Barton* was to let the middle class know the misery of the workers. She felt deep sympathy for the victims of the industrial society, and tried to help them with the Christian philanthropy; the workers were all good and moral. Dickens described not only the poor desperate workers like Stephen, but also a vicious one such as Slackbridge. Both novelists, staying in the comfortable middle class, never thought of themselves being labourers.

In Japan, after the long Edo period of seclusion, the Government hastened to develop national prosperity and military strength, to overtake the West and pass it up. In *Aa, Nomugitoge*, the girls from poor farming families worked for long hours under bad working conditions and for very low wages like Boucher, Bessy, or Job at the silk reeling industry.

Takiji Kobayashi in *Kanikousen* worked for a crab-fishing and canning ship under unsanitary and wretched labour conditions for the cause of the Great Empire of Japan. In England after the workers' defeat in the Chartist movement, the focus was on the conflicts and negotiation between capital and labour, while in Japan workers before the World War II suffered from the interference and oppression from the Government as well as capital.

In the novels both of England and Japan, a union was a source of distress, as the strong unity interfered with individual lives and freedom.

Today in Japan, the number of non-regular employees is increasing more and more and almost half of all the employees are non-regular ones. The life of intense agony owing to unstable income and position is described in contemporary literature.

エリザベス・ギaskellと煽情小説

松本 三枝子

序

Elisabeth Gaskell が、19 世紀の小説家として高い評価を獲得しているのは、異なるジャンルの社会小説と家庭小説において、各々写実的で、説得力があり、慈愛あふれる物語を展開しているからであろう。それらの小説は、彼女の同時代の読者のみならず現在の読者たちにとっても、その魅力を失ってははいない。本論の目的は、そのようなギaskellが最後に書いた小説である *Wives and Daughters* を、当時の時代背景や文化的風土の中において読み直すことである。特にこの小説が書かれた 1860 年代は、煽情小説と呼ばれる大衆小説が流行した時代であった。消費文化の影響もあり、安価な雑誌が出版され読者層が大きく変化し、文学の大衆化が進んだ。そのような時代風土を考慮に入れながら、この最良の家庭小説を再読することにより、この小説が持つ新たな側面を明らかにしたい。

この小説は、1864 年 8 月から 1866 年 1 月まで、*The Cornhill Magazine* に連載された。周知されているように、連載はギaskellの突然の死により終了したのだが、物語は十分に語られ完結していたとあってよい。『コーンヒル・マガジン』にほぼ同時期である、1864 年 11 月から 1866 年 6 月まで連載されていたのが、William Wilkie Collins の *Armadale* であった。コリンズは、*The Woman in White* を 1860 年に、*No Name* を 1862 年に出し、煽情小説の人気作家としての地位を確立していた。1860 年に創刊された『コーンヒル・マガジン』の読者は、時代の流行作家であるコリンズの小説と、家庭小説家として既に定評のあったギaskellの小説を読み比べる楽しみを享受できたのであった。この時代の家庭雑誌の売れ行きは、連載される小説の選択に左右されるといわれるほど、小説は重要な存在であった。出版者である George Smith は、高額な執筆料を支払って、人気作家であるコリンズに連載を依頼し、既に読者に定評のあったギaskellと競合させるという戦略をとった。それでは、この時代の人気小説であった煽情小説とはどのようなものであったのだろうか。まずは、『妻たちと娘たち』が世に出た、1860 年

代という時代背景と文化的風土を知るところから始めたい。

1 煽情小説とは何か

イギリス文学史的に言えば、煽情小説とは、ウィルキー・コリンズが書いた『白衣の女』(1860)により始まり、Mary Elizabeth Braddon が書いた *Lady Audley's Secret* (1862) により完成したジャンルである。この新しいジャンルの特徴は、中産階級の家庭ではタブー視された、重婚、放火、殺人、暴力などの事件が、まさに中産階級の屋敷内や家庭内で生じる物語だったことである。ヴィクトリア朝社会の中で、女性たちは、父の娘、あるいは夫の伴侶として、従属的であつ二次的存在として位置づけられつつも、中産階級の上品さ (“respectability”) を象徴する存在でもあった。そのような家庭の天使という理想の女性像に、真っ向から対立した女性像が、煽情小説のヒロインたちであった。彼女たちは、謎の女、秘密を持つ女であり、同時代の理想の女性像、母親像に、対置される存在であった。このジャンルで作家として破格の成功を取めた Mary Elizabeth Braddon、Ellen Wood などが書いた多くの作品を読むことにより、煽情小説というジャンルは、女性作家が女性読者のために語る新しい女の物語という特質を帯びていることが分かる。¹

Deborah Wynne が、『コーンヒル・マガジン』に連載されたコリンズの『アーマデイル』と、ギャスケルの『妻たちと娘たち』の関係性について次のような分析をしている。

The Cornhill, then, was not the most likely space for a novel like *Armada* to be found. Its failure with *The Cornhill*'s readers highlights the tensions which existed within middle-class literary culture at that period. Readers' preference for *Wives and Daughters* and other domestic novels suggests that the sensation novel offered only a limited appeal to well-to-do Victorians. The less secure classes and upwardly mobile working classes, those who did not enjoy social or financial security tended to prefer sensation novels and chose magazines in which they were serialized. (34)

ここで、デボラ・ウィン は、ジョージ・スミスの期待とは裏腹に、『コーンヒル・マガジン』の発行部数が減少したことを根拠として、富裕層の読者たちが、当時

流行した煽情小説を必ずしも好まなかったと分析している。つまり煽情小説を嗜好する読者層は、Charles Dickens が発行していた *All the Year Round* などを読んでいた経済的に不安定な階級、労働者階級であったとみなしているのだ。読者の階級、経済力により、読書の嗜好が変化するという分析は、必ずしも間違っていない。しかしながら、煽情小説に議論を限定すれば、「貸本屋の女王」と称されたメアリ・エリザベス・ブラッドンの煽情小説は、中産階級の女性たちを会員としていた「ミューディーズ」でも人気作品のリストに常にあった (Terry 11)。中産階級読者向けの貸本屋として、国内のみならず植民地でも人気があったミューディーズのリストに常にあることが、「リスペクタビリティ」を順守するブラッドンの戦略であったともいえる。

それゆえに、家庭雑誌として、年頃の娘から夫婦まで、家族の皆が回し読みする雑誌の連載小説としては、煽情小説は適性を欠いていたかもしれないが、そのことをもって、煽情小説そのものの読者層が労働者階級に限定されていたとまではいえないのではないか。煽情小説は、それまで台所で読まれていた物語を、居間で公然と読まれるようにしたと考える方が、煽情小説が同時代の文学・文化に与えた影響を適切に分析している (Rae 592)。言い換えれば、19 世紀後期の消費文化の普及による文学の大衆化の変化は、それまでの読者層とは異なる嗜好を持った新たな読者層の影響を、小説家たちに及ぼしたといえるのである。煽情小説が与えた影響は、その読者層のみではなく、当時既にその地位を確立していた小説家にも及んだのである。

例えば、ギヤスケルと同時代の批評家であり、小説家でもあった Margaret Oliphant は、*Blackwood's Edinburgh Magazine* で、1862 年には煽情小説の出現を新しいジャンルの誕生と冷静に分析し、自らの *The Chronicles of Carlingford* の一作である *Salem Chapel* (1863) に煽情主義を取り入れている。しかしながら、その後の 1867 年には、煽情小説はイギリス小説の地位を貶めるものと批判するようになっている。² これらのことを考えるときに、煽情小説の存在は、デボラ・ウィンが分析するほど単純に、家庭小説とその読者層をすみ分けていたとは考えにくいのではないだろうか。同時代の小説家たちは、突然出現した煽情小説の人気と、その多大な発行部数をそう簡単には無視できなかったのである。何よりも娯楽の大衆化、消費社会の普及は、文学、とりわけ小説にも無視できない影響を及ぼした。

それでは、次に19世紀リアリズム小説の主流と位置付けられる家庭小説と、そこに誕生した新たなジャンルである煽情小説の関係について比較分析してみたい。

2 家庭小説と煽情小説、二つのジャンルの葛藤と重複

ギャスケルの『妻たちと娘たち』と比較分析したいのは、メアリ・エリザベス・ブラッドンが書いた『オードリー卿夫人の秘密』及び *Aurora Floyd* (1863) である。実はブラッドンは、この二作の煽情小説を公刊し、煽情小説家としての成功を取めたのちに、Gustave Flaubert の *Madame Bovary* (1857) を翻案した小説である *The Doctor's Wife* (1864) を書いている。この小説には、煽情小説家が登場するのだが、極めて批判的に描かれている。加えて、この小説では、医者妻は誘惑されるが不倫には至らず、幸せな晩年を迎える物語となっている。『医者妻』は不道德なフランス小説とは異なる、品行方正なイギリス家庭小説を、ブラッドンが書ける能力を示そうとした作品とも判断できる。前述したオリファントは、翻案小説であることを指摘しながらも、『医者妻』を高く評価している。このように、煽情小説家の側からも、家庭小説への歩み寄りは見られるのだが、当然のことながら、オリファントのみならず家庭小説家の側からも、煽情小説への接近はあったのではないだろうか。

ここでは比較分析に必要な部分を中心に、ブラッドンの二作について、そのプロットを簡潔に説明しておきたい。『オードリー卿夫人の秘密』のヒロインは、金髪碧眼の魅力的なガヴァネスである。彼女は Lucy Graham と名乗り、初老の准男爵 Sir Michael Audley と結婚する。彼の甥 Robert が友人と屋敷を訪ねてくるが、なぜかオードリー卿夫人は会おうとはしない。突然友人が姿を消したことを不思議に思いロバートが色々調べると、実は、ルーシーの本名は Helen Talboys であり、友人の妻で、子供まで生んでいたことがわかる。訪ねてきたこの最初の夫を屋敷の古井戸に突き落とし殺害を企てるが、未遂に終わる。重婚の罪で追い詰められたルーシーは、彼女をオードリー邸から追い出そうとするロバートの泊まるホテルに放火して、彼をも殺害しようとするが、阻まれる。狂気を装うルーシーの告白を利用して、ロバートは彼女を Mrs. Taylor としてベルギーの精神病院に入院させる。しばらく後に彼女の訃報が英国に届く。

次作の『オーロラ・フロイド』のタイトル・ヒロインは、裕福な銀行家を父に持つ、黒髪の魅力的な若い娘である。パリの寄宿学校で学んだ後、19歳で帰国する。Talbot Bulstrode と John Mellish はともに彼女を愛するようになる。タルボットは求婚を受け入れられるが、彼女のフランスでの生活に秘密があることを知り、彼女の元から立ち去る。ジョンは、オーロラが自分を愛していないと知りながらも、彼女と結婚する。Mellish Park の粗野な馬丁の Hargraves に腹を立て、彼を嫌悪するオーロラのために、彼に代わる新しい調教師 James Conyers が雇われる。実は、彼こそが、パリ時代のオーロラの駆け落ち相手であり、ドイツ競馬の事故で亡くなったと思われていた人物であった。コニヤーズに強請られて、オーロラは£2,000を渡すが、翌日、彼の死体が見つかる。彼女は周囲の人々からも、警察からも疑われ窮地に立つが、真犯人は金に目がくらんだハーグレイヴズであった。

1) 秘密を持つ女

上記のように煽情小説のヒロインたちは、ほぼ冒頭から、重婚の罪を犯している。彼女たちは、ヴィクトリア朝社会の規範から逸脱した存在であり、家庭小説では否定され、排除された女性像である。1864年の伝染病法成立からも、梅毒の蔓延が危惧され、自由で豊かな安定した社会状況に、ほころびが生じ始めた時代である。あるいは、1865年の John Ruskin による講演集 *Sesame and Lilies* (1865) などから、女性の参政権運動など、様々な社会参加を求める女性たちへの対応を求められた時代でもあった。Coventry Patmore が書いた夫婦愛を称賛する *The Angel in the House* (1854-62) は、まさにそのような変化する時代に対する揺り戻しの長編詩であった。それに対して、オードリー卿夫人も、オーロラ・フロイドも、新しい時代を象徴するヒロインといえるのである。そして、彼女たちに共通する特徴が、秘密を抱えていることである。³

最初の結婚が不幸であったため、自らのアイデンティティを隠蔽して、新しい人生を獲得しようと苦闘するオードリー卿夫人は、まるでラベルを張り替えるように、次々に名前を変えて人生を塗り替えてきた。物語結末では、家長長制社会の権化のように振舞うロバートと、狂気を装い逃げ延びようとする彼女の闘いが繰り広げられる。女性読者たちは、オードリー卿夫人がたった一人で、鉄道に乗り、馬車を走らせ、オードリー邸とロンドン、さらには子供を預けた彼女の父親

がいるサウサンプトンを疾走する姿に、自らを重ねて自由奔放さを享受した。家庭小説では排除されていた、否定された堕ちた女が主人公となり、女性読者はそのようなヒロインに同化したのである。

『オーロラ・フロイド』では、駆け落ちするフランス育ちのヒロインは、正々堂々と自らの秘密を主張する。求婚相手から、パリの寄宿学校時代の秘密を問いただされても、それは自分の秘密であり、明かすことはできないときっぱりと拒絶する。求婚相手にさえも、自らのアイデンティティを主張する新しい女の出現といえるのである。それは、ガヴァネスや家庭の天使を装ったオードリー卿夫人からさらに進化した自己主張する女性である。Henry Jame が指摘するように、競馬や賭博など中産階級の女性が知らない社会を熟知するのが、オーロラである（“Miss Braddon” 598）。その意味では、オーロラもオードリー卿夫人と同様に、それまでの理想の女性像からは大きく逸脱したヒロインである。

上記のように、煽情小説のヒロインの特徴を分析した結果、明らかになるのが、『妻たちと娘たち』に登場する Cynthia Kirkpatrick の造型と、煽情小説のヒロインたちとの重複である。シンシアは『妻たちと娘たち』に登場するもう一人のヒロインである、Molly Gibson のカウンター・パートである。シンシアは、オーロラと同様に、フランスの寄宿学校育ちである。それがどのような意味を持つのか、次の引用で確認してみよう。

“But she had been in France, she’s quite a travelled young lady,” said Miss Phoebe.

Mrs. Goodenough shook her head, for a whole minute before she gave vent to her opinion.

“It’s a risk,” said she, “a great risk, I don’t like saying so to the doctor, but I should not like having my daughter, if I was him, so cheek-by-jowl with a girl as was brought up in the country where Robespierre and Bonyparte was born.” (438)

世間知らずの Miss Phoebe とは異なり、Mrs. Goodenough はフランス育ちのシンシアを批判的に見ている。洗練された社交術を身につけ、世知にたけた美貌のシンシアと、素朴な田舎育ちのモリーとは対照的に造型されている。グディナフ夫人が危惧したように、シンシアには秘密がある。それはオーロラとは異なり、フランスでの過去の秘密ではなく、英国でのことである。重要なのは、それが煽情

小説のヒロインと同様に、性的な秘密であることだろう。女教師の母親から愛されていなかったシンシアは金に窮したため、婚約を条件に、土地差配人の Preston から融通してもらい。正式な婚約ではなかったが、彼の手元には二人が秘密裏に交わした手紙がある。その秘密を明かさぬままに、彼女はその社交術と美貌により、Roger Hamley と結婚の約束を交わし、その関係を明らかにせぬままに、物語後半では法廷弁護士の Mr. Henderson と交際を始めて、最終的には結婚することになる。ここで発揮されているシンシアの美貌と社交術、その一方での道徳的な危機は、Lyn Pykett が分析している煽情小説のヒロインの特徴に通底するものである。

In particular, the sensation novel habitually focuses on the secrets and secret histories of women. All of Mary Elizabeth Braddon's early novels are structured around women with a concealed past: women who, for a variety of reasons, conceal their present motivations and desires, and who have a hidden mission which drives their lives. In most cases these feminine concealments both result from, and foreground, a tension between the proper and the improper feminine. (84; emphasis added)

『妻たちと娘たち』では、シンシアの男性関係について、義父であるギブソンが苦言を呈しているが、重婚、不倫ではないものの常に秘密があり、弁明は用意されてはいるものの、明るみに出れば面目は潰れ、女性としては致命的な出来事になる波乱含みのものであった。その一方で、彼女の美貌と女らしい社交術や礼儀は、男たちを魅了して止まない。彼女は、オードリー卿夫人やオーロラ・フロイドに極めて類似した女性像となっていることが分かる。

しかしながら、この小説の焦点は、そのようなシンシアからモリーへと推移していくことになる。ギaskellの物語の魅力は、第42章“The Storm Bursts”以降は、シンシアの秘密がモリーに明かされたことでモリーに共有され、モリー自身が道徳的な嫌疑をかけられる展開になることだ。つまり、シンシアの秘密は、モリーの秘密と転化して、モリーの誠実さ、真摯さの試練に変わるのである。二人の人物を知る Lady Harriet は、モリーとプレストンとの噂の真相は、シンシアとプレストンの関係なのではないかと見抜くのだが、世間一般は、モリーへの疑惑を解

くことはない。それはモリーと親しいフィービー嬢の次のような目撃証言により、むしろ補強されてしまうのである。

“Why, that Molly and Mr. Preston were keeping company just as if she was a maid-servant and he was a gardener; meeting at all sorts of improper times and places, and fainting away in his arms, and out at night together, and writing to each other, and slipping their letters into each other’s hands; and that was what I[Phoebe] was talking about, sister, for I next door to saw that done once” (536)

この発言は、モリーへの疑惑が、きわめて階級的な要素をはらんでいることを示している。労働者階級の女中と庭師であるかのような男女の交際を咎め立てているのである。開業医の身分がそれほど高くはないこの時代であれば、モリーと土地差配人が交際することは、スキャンダルになるほどの身分違いでもないだろう。しかし、その交際の様子は、正に不適切 (“improper”) だということになる。この自らの疑惑を晴らすには、シンシアの秘密を明かせばよいのだが、誠実なモリーにはそれができないのである。モリーの陥ったこのダブル・バインドの状況は、ギヤスケルがヒロインの道徳性の試練としてこれまでも用いたものである。

例えば、*Mary Barton* の後半で、メアリが、Jem Wilson の潔白を証明するために、父親の有罪を述べることができない状況と同様である。ある意味では、メアリは父親の罪を明かさずに、ジェムの潔白を証明しなければならないために、多大な労力を払い迂回路を選択しなければならない。一方で、モリーのシンシア救済の行動は、彼女自身がシンシアの身代わりとなり、攻撃的になってしまう。なぜなら、シンシアの秘密は明かされないために誤解され、それはシンシアではなくモリーの醜聞と化すからだ。第48章 “An Innocent Culprit” では、ブラウニング嬢から娘の醜聞を聞いたギブソン医師が、モリーに次のようにただす場面がある。

“Not your share in it. Miss Browning sent for me this evening to tell me how people were talking about you. She implied that it was a complete loss of your good name. You do not know, Molly, how slight a thing may blacken a girl’s reputation for life. I had hard work to stand all she said, even though I did not believe a word of it at that time. And now you have

told me that much of it is true.” (545)

世知にたけた自己中心的なシンシアが醜聞から免れた一方で、世間知らずで誠実なモリーは醜聞にまみれてしまう。しかしながら、そのようなモリーの人柄を愛する人物、レイディ・ハリエットが救済者として出現し、モリーの窮状は解消する。それは、George Eliot の *The Mill on the Floss* (1860) で、Maggie Tulliver が醜聞により、追い詰められ、居場所をなくす状況といかに異なることだろうか。

それは、ギヤスケルが語る Hollingford の人々が構成する世間が、最終的には善意により成り立っているからだろう。例えば、それは、モリーの醜聞の証左となったプレストンとの秘密の会合を Mr. Sheepshanks に見られてしまったとき、プレストン自身がその場を逃げ去ろうとした彼女に、次のように忠告したことからもわかる。「じっとしていなさい。隠れてはいけません。あなたはどのみち、恥ずかしいことは何もしていないのです」(“Keep quiet. You must be seen. You, at any rate, have done nothing to be ashamed of.” 508)。夕暮れの密会は、シープシャンクスにより、モリーの醜聞として広められてしまうが、プレストンの言葉は、彼がモリーに対して最低限度の良識を守ったことを、彼が庭師ではなく紳士としての礼儀を示したことを明らかにしている。

ギヤスケルの語るホリングフォードは、性善説により構成されていると同時に、レイディ・ハリエットらの上流階級の影響力が及ぶ保守的な田舎町でもある。マギー・タリヴァーとは異なり、モリー・ギブソンは醜聞から解放されるのみならず、望ましい結婚をすることになる。モリーのみならず、シンシアも彼女に劣らぬ望ましい結婚相手を獲得する幸福な大団円は、『妻たちと娘たち』が目指している方向を明らかにしている。

それは、煽情小説のように、秘密と引き換えに自由を享受する女性を描きながらも、最終的には彼女を罰することで、イギリス社会や階級社会の安泰を語るのではなく、社会の重要な構成要素である女性が道徳的な試練を克服する過程を語るにより、社会の安寧と秩序を達成する可能性を示すことである。前述したように、シンシアの秘密は、モリーに共有されることでモリーに転化されるが、何も恥じることはしていないモリーにとり、それは秘密というよりも、自らを犠牲にしても、シンシアとの道義を守ろうとするモリーの道徳的な試練となるから

だ。

つまり、『妻たちと娘たち』の後半では、家庭小説のヒロインに相応しいモリーが、道徳的な試練をいかに乗り越えるのかという主題が、前景化され語られることになっている。シンシアの秘密は矮小化され、モリーの試練のための道具に化している。秘密を持つ女であるシンシアは、煽情小説のヒロインたちと共通する特徴を持ちながら、モリー・ギブソンが家庭小説のヒロインになるために、表舞台から退くことになる。モリーが『妻たちと娘たち』のヒロインであり、シンシアがその引き立て役（“foil”）であることが明らかになるのである。

2) すべてを語らないこと

煽情小説のヒロインである、オードリー卿夫人やオーロラ・フロイドが秘密を抱えながらも、物語の結末では、そのアイデンティティの秘密、オードリー卿夫人に狂気の遺伝があること、オーロラの放蕩生活などを余すことなく暴露されるのに比較して、シンシアの秘密は、それを明かされるモリーに対してもすべてが語られるわけではない。プレストンの手に落ちたシンシアは、金に窮していたと同時に、母親も含めて誰からも愛されていなかったのである。母親は自らの面子と都合を優先するあまり、シンシアを半ば放置していたわけである。このようなシンシアのアイデンティティの不安や不満は、母娘の間でも語られることはない。ある意味では、それが階級意識だともいえるのである。ガヴァネスとしてあるいは女教師として、夫を亡くした後は、中産階級の底辺で一人娘を育てていたカークパトリック夫人にとり、「リスペクタビリティ」は何よりも重要である。シンシアは愛情に飢えながらも、母親のそのような意図を受容せざるを得なかったのである。

さらに、レイディ・ハリエットがモリーの醜聞の真相をプレストンから聞き出したのちにも、ホリングフォードの人々にそれをあからさまに語ることは決してない。彼女は街の中を二回りほど、モリーとともに歩くのみである。肝心のモリーは、レイディ・ハリエットの意図を理解していないが、ホリングフォードの人々は彼女の意図を了解した。つまり、モリーには何ら道徳的な瑕疵はなく、彼女と交際することは何の問題もないことを、次のように街の人々に知らせたのである。

“And now, good-by, we’ve done a good day’s work! And better than you’re aware of.”

continued she [Lady Harriet], still addressing Molly, though the latter was quite out of hearing.
“Hollingford is not the place I take it to be, if it doesn't veer round in Miss Gibson's favour
after my to-day's trotting of that child about.” (561)

シンシアの秘密の真相は公に語られることなく、彼女を救済しようとして誤解されたモリーの醜聞の経緯も公にはならない。つまり、あからさまに語らないことが、ギヤスケルの描くホリングフォードであり、『コーンヒル・マガジン』の読者が望む社会であった。

結び

この小説の舞台が、ギヤスケルの子供時代である 1820 年代であることを想起しておきたい。三人称の語り手を用いて、ノスタルジーを喚起しながらも、1860 年代という新しい時代のヒロインであるシンシアを登場させている。⁴ それは、シンシアを気に入ったと評価したヘンリ・ジェイムズの批評を待つまでもなく、モリー・ギブソンのみでは、1820 年代ならいざ知らず、1860 年代の読者には、退屈な物語となったであろう。⁵ 煽情小説の流行と、刺激を求める読者の嗜好を熟知していたギヤスケルは、40 年前という半歴史小説の枠組みを用いて、家庭小説の復活、あるいは再生にかけたということではないだろうか。結果として、『妻たちと娘たち』は、エリザベス・ギヤスケルが書いた最良で最後の家庭小説となったのである。

注

本論は、第 34 回日本ギヤスケル協会全国大会（2022 年 10 月 1 日、於日本赤十字看護大学）における講演「エリザベス・ギヤスケルと煽情小説」に基づいている。

- 1 女性作家の煽情小説の分析は、松本三枝子「読む女：The Doctor's Wife by Mary Elizabeth Braddon」、「Lady Audley's Secret における二重人格を再考する」、「犯罪者／犠牲者である謎の女：Isobel Vane/Vine in East Lynne」、「『オーロラ・フロイド』とモダンニティーオーロラと彼女の秘密」を参照。
- 2 オリファントと煽情小説の関係については以下を参照。松本三枝子「マーガレット・オ

リファントの『セイレム・チャペル』—母親が物語を圧倒する』『愛知県立大学外国語学部紀要（言語・文学編）』 vol. 33, 2001, pp. 21–41.

- 3 煽情小説と女性読者の関係については、Mitchell, “Sentiment and suffering: women’s recreational reading in the 1860s”などが参考になる。女性参政権運動など社会における女性の地位向上の運動は普及していくが、すべての女性がそのような運動に参加できたわけではなかった。煽情小説はむしろ不満を抱えながらも、鬱屈した日常生活を送る女性たちのエネルギーを発散する場所を提供したと分析できる。
- 4 「当世風娘」（Linton “The Girl of the Period”）と称されるような新しい価値観を体現する女性たちが登場した時代でもあった。シンシアの造型にはそのような影響がみられる。
- 5 1866年に発表されたジェイムズの批評は、『妻たちと娘たち』を高く評価しつつ、ギャスケルの死の直後であったことも関係して、彼女の優れた評伝になっている。

Works Cited

- Braddon, Mary Elizabeth. *Lady Audley’s Secret*. 1862. Edited by David Skilton, Oxford UP, 1987.
- . *Aurora Floyd*. 1863. Edited by P. D. Edwards, Oxford UP, 1996.
- Gaskell, Elizabeth. *Wives and Daughters: An Every-day Story*. 1864–66. Edited by Angus Eason, Oxford UP, 1987. 東郷秀光、足立万寿子（訳）『妻たちと娘たち一日々の生活の物語』『ギャスケル全集6』、大阪教育図書、2006.
- James, Henry. “Miss Braddon.” *The Nation*, 9 Nov. 1865, Nemesvari and Surridge, pp. 592–98.
- . “Review of *Wives and Daughters*.” *The Nation*, 22 Feb. 1866, pp. 246–47.
- Linton, Eliza Lynn. “The Girl of the Period.” *Saturday Review*, vol.25,14 Mar.1868.
- Mitchell, Sally. ‘Sentiment and suffering: women’s recreational reading in the 1860s,’ *Victorian Studies*, vol. 21, 1977, pp. 29–45.
- Nemesvari, Richard, and Lisa Surridge, editors. *Aurora Floyd*. Broadview, 1998.
- Oliphant, Margaret. “Sensation Novel.” *Blackwood’s Edinburgh Magazine*. vol. 91,1862, pp. 564–84.
- Pykett, Lyn. *The “Improper” Feminine: The Women’s Sensation Novel and the New Woman Writing*. Routledge, 1992.
- Rae, W. F. “Sensation Novelist: Miss Braddon.” *North British Review*. vol.43,1865. Nemesvari and Surridge, pp. 583–92.
- Shattock, Joan, editor. *Women and Literature in Britain 1800–1900*. Cambridge UP, 2001.

Terry, R. C. *Victorian Popular Fiction, 1860-80*. Macmillan, 1983.

Tromp, Marlene. *The Private Rod: Marital Violence, Sensation, and the Law in the Victorian Britain*. UP of Virginia, 2000.

Wynne, Deborah. *The Sensation Novel and the Victorian Family Magazine*. Palgrave, 2001.

松本三枝子. 「読む女：The Doctor's Wife by Mary Elizabeth Braddon」『愛知県立大学外国学部紀要（言語・文学編）』vol.34, 2002, pp. 27-47.

—。「Lady Audley's Secret」における二重人格を再考する」『愛知県立大学外国学部紀要（言語・文学編）』vol.35, 2003, pp. 61-77.

—。「犯罪者／犠牲者である謎の女：Isobel Vane/Vine in *East Lynne*」『愛知県立大学外国学部紀要（言語・文学編）』vol.37, 2005, pp. 25-40.

—。「『オーロラ・フロイド』とモダニティ—オーロラと彼女の秘密」『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集』vol.16, 2015, pp. 65-83.

(愛知県立大学名誉教授)

Elizabeth Gaskell and the Sensation Novel

Mieko MATSUMOTO

This paper aims to clarify the tactics used by Elizabeth Gaskell in *Wives and Daughters*, a novel that emerged amidst the new popular culture of the 1860s, and compare her last domestic novel with the sensation novels, *Lady Audley's Secret* and *Aurora Floyd* written by Mary Elizabeth Braddon. *Wives and Daughters* was serialised in *The Cornhill Magazine* from 1864 to 1866, which is also the period when William Wilkie Collins's *Armada* was serialised in the same publication. The sensation novel was introduced with Collins's *The Woman in White*, and was established as a genre by Braddon's *Lady Audley's Secret*. The readership of novels was surprisingly expanded by the popularity of the sensation novel and the growth of the Victorian consumer society.

Thus, the 1860s were a turning point for Victorian novels and novelists, since the number and characteristics of novel readers clearly and dramatically changed during that time. Even established novelists such as Gaskell could not ignore those changes. Gaskell witnessed the transitions of her readership and responded to it in her own writing. This paper examines the strategy she used in *Wives and Daughters*, analysing her twin heroines of Molly Gibson and Cynthia Kirkpatrick while comparing them with Braddon's *Lady Audley* and *Aurora Floyd*. Gaskell presents Cynthia as a foil to Molly and transfers the main theme of the ethical trial from Cynthia to Molly. Specifically, Molly is foregrounded in the latter part of the novel, while Cynthia retires to the background.

In conclusion, the moral trial of the heroine remains a strong theme in Gaskell's novel-writing career as observed in her social and domestic novels. By transferring the status of the heroine from sensational Cynthia to domestic Molly, Gaskell highlighted the moral trial over the popular trend of sensationalism. It means that Gaskell dared to uphold the domestic novel over the popular sensation novel through her treatment of the twin heroines of sensational Cynthia and domestic Molly.

囁く母親たち

——「リジー・リー」における女性たちの言葉と沈黙——

早川 友里子

エリザベス・ギヤスケル (Elizabeth Gaskell) の短編作品「リジー・リー」(“Lizzie Leigh,” 1850) には家父長制を象徴する父親や夫らによって抑圧された3人の女性が描かれている。リジー・リー (Lizzie Leigh)、アン・リー夫人 (Anne Leigh)、そしてスーザン・パーマー (Susan Palmer) は、いずれもヴィクトリア朝のジェンダー規範に基づく献身的かつ自己犠牲的な母親としての役割を担っているという点で共通している。リジーは父親や恋人からも見捨てられた〈堕ちた女〉として苦しみながらも娘を想い続ける母親として描かれる。また、リー夫人は、母親としてリジーの身を案じながらも、夫に制限され、長い間リジーの行方を捜すことができずに葛藤する。一方、スーザンはリジーに託された娘を母親代わりとなって育てながら、横暴な父親に支配された生活を送っている。つまり、3人の女性は苦悩する母親であると同時に〈堕ちた女〉や〈家庭の天使〉などの画一的かつ抑圧的な女性像に縛られた、家父長制社会における被支配者であるという点で共通している。さらに、リジーとリー夫人、そしてスーザンは、いずれも自らを語る声を失うという点においても類似している。

本作はこれまで〈堕ちた女〉であるリジーが、リー夫人やスーザンなどの女性登場人物の慈悲や愛情を受け、贖罪を果たそうとする物語として読まれてきた。シャーリー・フォスター (Shirley Foster) は、リジーの罪を許そうとしない父親のジェイムズ・リー (James Leigh) に対するリー夫人の反抗は、従来のジェンダー規範を逸脱しており、男性の「罪と報い」(114) を求める厳しい姿勢に対抗する女性の「愛と赦し」(114) が描かれていると指摘している。また、モリス (Emily Jane Morris) も、リジーに対する男性登場人物と女性登場人物の対応の違いに着目し、前者の「頑なに敗北主義的」(40) な態度と後者の積極的な共感や問題の解決に向けた的確な行動力を比較している。そして、女性登場人物らの共感や率先した問題解決能力によって、リジーの悲劇は避けられることが示されていると

論じている (41)。

また、本作はリー夫人とリジーの母子関係に着目し、女性の抑圧された言葉という観点からも考察されてきた。マーガレット・ホームズ (Margaret Homans) は、リー夫人とリジーの間には父権制社会において抑圧されながらも、母と娘の間で交わすことのできる特別な母系言語 (matrilineal language) が見られると指摘している (226)。ホームズによれば、リジーの父親がかつてリジーに宛てた手紙が戻ってきたことからその存在を亡きものにしたこととは対照的に、リジーが娘に授けたアンという名前を記した手紙やリー夫人と共に買い求めたドレスの生地で作られた産着は、男性には解読し得ない母系言語の一種として母親に届く (228)。つまり、ホームズは女性の言葉が抑圧される父権制社会において、少なくともリー夫人とリジーの間には母親と娘としての特別な言語が成立していると論じている。これらの批評において一貫するのは、母と娘、または女性の間における強い連帯や共感が見出されている点である。

本作では、たしかにリジー、リー夫人、そしてスーザンがいずれも子を想い、苦悩する母親という共通する立場を通して共感し合い、互いに認め合う様子が描かれている。そして、それはリジーの罪が社会的な排斥をもって罰せられるべきではないことを訴えているようである。これは、リジーの道徳的な転落やナニーの死の原因が父権制を象徴する父親たちにあると示唆されていることから明らかである。しかし、最終的には、19世紀の家父長制社会において〈堕ちた女〉としての烙印を押され、社会的に周縁化されたリジーだけでなく、リー夫人やスーザンも語る声を失い、家庭という社会から隔絶された空間で沈黙する。さらに、その沈黙は他者から直接強いられたものではなく、母から娘へ引き継がれるか、自ら選択しているのである。本論では、これまで着目されることのなかった3人の女性の言葉と沈黙の表象をたどることで、苦悩する母親としての女性の連帯は極めて脆く、不安定であることが示唆されている点について考察する。その上で、ギャスケルが、本作を通じて自己犠牲的で献身的な母親などの19世紀における類型的かつ画一的な女性像を強いるジェンダー規範が女性に及ぼす影響についてどのように表現していたのかという点についても併せて考えていきたい。

1 3人の母親

1-1 リジー・リー

リジー・リーは、物語の冒頭から社会的に周縁化され、不可視化された存在として描かれる。これは、リジーの名前の喪失に象徴されている。田舎町から都市マンチェスターへと奉公に出た後に誘惑され、未婚のまま妊娠及び出産を経て売春に身を投じる〈墮ちた女〉となったリジーは、父親によって亡くなった者とされ、家族はその名を口にすることさえも禁じられる。名前を奪われることは社会性を失うことでもあり、リジーが家庭や社会から排除されていることが示されている。父親は亡くなる直前にリジーを許すことをリー夫人に伝えるが、その時も 'I forgive her' (131)¹ とだけ述べ、娘の名前を最期まで呼ぶことはない。家父長制を受け継ぐ長男ウィルも父親の考えに同調し、リジーが恥ずべき生き方をしているよりも亡くなっていた方が良いと漏らす。そして、家族に恥と悲しみをもたらしたリジーに対して、強い憤りと嫌悪感を示す (135)。母親のリー夫人だけは、娘の無事を願い探し続けるが、彼女でさえもリジーの名前を直接口にするのは夫が亡くなってからである。

また、リジーが社会的に不可視化された存在であることは、その身体が「影」として描かれているという点にも端的に表れている。リー夫人がマンチェスターの街をどれほど探してもリジーを見つけないことやリジーから娘を託されたスーザン・パーマーでさえもその顔を見たことがないということからも、リジーの身体や顔は、奪われた名前と同様にテキストから不自然なまでに排除されている。そして、リジーが娘の転落事故の直後に駆け付ける場面においても、彼女はスーザンと一体化した「影」(148)として、度々次のように表象されている。

Quickly she went; but as quickly a shadow followed, as if impelled by some sudden terror. Susan rung wildly at the night-bell,—the shadow crouched near. . .

‘For that God you have just spoken about,—for His sake—tell me are you Susan Palmer? Is it my child that lies a-dying?’ said the shadow springing forwards, and clutching poor Susan’s arm. (148 下線部筆者)

これは〈墮ちた女〉としてのリジーが〈家庭の天使〉としてのスーザンと対照

的であるようで、実際にはヴィクトリア朝のジェンダー規範に基づく女性像に縛られているという点で類似していることを暗示すると共に、リジーが社会においては常に光の当てられることのない、周縁化された存在であることが示唆されている。つまり、本作の題名にもなっているリジー・リーの名前や身体が、執拗なまでにテキストから排除されることで、リジーが〈墮ちた女〉として社会的に不可視の存在とされていることが強調されているのだ。

19世紀において、売春婦は性的にも道徳的にも墮落した、家庭や社会に混乱をもたらす社会悪であり、社会の犠牲者でもあると捉えられていた。売春婦は、梅毒や淋病などの性病の感染源であるとされただけでなく、不道德な生き方が周囲に悪影響を及ぼすと危惧され、排斥の対象となった。しかし、同時に、売春婦の中には貧困に苦しみ、必要に迫られて身を投じる者もいたことから、道徳的に更生させるべき対象でもあった。しかし、一度純潔を失い〈墮ちた女〉となると、貧困に陥り、病気で早くに亡くなるという最期は避けられず、その救済は極めて困難であるとされた (Atwood 7)。1840年代にエジンバラ性病院の医師であり、その後の売春に関する言説に多大な影響を及ぼしたウィリアム・テイト (William Tait) は、女性が売春に身を投じることでもたらされる弊害について端的に以下のように述べている。

It Depraves their Minds and Affections, Deprives them of the enjoyment and sympathies of Society—Involves them in the most abject Poverty and Wretchedness—Subjects them to the most loathsome and painful Diseases—Brings upon them premature Old age and early Death. (155)

リジーは、死は免れるものの、母親を除く家族から見捨てられ、社会においても居場所を失い、最愛の娘を亡くすという悲しみを経験することから、上述のような悲劇的な運命をたどっていたと言えるだろう。さらに、リジーは自らを「ひどく邪悪である」(149)と述べ、亡き娘に触れる資格もないと絶望するように、社会が規定した〈墮ちた女〉に対する身体的および道徳的にも汚れたイメージを内面化している。

その一方で、ウォーコウィッツ (Judith R. Walkowitz) が指摘するように、生活

のために自ら一時的に売春に身を投じる女性も多く、その大半は短命に終わることはなかった。このような現実があったにもかかわらず、19世紀の文学作品における売春婦が、苦悩の末に悲劇的な最期を迎えることが多かったのは、それが一種の警告としての役割を果たしていたからであると指摘されている (Morris 41)。例えば、モリスは、当時の小説に描かれる典型的な〈堕ちた女〉の苦しみは、家父長制社会における女性の経済的自立を道徳的及び身体的な墮落を伴う危険性があるものとして提示することで、既存のジェンダー規範を強化する側面があったと述べている (42)。一見すると、リジーはこのような解釈を強化するような典型的な〈堕ちた女〉として描かれているようである。しかし、本作は献身的かつ自己犠牲的な母親としてのリジーの姿やその沈黙及び社会的な孤立を前景化させることで、19世紀のジェンダー規範に内在する抑圧の構造を浮かび上がらせ、より革新的な教訓を示している。そして、それはリジーとスーザンやリー夫人との比較を通して見出すことができる。

1-2 スーザン・パーマー

リジーとは対照的に、スーザン・パーマーの名前や身体はテキストにおいて積極的に可視化されている。リジーの名前を口にすることやその存在さえも認めなかったウィルは、スーザンに対しては出会って間もない頃からその姿を見たいという衝動を抑えられず、蠟燭の光を側にかざしてまで眺めようとする (138)。さらに、リー夫人もスーザンに会いに行き、その優れた評判を耳にするだけでなく、直接言葉を交わし、急速に仲を深める。スーザンは純潔さや従順さなど、ヴィクトリア朝における理想的な資質を兼ね備えた女性である。横暴な父に反抗することなく、理不尽な叱責にも耐え、リジーに託された娘を我が子のように育てるスーザンは、未婚でありながらも既に献身的で従順な妻や母としての役割を十分に果たしている。また、スーザンはリジーに同情を寄せるとともに、彼女を頑なに許そうとしないウィルに対しても「優しさと慈愛がなければ真に善良であるとは言えない」(152)と諭そうとするなど、慈愛に満ちた道徳心をもつ女性である。ウィルがリジーを墮落した女性として非難する一方で、スーザンを天使のような高潔な女性と崇める様子からも、家父長制社会における2人の立場はあらゆる面で対極にあるように思われる。

しかし、スーザンとリジーは、母親として子どもに愛情を注ぐという点で共通している。リジーに託された生後間もない娘をナニーと名付け、父親の反対を押し切り、愛情深く育てるスーザンは、ナニーにとっては実の母親のような存在である。一方、リジーも身を削って稼いだお金を娘に届けることで、その知られざる場所で母親としての愛情を示し続ける。リジーの娘への贈り物は、自身が売春婦として生きていることの証であると同時に、良心と娘への愛情を象徴するものでもあり、リジーが完全に墮落していないことを表すものである。

スーザンとリジーが、共に1人の娘を想う母親であるということは、リジーが初めて発する“*For that God you have just spoken about, —for His sake—tell me are you Susan Palmer? Is it my child that lies a-dying?*” (148) という言葉からも示唆されている。リジーがテキストの中で初めて発する言葉が、子どもの安否を気遣うものであるという点からも、彼女が〈墮ちた女〉ではなく献身的な母親として前景化されていることは明らかである。突然現れた見知らぬ女性の問いかけに対して、スーザンはナニーを我が子のように育ててきたことに触れ、共に来るように促す。しかし、娘との無言の対面に嘆き悲しむリジーの姿を目にした時、スーザンは“*She is the mother!*” (149) と叫び、リジーをナニーの真の母親として認める。それは、スーザンがリジーから子を譲り受け、名前を与え、育てることで担ってきた母親としての役割を生みの親であるリジーに返した瞬間でもある。この再会の場面の前後で、それまで語り手によって名もなき「影」と表現されてきたリジーは、繰り返し“*the mother*” (149), “*the wild bereaved mother*” (149), “*poor mother*” (149), “*Nanny’s mother*” (152) として言及される。つまり、物語の冒頭から〈墮ちた女〉として名前を奪われ、テキストにおいても社会的にも不可視の存在として周縁化されていたリジーは、「母親」、それも「子どもを失った憐れむべき母親」という新たな呼称とアイデンティティを与えられることで、初めて可視化されるのである。そして、この呼称はリジーだけでなく、ナニーを失うスーザンや一時的にリジーを失うリー夫人にも合致することから、3人の女性を結び付けるものでもある。つまり、3人は失った子どもを想い続ける献身的で愛情深い母親としての繋がりがあることが描かれている。これはリジーがリー夫人と再会する場面からも明らかである。

1-3 アン・リー夫人

リー夫人がリジーと対面した時、リジーは娘を想い続ける母親として描かれている。既に亡くなっているかもしれない娘の行方を懸命に探し、その危機に駆け付けるリー夫人は、いつ再会できるかも分からない娘ナニーのためにお金を届け、事故の直後にはその亡骸を抱きしめるリジーの姿と重なる。また、リジーとリー夫人が母親として子どもに向けるまなざしや行動がほぼ同一の単語や表現を用いて描かれているという点からも、2人が親子である以上に、母親としての繋がりが深いことが示唆されている。

リジーと娘ナニー

She stood with wild glaring eyes by the bedside, never looking at Susan, but hungrily gazing at the little white still child. She stooped down, and put her hand tight on her own heart, as if to still its beating, and bent her ear to the pale lips. (148)

リー夫人と娘リジー

She stood looking at her with greedy eyes, which seemed as though no gazing could satisfy their longing; and at last she stooped down and kissed the pale, worn hand that lay outside the bed-clothes. (151)

リジーはナニーを「むさぼるように見つめ」(148)、「身をかかめて」(148)娘の身体に触れ、口元に耳を寄せるが、リー夫人も同じように娘を「飽くことのない」(151)、「貪欲な目」(151)で見つめ、その手に口づけをする。リジーとリー夫人のそれぞれの娘に対する一挙手一投足は、まるで互いをなぞるように一致している。それは、リジーがナニーのもとへと走るスーザンの影のように一体化した様子を彷彿とさせ、改めて3人の女性が母親として結びついていることを暗示している。

そして、娘の死後もリジーは墓前に通い、娘の側に寄り添う献身的な母親として描かれる。つまり、物語の終わりでは、リジーは身体的にも道徳的にも墮落したとされた売春婦としてではなく、子どもを失い、絶望しつつも懸命に生きようとする母親として描かれることで、スーザンやリー夫人と類似する母性的な存在

として表象される。ギヤスケルの作品では、『メアリ・バートン』(Mary Barton, 1848)のカーソンとジョン・バートンの和解が互いに子供を亡くしたことへの悲しみに共感したことがきっかけであったように、しばしば子どもを失った悲しみは、階級など様々な社会的分断や軋轢を超越し、時に和解を促すものとしても描かれるが、「リジー・リー」においても子どもを失った母親の痛みは、リジーとリー夫人、そしてスーザンとの間に子を想う母親としての連帯を生むものであり、リジーを〈墮ちた女〉という烙印から一時的に解放するものである。

このように、冒頭から不可視の存在とされていた〈墮ちた女〉としてのリジーは、娘の死を嘆き悲しむ献身的な母親として可視化される。また、スーザンはウィルと結婚して子どもをもうけ、リー夫人は娘を取り戻して共に暮らすことで、それぞれが家庭という私的領域の中で母親としての役割に従事し、一見平穏に暮らす様子が描かれる。したがって、本作はリジー、スーザン、そしてリー夫人の母親としての姿を通して、既存のジェンダー規範に基づく女性像を肯定し、強化しているようにも読み取れる。しかし、リジーの表象を巡る不自然なまでに極端な変化は、家父長制社会におけるジェンダー規範に基づき、女性が強いられる〈墮ちた女〉や〈家庭の天使〉などの二項対立的な女性像の抑圧的かつ支配的な側面を浮かび上がらせていると考えられるのではないだろうか。さらに、本作の語りの中に描かれる3人の女性らの声や沈黙を辿ると、3人の連帯の不安定さだけでなく、それぞれの社会的な孤立が垣間見えてくる。

2 母親たちの嘔きと沈黙

リジー、スーザン、そしてリー夫人は、社会や家庭においても語りを制限され、時に黙殺されているという点において類似している。例えば、リー夫人はリジーの身を案じ続けていたが、夫ジェームズからリジーのことを探しに行くことや無事を祈ること、さらには名前を口にすることさえも禁じられる。リジーをマンチェスターに奉公に出すことを決めたのはジェームズであったにもかかわらず、娘に手を差し伸べることを頑なに拒み、家族の行動をも支配する夫の様子に、リー夫人は不満を募らせ、静かに抵抗する。しかし、その不満や抵抗は言語化されることなく、リー夫人の胸の中で言葉にならない「つぶやき」(131)として留められる。

But for three years the moan and the murmur had never been out of her heart; she had rebelled against her husband as against a tyrant, with a hidden, sullen rebellion, which tore up the old land-marks of wifely duty and affection, and poisoned the fountains whence gentlest love and reverence had once been for ever springing. (131)

そして、夫が亡くなる直前にリジーを許すと、リー夫人は夫を称え、愛と尊敬の念を新たにするだけでなく、彼に対する不満を抱いたことさえも後悔する (131)。リー夫人は娘と自身の言葉を奪われてもなお、家長である夫に従順な妻であろうとすることから、家父長制社会におけるジェンダー規範を強く内面化していると言えるだろう。

これは、スーザン・パーマーにも見られる傾向である。後に夫となるウィルと出会った際にも、スーザンはほぼ言葉を交わさず、沈黙したままナニーと共に部屋にこもってしまう。その後もウィルと父親の会話を遮ることなく家事や育児に取り組み、稀に話す時も静かな囁きに終始するスーザンの控えめな姿に、ウィルは純潔な女性らしさを見出し、魅了される。

She never spoke much; she was generally diligently at work; but when she moved, it was so noiselessly, and when she did speak, it was in so low and soft a voice, that silence, speech, motion, and stillness, alike seemed to remove her high above Will's reach, even as she knew him! (138)

しかし、スーザンは一度だけウィルに対して毅然とした態度で発言する場面がある。それは、ウィルがリジーやリー夫人に対する頑なな態度を崩そうとしないことに対して、慈悲深さを示すように諭す時である。この際、ウィルはスーザンの強い口調や言葉に明確な拒否感を表す。

‘... Thou hast spoken out very plain to me; and misdoubted me, Susan; I love thee so, that thy words cut me. If I did hang back a bit from making sudden promises, it was because not even for love of thee, would I say what I was not feeling; and at first I could not feel all at once as thou wouldst have me. But I'm not cruel and hard; for if I had been, I

should na' have grieved as I have done.'

He made as if he were going away; and indeed he did feel he would rather think it over in quiet. But Susan, grieved at her incautious words, which had all the appearance of harshness, went a step or two nearer—paused—and then, all over blushes, said in a low soft whisper—

'Oh Will! I beg your pardon. I am very sorry—won't you forgive me?'

She who had always drawn back, and been so reserved, said this in the very softest manner; with eyes now uplifted beseechingly, now dropped to the ground. (152)

ウィルはリジーに対して冷酷な態度を取り続けてきたにもかかわらず、それを正当化するだけでなく、改心を促したスーザンの言葉によって傷つけられたと述べている。ウィルの理不尽な言葉を受け、スーザンは反論するのではなく、直ちに「不用意」(153)で「酷い」(153)発言をしたことに対して許しを請う。そして、その後スーザンはリジーのために声を上げることがなくなるばかりか、スーザンの声そのものがテキストから消失する。物語の結末において、スーザンはウィルと結婚し、子宝にも恵まれ、周囲を明るくする〈家庭の天使〉のような存在であることが記されるが、その声は沈黙したままである。

一方、リジーの声が制限されていることは、彼女が娘と再会する直前まで〈墮ちた女〉としてテキストから存在自体を排除されていることから示されている。リジーが初めて言葉を発するのは、娘の危機に駆け付け、物言わぬ「影」から「母親」という新たな呼称を与えられてからである。リジーは娘の死を嘆くあまりスーザンを問いただすなど錯乱状態に陥り気を失うが、意識を取り戻した際には娘を抱かせてもらうよう懇願する。この時、スーザンはリジーの声が別人のように穏やかに変わったことに気が付く。

'I am not worthy to touch her, I am so wicked; I have spoken to you as I never should have spoken; but I think you are very good, may I have my own child to lie in my arms for a little while?'

Her voice was so strange a contrast to what it had been before she had gone into a fit, that Susan hardly recognized it; it was now so unspeakably soft, so irresistibly pleading, the

features too had lost their fierce expression, and were almost as placid as death. (149)

そして、リジーは亡くなった娘に微笑みかけ、顔を撫でながら「柔らかに、優しい言葉を囁く」(150)。まるで娘が生きているかのように囁きかけるリジーの様子は、スーザンがナニーを、そしてリー夫人がリジーを赤子のように抱き、悲しみを癒すように静かに言葉をかけ続ける愛情深い母親としての姿を想起させる。こうして、無名の「影」からナニーの「母親」という呼称の変化に伴い、リジーは〈堕ちた女〉としてではなく、母親として、その語りや姿が可視化されるのである。

しかし、リジーの声もやがてテキストから失われていくこととなる。リジーを沈黙させるのは、他ならぬ母親のリー夫人である。リー夫人は、リジーの失踪後、幻聴を耳にするほど娘の声を聴くことを切望していたと述べている。

‘And often, when the south wind was blowing soft among the hollows, I’ve fancied (it could but be fancy, thou knowst) I heard her crying upon me; and I’ve thought the voice came closer and closer, till at last it was sobbing out “Mother” close to the door; and I’ve stolen down, and undone the latch before now, and looked out into the still black night, thinking to see her,—and turned sick and sorrowful when I heard no living sound but the sough of the wind dying away.’ (134)

しかし、リジーと再会を果たし、いよいよその声を再び聴くことのできる機会を得たリー夫人は、リジーに次のように述べ、言葉を発するのではなく沈黙を促すのだ——‘Whate’er thou art or hast been, we’ll ne’er speak on’t. We’ll leave th’oud times behind us, and go back to the Upclose Farm.’(153)。リジーの声を耳にすることを強く望んでいたはずのリー夫人だが、娘の〈堕ちた女〉としての語りを聞くことは拒むのである。そして、リジーの代わりに犠牲的な死を遂げる娘ナニーがその役目を天国で担ってくれるだろうと述べている (153)。²

19世紀において〈堕ちた女〉として一度墮落してしまうとその救済は極めて困難であるとされたように、リー夫人はリジーの罪が家父長制社会において許されることはなく、神に赦しを祈るほかに道はないと認識している。リジーも母親の言葉通りに、地域から隔絶された小屋で隠遁生活を送りながら、苦難や病に見

舞われた人々の話を聞き、娘の墓前で祈りを捧げ続けるが、自らの言葉で語ることはない。リジーが沈黙を守らざるを得ないことから、彼女の語りに耳を傾け、その存在を真に許し、受け入れる相手や社会が存在しないということが暗示されている。リジーは、父親から奪われた自身の声を取り戻す機会を失ったまま、母親からも言葉を封殺され、人里離れた丘に埋葬された娘に言葉にならない祈りを捧げることしかできないのである。そこには、沈黙と共にリジーの母親としての深い孤独が垣間見える。そして、そのような孤独はスーザンやリー夫人にも見られるのだ。

本作の終わりでは、スーザンとリー夫人はいずれも仕事に従事せず、母親として家庭の領域に収まっている。学校で教えていたスーザンも、農場の運営をしていたリー夫人も既にかつての仕事に携わっている様子はない。そして、スーザンは、ウィルと結婚し、ナニーと同じ名前を授けた子どもを含む複数の子供たちを育てている。その結婚生活の内情は明らかにされないが、ウィルがスーザンの父親と同様に、自己中心的な横暴さを秘めている人物であることは示唆されている。例えば、スーザンの父親がナニーの死を娘の責任とし、自身の怠惰で冷酷な態度を悔い改めようとしなかったように、ウィルもスーザンからリジーに対する思いやりのなさを指摘されても、自身の姿勢を正当化し、スーザンを責めるなど、2人には類似する部分がある。また、ウィルは、実の父親と同様に、家父長制社会におけるジェンダー規範に沿った女性性を求める傾向が強いことも示唆されている。そのような男性と結ばれ、妻として、母として家庭に入ったスーザンは、周囲から「恵まれている」(155)と評されるが、自ら沈黙を選んだスーザン自身の言葉がテキストで語られることはない。

また、リー夫人もリジーを取り戻したものの、夫から譲り受けた農場は息子へと渡り、社会から隔絶された場所で隠れるように過ごしている。娘のリジーに沈黙を促したリー夫人であるが、彼女自身が内面化し、強化してきた家父長制社会におけるジェンダー規範によって縛られていることは言うまでもない。そして、それはリー夫人が半ば盲目的に娘リジーの転落へとつながった夫の責任から目を背け続けるという点にも見出せる。ジェームズ・リーが世間知らずの娘を奉公に出したことや、身を落とし、行方が分からなくなったリジーを探すことを禁じたことが明らかにされるが、その責任が追及されることはない。また、リジー

に対して、父親が亡くなる前に娘を許すことを明言したことを伝えるものの、その頑なで非情な態度がリジーの苦しみを深めたであろうことについての慰めや共感の言葉は一言も述べられない。つまり、リー夫人は父権的な力を象徴する夫を完全に否定することができないばかりか、夫が亡くなってからもなお、その力に支配されているのである。したがって、自らがかつて夫からリジーの名前を口にするのを禁じられるなど、沈黙を強いられたように、リー夫人も同様にリジーに沈黙を強いるのである。そして、それは、リー夫人がリジーの苦しみに真に寄り添い、共感し、その罪や孤独を癒すことはできないことを意味する。

これまで見てきたように、リジー、スーザン、そしてリー夫人は社会や家庭においても言葉を制限されるという点で共通する。スーザンとリー夫人は家父長制のジェンダー規範を強く内面化し、夫の言葉に従い自ら沈黙すると共に、間接的にリジーの語りをも抑制する。つまり、抑圧的な父権制社会において、子どもを失った母親として支え合い、強く結びついていたように見られた3人の女性の連帯は、語りのレベルでは既に分断されているのだ。

3 結論

本論では、エリザベス・ギヤスケルの「リジー・リー」における3人の女性登場人物に着目し、それぞれの母親としての表象や連帯、語りにおける言葉と沈黙の表象について考察した。初めに、物語の冒頭では〈墮ちた女〉としてテキストから排除され、不可視の存在とされていたリジー・リーが、後半ではスーザン・パーマーやアン・リー夫人と同じように献身的な母親として可視化される点に着目し、本作が〈墮ちた女〉及び献身的な母親としてのリジーの表象を巡る極端な変化を描くことで、家父長制社会において女性が強いられた二項対立的な女性像の不自然かつ抑圧的な側面を浮かび上がらせていることを指摘した。

その上で、本作の語りにおける3人の女性登場人物の言葉や沈黙について比較し、〈墮ちた女〉であるリジーだけでなく、理想的な母親像を体現するスーザンやリー夫人も社会や家庭において最終的に語る声を失っているという点について考察した。さらに、3人の母親たちの沈黙は、家父長制のジェンダー規範を強く内面化した母リー夫人から娘のリジーへと引き継がれるものであり、スーザンやリー夫人が自ら選択するものでもある。つまり、3人の女性の連帯は、内側から

瓦解する可能性をもつ、極めて不安定なものであることが露呈するのである。

さらに、家庭に入った3人の女性の沈黙からは、公的領域からの女性の疎外やそれに伴う女性の社会的な声の喪失に対するギaskellの批判的な視点を見ることができる。本作の終わりでは、リジー、リー夫人、そしてスーザンは、共に母親という役割を担い、公的領域からは隔絶された家庭の中で沈黙する姿が描かれているが、そこにはギaskellがヴィクトリア朝の女性作家として感じたであろう公的領域において女性が語ることへの恐れやためらいが反映されているようである。「リジー・リー」が『メアリ・バートン』や『ルース』(Ruth, 1853)と並び、〈墮ちた女〉を描いた作品であるように、ギaskellは社会問題を多く扱った女性作家である。また、実際に売春婦を救済する慈善活動にも積極的に取り組んでいたことはよく知られている。³ ギaskellは、女性が公的な領域で男性と同様に活躍する権利があると考えていたからこそ、階級間の軋轢や売春という社会問題と化していたテーマを積極的に作品に取り上げたのだろう。それと同時に、ギaskellはこのような社会問題に通底する階級間格差やジェンダー規範に基づく男女間格差をも認識していたと考えられる。本作では、リジーの社会的な救済の方法は明確に示されていないが、〈墮ちた女〉という立場にあるリジーだけでなく、理想的な母親像を体現するスーザンやリー夫人の沈黙や公的領域からの疎外、母親たちの連帯の瓦解という結末を通して、女性が既存の抑圧的なジェンダー規範から逃れることの難しさを示していると言えるのではないだろうか。

注

本稿は日本ギaskell協会第34回大会(2022年10月1日、於日本赤十字看護大学)における研究発表に基づき、加筆修正したものである。

- 1 全ての引用はElizabeth Gaskell. "Lizzie Leigh." *The Works of Elizabeth Gaskell*, vol. 1. Abingdon: Pickering&Chatto, 2017による。
- 2 一言も発することなく亡くなるリジーの娘も家父長制社会の不寛容によって命も声も奪われた存在である。また、リジーは娘のことを生まれてから名付けた「アン」という名前では呼ぶことはない。リー夫人やスーザン・パーマーも亡くなった娘のことを「アン」という名前ではなく、スーザンが名付けた「ナニー」という名前では呼ぶ。これは、リジー

の娘がリジーの罪とはかけ離れた、純真な存在として育てられ、亡くなったことを示唆している。

- 3 ユニテリアン派の牧師の夫と共に慈善活動に参加していたギヤスケルは、1849年にマンチェスターの刑務所で出会った若い売春婦の亡命を模索し、同問題に関心が高かったディケンズにも相談を寄せている。ギヤスケルは、彼女が幼い時に父親を亡くし、無関心な母親の下で適切な教育や愛情を受けずに育ったことなどを丁寧に手紙に記すなど、その境遇に同情と慈愛のまなざしを向けている。(Letters 99)

引用文献

- Atwood, Nina. *The Prostitute's Body: Rewriting Prostitution in Victorian Britain*. Routledge, 2016.
- Chapple, J. A. V., and Arthur Pollard, eds. *The Letters of Elizabeth Gaskell*. Mandolin, 1997.
- Foster, Shirley. "Elizabeth Gaskell's shorter pieces." *The Cambridge Companion to Elizabeth Gaskell*. Edited by Jill L Matus. Cambridge UP, 2007, pp. 108-130.
- Gaskell, Elizabeth. "Lizzie Leigh." *The Works of Elizabeth Gaskell*, vol. 1. Pickering & Chatto, 2017.
- Homans, Margaret. *Bearing the Word: Language and Female Experience in Nineteenth-Century Women's Writing*. U of Chicago P, 1986.
- Morris, Emily Jane. "'Ready to hear and to help': Female agency and the reclamation of the fallen woman in Elizabeth Gaskell's 'Lizzie Leigh.'" *The Gaskell Journal*, vol. 23, 2009, pp. 40-53.
- Tait, William. *Magdalenism: An Inquiry into the Extent, Causes, and Consequences of Prostitution in Edinburgh*. P. Rickard, 1840.
- Walkowitz, Judith R. *Prostitution and Victorian Society: Women, Class, and the State*. Cambridge UP, 1980.

(大妻女子大学専任講師)

Whispering Mothers: Reading Women's Speech and Silence in "Lizzie Leigh"

Yuriko HAYAKAWA

This paper examines the representation of three main female characters in Elizabeth Gaskell's "Lizzie Leigh" (1850): Lizzie Leigh, Anne Leigh and Susan Palmer. Lizzie, who is labeled as a fallen woman, initially lacks visibility in the text, as her name and body are almost entirely eradicated from the narrative, whilst Anne and Susan are impervious to such exclusion. However, Lizzie gains visibility as she assumes the role of the self-sacrificing and devoted mother. In fact, these women are similar in that they are all portrayed as grieving mothers who have experienced a temporary or permanent loss of their child. As critics have pointed out, they seemingly form a strong bond amongst each other that helps Lizzie to vindicate herself of her sins as a fallen woman.

However, it is possible to construe a different reading by examining the representation of the speech and ensuing silence of the three women in the novel. All three women's voices are subjected to restriction and subsequently subsumed into a form of enforced or self-enforced silence, suggesting that all women, whether they are demonized as a fallen woman or idealized as a pure "Angel in the House," are at the risk of losing their voices in Victorian patriarchal society. Moreover, their apparent bond as a band of grieving mothers turns out to be exceedingly fragile, as all of the three women are isolated in their silence in the end. Hence, the paper argues that Gaskell's "Lizzie Leigh" is a radical work in that it implicitly shows the restrictive and harmful nature of Victorian gender ideologies and its effects on women through the representation of their speech and silence.

『ラドロー卿の奥様』における 包摂的社會の構築とその限界

玉井 史絵

1 はじめに

いかに階級間の分断や争いを克服し調和的・包摂的社會を築くかという問題意識は、ヴィクトリア朝を通じてほぼすべての作家に共有されていたと言っても過言ではない。工業都市マンチェスターで人生の多くの時を過ごし、ユニテリアン牧師の妻として慈善事業に関わるなかで、日々虐げられ貧困に喘ぐ労働者階級の人々を目の当たりにしてきたギヤスケルにとって、この問題はとりわけ切実であった。階級対立に対するギヤスケルの強い関心は、『メアリ・バートン』(*Mary Barton*, 1848) や『北と南』(*North and South*, 1854-55) といった同時代の工業都市の生活を描いた作品ばかりではなく、それ以外の作品においても示されている。その一つが『ラドロー卿の奥様』(*My Lady Ludlow*, 1858) である。『ラドロー卿の奥様』は工業化以前の田園イングランドを舞台とした中編小説で、1800年前後の農村社會の変容を郷愁と共に描いている。封建的かつ階層的社會秩序を信奉するラドロー夫人が、徐々に改革の必要性に目覚め、より平等でリベラルな社會秩序を受け入れていく過程が、時にユーモアやアイロニーを交えつつ語られる。この小説は過去の出来事を描いた歴史小説のバリエーションとして分類できるが、階級間の緊張という同時代の問題を扱った小説として読むこともできる。

これまで『ラドロー卿の奥様』はあまり批評家の注目を集めてこなかったが、19世紀における包摂的社會の構築や、その矛盾と限界を考える上で興味深い作品である。パム・モリスは19世紀イギリス社會には大きく二つの社會構造の変容が起きたと指摘する。1840年代から1850年代にかけて起きた第一の変容では、それまで自然なものとして受け入れられていた社會階層が揺らぎ、異なる階層の様々な声が包摂されて社會が発展するという認識が広く共有されるようになった。これに対して1860年代後半ごろから始まる第二の変容では、こうした包摂の理想が拒絶され、大衆と文化的優越を誇る中・上流階級の人々の間での再階層

化が進んだ(16-17)。1850年代末に書かれた『ラドロー卿の奥様』はこれら二つの変容を表している。表面的にはこの小説は、階級、地位、ジェンダーに関係なく、社会のすべての構成員が尊重される包摂的社会の構築を描いた物語であると解釈できる。波多野葉子氏の議論に見られるようにこれまでの批評では、女性や下層階級の人々の包摂という小説の革新的側面が強調されることが多かった。確かにこの小説は革新的要素を多分に含んでいるが、同時に社会の深層に潜む不満と分断を示唆しており、包摂的社会からの後退を示す第二の変容の兆しを捉えている。

ギヤスケルのキャリアにおいて1850年代末は、様々な社会問題を扱った前期の小説群と、歴史的時空のなかでの女性の人生に焦点をあてた後期的小説群との狭間の時期にあたる。それはギヤスケルが、「ジェンダー、信仰、権威、権力、そして痛みといった困難な問題に立ち向かった」時期であったと、ジェニー・ユグローは言う(459)。そのような時期に執筆された『ラドロー卿の奥様』は、ミドルクラスの女性作家が、理想化された過去のイングランドにおいてさえ、真に包摂的な社会を想像／創造することがいかに困難であったかを物語っている。以下の議論では、まず作品における包摂的社会構築のプロセスを分析し、次にその過程で露呈する矛盾や社会の分断について考察する。

2 包摂的社会の構築

『ラドロー卿の奥様』は、ある登場人物の語りのなかに別の登場人物の語りが幾重にも埋め込まれるという、枠物語の構造を持つ小説である。まず、病気の治療を受けるため親元を離れ家庭教師と共にエジンバラに小さな部屋を借りて住むグレートレクス嬢の語りで物語は始まる。物語全体は、グレートレクス嬢の主治医ドーソン氏の妹、マーガレット・ドーソンが語るラドロー夫人にまつわる昔話を、グレートレクス嬢が記録したという体裁を取っている。そのドーソンの語りのなかにも、ラドロー夫人によるフランス革命期の回想が埋め込まれ、その回想のなかには、さらにフランスでの出来事を目撃した人々の証言が埋め込まれるというように、様々な登場人物の語りが交錯して物語は進展する。現代のグレートレクス嬢から、一世代前のドーソン、さらにもう一世代前のラドロー夫人へと移る重層的語りの構造は、徐々に読者を過去の世界へと誘い、時代の流れと変化を

読者に印象づける効果を生み出している。

時代の変化の中心をなすのは、封建制度の名残をとどめる保守的階層社会から、人々が水平的な絆で結ばれた包摂的社会への移行である。この変化をもたらす人物として重要なのが、新しくハンバリーの教区司祭に着任したグレイ氏である。彼は改革の熱意に燃え、貧しい子どもたちのための学校建設の必要性を訴える。

[W]hile I lived at Hanbury Court, the cry for education was beginning to come up: Mr. Raikes had set up his Sunday-schools; and some clergymen were all for teaching writing and arithmetic, as well as reading. My lady would have none of this; it was levelling and revolutionary, she said. (32)

このような描写は、18世紀から19世紀にかけてのイギリスの状況を踏まえている。日曜学校を設立する動きはロバート・レイクスによって1780年から始められた。しかし、フランス革命前後の時代、保守層の多くはトマス・ペインの『人間の権利』(*The Rights of Man*, 1791)のような扇動的書物によって民衆が革命的思想を持つのを恐れ、彼らの識字教育に否定的であった(Altick 67-77)。ラドロー夫人の識字教育に対する強い不安も、物語中盤で語られるフランスの友人ド・クレキ一家を襲った革命の悲劇の経験に基づいている。一家の悲劇の原因となったのは、識字能力を身につけた召使の子どもであったからである。ラドロー夫人の考えは、世紀の変わり目の典型的な保守層の姿勢を表している。

ラドロー夫人が考えを改める契機となるグレイ氏との関係には、モリスが第一の社会変容と密接に関わると指摘する「礼節の規律」(the code of civility)から「誠実の規律」(the code of sincerity)への移行が見られる。ハーバーマスのいう18世紀の公共圏が上流階級の礼節を基礎に成立したのに対し、19世紀の包摂的社会を可能としたのは、多様な人々が階層や従属関係に捕らわれず平等な関係で結ばれる誠実の規律であったとモリスは主張する。「誠実」とは互いの人格に対する尊重を意味する。新しい規律においては、相互の信頼と尊敬によって地位や階級の違いは乗り越えられるとして、率直な意見交換が重んじられた(17-22)。ラドロー夫人とグレイ氏との関係の変化には、この誠実の規律という理想への志向が見られる。物語の前半、ラドロー夫人は礼節の規律を守る保守的貴族の典型として描

かれている。「奥様はめったにご自分の感情を話すことはありませんでした」とドーソンは回想する。「なぜなら、そもそも奥様は身分の高い方ですから。身分の高い人は同じ身分の人以外には自分の感情について話さないし、同じ身分の人にさえ、よほどの時を除いては感情を隠すものだ」と、奥様はよくおっしゃってられました」(63)。直接的な感情の表出を控える上流階級の礼節の規律は、物言わずとも相互理解が可能な同質性の高い閉鎖的社會においては機能するが、異なる社會階層に属する多様な人々との關係においては機能しない。グレイ氏は貴族社會の礼節の規律に対抗すべく、誠実の規律をもってラドロー夫人と対峙する。

“My lady, I want plain speaking. I myself am not accustomed to those ceremonies and forms which are, I suppose, the etiquette in your ladyship’s rank of life . . . Among those with whom I have passed my life hitherto, it has been the custom to speak plainly out what we have felt earnestly.” (177)

グレイ氏は続けて、無知で粗野な教区の子どもたちの悲惨な状況をラドロー夫人に訴える。グレイ氏の「率直な話」(177)を受けて、ラドロー夫人の態度は少しずつ変化していく。物語の進展に伴い、礼節を重んじつつも旧い規律に捕らわれず、グレイ氏の誠実さを正当に評価できる夫人の柔軟性と寛容さが強調されるようになるのである。こうした変化は、結核が悪化したグレイ氏に代わって一時的に教区司祭の地位に就いたクロス氏に対する夫人の態度にも表されている。「奥様は個人的には率直で、誠実で、謙虚なお方でしたので、クロス氏の媚びへつらいには我慢ができなかったのです」(193)と述べるドーソンは、ラドロー夫人のグレイ氏に対する密かな感謝と評価を感じ取っている。

誠実の規律の根底にはアイデンティティの概念に対する根本的な変化があったと、モリスは論じる。18世紀においてアイデンティティは公共の場で礼節を演じることで形成されたが、19世紀に入ると、個人の持つ固有の内面性こそがアイデンティティだと考えられるようになった。そして、この目に見えない「内面」を表す手段として成立したのが誠実の規律であった(18)。『ラドロー卿の奥様』では、階級の違いを超えて互いがその内面性を確認し合うことによって、人々の対等な關係が築かれていく。その顕著な例を、ラドロー夫人と貧民の子供ハリー・

グレグソンとの関係の発展に見ることができる。ハリーは最下層の家庭に生まれるも、ハンベリー・コートの執事ホーナー氏によって教育を施され、最終的には学校の教師へと出世する、包摂的社会的象徴とも言える人物である。最初は「スカイ・テリア」や「ジプシー」にも譬えられるハリーだが(186)、生死に関わるような大怪我と、主人ホーナー氏との死別という二つの経験を経て、より深い内面性を獲得する。ラドロー夫人と再会したハリーの顔には「より洗練されて穏やかな表情」(214)が浮かんでいたとドーソンは感じる。この時、ラドロー夫人もまた、一人息子を失った悲しみにくれていた。ラドロー夫人とハリーは、身近な人の死という共通の経験を土台とし、互いに内に秘めた悲しみを表現することで、身分差を乗り越えて心を通わせる。夫人はハリーに、「かわいそうな子。この前会って以来、お前は危うく命を落とすような目に遭ったのね・・・そして、ホーナーさんという親切な良い友を亡くしたのね・・・私もそう。ホーナーさんは私たち両方にとって、親切な良い友人だったの」(215)と語りかける。地位や財産といった「外面」ではなく、人間に共通であるべき「内面」の触れ合いがこの場面では強調される。「病氣と死を想うことは私たちの多くを紳士淑女に変えてしまうのです」(214)とドーソンは語るが、内面の共通性が外面の違いを無化するのである。

結果としてハンベリー・コートの領地は、貧民の子ども、私生児、非国教会教徒など多様な人々が構成員として認められる包摂的社會へと変容していく。このような穏やかな変化は、物語に埋め込まれたフランス革命の急進的破壊的な変化と対比され、イギリス的社會進歩のあり方を提示している。民衆の暴力的革命に依ることのない穏健な民主主義社會への変容の理想が示されているのである。

3 「共感」と自己滅却

これまで見てきたように『ラドロー卿の奥様』では、人々が違いを超えて平等な関係で結ばれる包摂的社会的理想が実現したかに見える。しかし、小説は同時にその社會の根底に潜む矛盾や人々が密かに抱くルサンチマンをも描いていて、真に包摂的な社會を構築することの困難さを示唆している。

ギヤスケルの作品において社會問題を解決し包摂的社會を実現する鍵となるのは、他者との共感である。ギヤスケルにとっての共感とは、小説の原点とも言うべき感情であった。最初の小説『メアリ・バートン』の序文でギヤスケルは、労

働者階級の人々への共感こそが、彼女を書くという行為に駆り立てた契機となったと述懐する。「明らかに他の誰よりも激しく理不尽に仕事と欠乏の間で振り回され、状況に翻弄され、もがき続けるよう運命づけられている、疲れ切った人々に対して、私はいつも深い共感の念を抱いてきた」(3)とギヤスケルは述べ、次のように続ける。

The more I reflected on this unhappy state of things between those so bound to each other by common interests, as the employers and the employed must ever be, the more anxious I became to give some utterance to the agony which, from time to time, convulses this dumb people; the agony of suffering without the sympathy of the happy, or of erroneously believing that such is the case. (3)

ここでギヤスケルは、「声なき人々」の苦しみを代弁することによって、階級間の分断を克服する意志を表明すると同時に、自身の共感力が他の「幸福な者たち」には欠如していることを暗に示し、作家としての存在意義を強調している。ヒラリー・M・ショアは、ギヤスケルの共感力は子供を見守る母のような母性的共感であると指摘する(32-35)。ギヤスケルは妻、母として家庭を持つ女性であることに特別な意味を見出した作家であった。共感を示すことによって社会の分断を克服しようとする試みは、女性作家としての強みを遺憾なく発揮できる分野でもあったからである。しかし、そこには同時に男性作家とは異なる困難さもあった。ブラドリー・ディーンはギヤスケルがディケンズのような男性作家と決定的に異なるのは、ギヤスケルが作家としての自己表現よりは、むしろ自己滅却に徹した点だと主張する(118)。他者の立場に立ち他者の声を代弁しようとする共感、自己の声を抑制し滅却することへとつながる。利他的な愛情こそが女性の美德とされた時代にあつて、自己滅却的な共感の語りは、女性作家としての地位を確立する手段であると同時に、自由な自己表現の可能性を奪い、さらには女性の登場人物たちにも同様の自己滅却を強いるものでもあった。

『ラドロー卿の奥様』において、女性たちが書き語る行為は自己表現を目的としたものではない。グレイトレクス嬢はドーソンの語りを書き記し、ドーソンは「長らく真の優しい友であり恩人」(18)であったラドロー夫人について語る。そ

して、ラドロー夫人はド・クレキー家の悲劇を思い起こすために語る。いずれも他者の声を自らの語りのなかに蘇らせるべく、物語を紡いでいく。ジーン・M・ブリトン、書簡体小説や粋物語という形態を、他者の経験を自分のことのように感じることを可能とする語り (vicarious narrative) と呼び、そのような語りは、他者に寄り添いその心を想像するアダム・スミスの共感の認知的プロセスとも重なり合うと論じる (8-9)。『ラドロー卿の奥様』の女性の語り手たちは皆、他者の視点に立ちその気持ちを思いやる心優しい人物たちである。しかし、他者を思いやる共感には時に自己の抑圧や滅却につながる危険性を孕んでいることが、小説では示唆されている。ギヤスケルの小説において女性は常に自分よりも他者のことを考え、自己の欲求を抑圧するような優しさを求められるとフェリシア・ボナパルトは指摘する (63)。『ラドロー卿の奥様』の女性たちもまた、この自己滅却の危険性と向き合っているのである。

主人公ラドロー夫人は、少女時代のドーソンを含む、生活に困窮した上流階級の娘たちを引き取って面倒を見る心優しい女性である。その優しさは、たった一人で屋敷にやってきた少女時代のドーソンを温かく迎え入れる場面からも窺い知ることができる。「手がとても冷たいわよ。手袋を脱いで・・・私に温めさせて」と夫人は声をかけ、「柔らかで温かで、白く指輪をした手で」(30) 少女の手を包む。ラドロー夫人の共感力が最も発揮されるのは、冤罪によって捕らえられた貧民ジョブ・グレッグソンの家を訪れる場面である。夫人は悲惨な状況を目の当たりにした後、判事レイソム氏に対してグレッグソンの釈放を訴える。「あなたも私と一緒にあの哀れな人の小屋の悲惨さを見て下さればよかったのに」(54) と話す夫人の言葉からは、貧しい一家の状況を思いやる夫人の心が表現されている。ラドロー夫人は一方で、「決してご自身のことはお考えになられない」(248) という自己滅却の精神の持ち主である。亡き夫と長男ユリアンは海軍軍人、息子ラドロー卿は外交官というように、男性たちが外国での自由で派手な生活を謳歌するのに対して、ラドロー夫人は夫が遺した借金を返済し、息子の派手な暮らしを支えるため、質素な生活をしている。「女性であるという状態そのものが、ギヤスケルにとっては囚われの身であるかのようである」とのボナパルトの指摘どおり (163)、ラドロー夫人は物語の主人公であるにもかかわらず自由がなく、彼女自身の欲求や欲望が描かれることはほとんどないのである。

自己滅却の危険性はラドロー夫人の物語を語るドーソンの人物造形において、より顕著で複雑な形となって表されている。貧しい教区司祭の家族に生まれたドーソンは、父の死後一家が困窮した際、いわば口減らしのためにラドロー夫人のもとに引き取られる。ドーソンは屋敷での生活の最初からラドロー夫人を注意深く観察し、夫人の心の動きを読み取ろうとする共感力の高い少女である。夫人と初めて会った時も、ドーソンは夫人の姿勢、衣服、アクセサリー、髪、皮膚、目鼻立ちなどを、一つ一つ細かく観察している (28-29)。また、グレイ氏との会話の場面でも、夫人の心の動きを僅かな表情の変化や口調から推察しようとする。「私はことばで言われたのと同じくらいはっきりと、奥様が身分の低い人が使った表現に気分を害されたのだとわかりました」(48)、「そんな風に話しかけられて、奥さまは驚きで——怒りではなかったと思います——青い目を大きく見張りました」(49)といった文章からは、夫人の一拳手一投足をも見落とさないドーソンの観察眼の鋭さが窺える。ラドロー夫人に寄り添うドーソンの共感力が明確に現れるのは、夫人が友人ド・クレキー夫人の息子クレマンの死の思い出を語った場面である。

My lady was trying to shake off the emotion which she evidently felt in recurring to this sad history of Monsieur de Créquy's death. She came behind me and arranged my pillows, and then, seeing I had been crying . . . she stooped down, and kissed my forehead, and said "Poor child!" almost as if she thanked me for feeling that old grief of hers. (108)

この場面はスミスが『道徳感情論』において「相互の共感をもつ喜び」(38)と定義した感情と一致する。スミスは不幸な人々は共感を得ることで「苦悩の一部が軽減された」と感じ、「蘇らせた悲哀が持つ苦悩は、受け止めた人物の共感をもつ甘い香りで十分に埋め合わせられる」と説く(41)。注目すべきは、ラドロー夫人の悲哀もまた、自らの不幸ではなく今は亡き友人の不幸に起因するという点である。女性たちは時空を超えて他者の悲しみに寄り添い、共感するのである。

しかしながら、他者を思いやる優しさはドーソンの内面の抑圧ともつながっている。ドーソンは語り手ではあるが、「私はとても聞くのが上手」(213)と自らが語るように、物語のなかでは終始聞き手であって、彼女自身が言葉を発するこ

とはあまりない。また、ハンベリー・コートでの生活は静かで穏やかであると同時に、ある種の息苦しさを伴っている。屋敷にはドーソンの他にも同年代の少女たちが数名暮らしているが、少女同士で言葉を交わす場面は皆無で、うら若い少女たちが住む屋敷にあって然るべき活気は感じられない。ドーソンが屋敷に到着した日の夕食の席でも少女たちは寡黙で、新しい友達を迎える興奮も見られない。「女の子たちは新来者の私に親切な礼儀をもって接してくれました。けれども、食事のために最低限必要な会話以上は、話しかけてくれることはありませんでした」(31)とドーソンは回想する。屋敷での読書リストは『シャポン夫人の手紙』(*Mrs. Chapone's Letters*, 1822)、『グレゴリー博士の助言』(*Dr. Gregory's Advice to Young Ladies*, 1792)など、女性として神を敬い従順に生きることを説くような書物ばかりである(42)。

こうした目に見えない精神的抑圧は、ドーソンの身体的障害に象徴的に表現されている。ドーソンはラドロー夫人に引き取られて間もなく、怪我による腰痛が原因で思いのままに歩く自由を失う。障害を負うに至った経緯について、ドーソンは寡黙にして多くを語らないが、それは彼女がグレイ氏に付き添われて、判事レイソム氏の家から屋敷に戻る帰りの出来事がきっかけであったことが仄めかされる。「不幸の始まりは、その時踏越し段の一つから飛び降りたことではないかと・・・疑わないわけではありません」(59)というドーソンの婉曲な語りからは、彼女の封印された感情が推測される。彼女はグレイ氏と二人きりで歩いたことが嬉しく、若さゆえの元気さで踏越し段から飛び降りたのかもしれない。しかし、そのような女性の憤みを忘れた振舞いは、生涯にわたって移動の自由を奪う重い障害という罰によって律されなければならない。「行動的な生活よりは受動的な生活のほうが私にとってはよい訓練」(172)ともドーソンは言う。ボナパルトの言うとおり、女性であることは「囚われの身」なのである(163)。

抑圧によってドーソンの内面に生まれるルサンチマンが表出される瞬間が一つだけある。それは、ラドロー夫人の最後の息子ラドロー卿が客死したとの知らせがグレイ氏によってもたらされた時である。子どもの死とは当事者にとって周囲の人々の共感を最も必要とする悲劇である。だが、夫人の心に寄り添うことが一番求められるこの場面において、ドーソンの心に沸き上がったのは別の感情であった。

I am ashamed to say what feeling became strongest in my mind about this time; next to the sympathy we all of us felt for my dear lady in her deep sorrow, I mean . . .

It might arise from my being so far from well at the time, which produced a diseased mind in a diseased body; but I was absolutely jealous for my father's memory. (201)

同情を感じたと言いつつも妬みの感情を抱いたことを、ドーソンは婉曲的に告白する。「私の父は近隣の人々のため、全身全霊で懸命に働き、人生最良の時期を捧げた」(201)にもかかわらず、その父が亡くなった時に村人たちが示した弔意が、ラドロー卿の死に対してハンベリーの子供たちが示した弔意と比してはるかに小さかったことに、ドーソンは不満を感じたのである。ドーソンが控え目な口調で表明しているのは、社会になお厳然と存在する階級間の不平等に対する抑えようのない怒りである。他者に尽くしても報われなかった父の姿は、自己を滅却し他者に尽くしても報われることのない女性たちの姿とも重なり合う。『ラドロー卿の奥様』は階級やジェンダーによる越えがたい分断をも明らかにしているのである。

4 包摂的社会における再階層化

ここまで『ラドロー卿の奥様』における包摂的社会の構築および、社会に潜む女性の抑圧とルサンチマンについて見てきた。女性の抑圧は共感を土台とする包摂の限界を示しているが、加えてこの作品には、大衆と中・上流階級との再階層化という、第二の社会構造変容の萌芽も見られる。19世紀半ば以降、進化論的思想の影響により社会や個人が進化の度合いによって階層化されるのに伴い、「誠実さ」の概念にも変化が生じたと、モリスは述べている。感情の直接的で「誠実な」表現は制御できない身体性と結び付けられ、洗練や感性の欠如と捉えられるようになっていった (27-28)。モリスはまた、労働者階級に関しても、社会に包摂される「有用な」労働者とそれ以外の悪魔的大衆とに二分されるような傾向が見られたと指摘する。それゆえ、社会問題小説では、個人として共感の対象となる労働者がいる一方で、その他大勢の労働者は容易に扇動され暴力的に振舞う存在として、恐怖と嫌悪をもって描かれた (32-36)。

『ラドロー卿の奥様』において社会階層は、時には旧体制の時代遅れなもの

して認識されると同時に、個々の人間の身体と分かちがたく結びついた固定化されたものとして描写されている。ハンベリーの社会の頂点に立つラドロー夫人を特徴づけるのは、完璧なまでの身体の制御である。村の学校設立に関するグレイ氏とのやり取りにおいても、ラドロー夫人は心の乱れを外に出すことはない。夫人は「ゆっくりと穏やかに話し」(48)、驚いたときでさえ「青い目を大きく見張る」(49)以上に感情を露わにはしない。対照的にグレイ氏の身体は内面と呼吸して変化する。ラドロー夫人に学校設立の考えを否定されると、「グレイ氏の赤ら顔は紫色になり、それからその色も褪せて蒼ざめて」(48)しまう。「グレイ氏の顔は、子どもであればついには泣きだしてしまうような、興奮状態にあることを示していました」(49)という一文では、身体を制御する能力の未熟さが、成長段階の未熟さと結びつけられている。

階級と身体は、フランス革命のエピソードにおいて最もあからさまに結び付けられている。夫人の友人ド・クレキー夫人とその息子クレマンは革命を逃れてイギリスに渡ったが、後者はパリで身を潜める従妹ヴィルジニーを救出するため単身フランスに戻り断頭台で処刑される。二人のパリ脱出を阻止したのは、ヴィルジニーを匿うかつての召使バベット夫人の甥、モリン・フリスである。モリンは密かにヴィルジニーに恋心を抱き、クレマンへの強い嫉妬心から二人を破滅に追いやる。貴族出身のクレマンとワイン商人の息子モリンという二人の恋敵の埋めがたい階級差は、彼らの身体に刻み付けられている。クレマンは少年時代から「たとえ時々擦り切れた服を着ていても、いつも上品で優美」(83)で、「どんなに粗末な布や粗野で不格好な身なりも、三十代続いた貴族の末裔であることは隠しようもない」(140)という美しい身体の持ち主である。対するモリンは「いつも粗野で平凡で」(121)、クレマンへの嫉妬心やヴィルジニーへの激情に支配される時は、自らの身体を制御できずに感情を露わにする。「モリンは荒々しく情熱的な声を上げ、歯を食いしばり、拳を握り、ヴィルジニーへの恐ろしいまでの愛を叫ぶとき、ほとんど痙攣しそうなになった」(127)——グレイ氏の身体が誠実さを表す鏡であるなら、モリンの身体はその暴力性を暴露する媒体となるのである。鬱屈した激情によって制御不能に陥るモリンの身体は、いつ何時暴力によって積年のルサンチマンを爆発させるともしれない労働者階級の危険な身体(個人としての body と集団としての body)と重なり合う。ヴィルジニーがモリンに対して

抱く恐怖と嫌悪は当時の中・上流階級の人々が労働者階級に対して抱いていた感情でもあった。

フランス社会とは対照的に描かれるハンベリーの社会では、貧民さえも包摂される。しかし、包摂の前提として、「有用」な一員であることが求められている点も忘れてはならない。ハリーが社会に加わることができたのは、彼が村で「最も汚くみすぼらしかったけれど、最も賢く抜け目のない」(72)少年であったからに他ならない。ホーナー氏は、「賢く抜け目のない少年に読み書きを教えることで、やがては管理人として役立てられないか」(72)と考えてハリーの教育を始め、ハリーはその期待に応えることで出世する。また、ドーソンが怪我によって身体の自由を奪われたのと同じように、ハリーも大けがによって障害を負う運命にあった点にも注目すべきである。それはあたかも、労働者階級の暴力を恐れる作者が彼の身体からその危険性を除去したかのようにも見える。有用かつ無害な一員としてハリーが包摂される代わりに、盗みを働いたハリーの兄のような人物は流刑となって(197)、永遠に物語の枠外に排除されるのである。

* * * * *

本論文では、『ラドロー卿の奥様』において、理想的な包摂的社会が描かれる一方で、女性の抑圧や社会の再階層化による分断という矛盾が示唆されていることを明らかにした。社会に存在する不平等をラドロー夫人にむかって明言する唯一の登場人物が、作者ギャスケルの分身と評されるガリンド嬢であることは興味深い。「奥様、恐れながら申し上げますが、世の中の人間は聖人とガミガミ屋と罪人の三つに分けられるかもしれません。奥様は聖人、なぜって奥様は生来優しいお方ですし、腹立たしいことや面倒なことを片付けてくれる人がいるからですよ」(164)と彼女は言う。この言葉には、上流階級の徳そのものが不平等のもとではじめて可能となるという考えが、鋭く示唆されている。ガリンド嬢はまた、有用さとは関係なく、召使を雇い扶養するような人物でもある。彼女は「絶望的なまでに結核が悪化した」少女を、「さもなければ救貧院に入れられろくに食べ物も与えられないから」(158)との理由で雇用する。「もちろん、この哀れな少女は召使に求められる義務など何一つできず、ガリンドさんのほうが召使で看護

婦になっていました」(158)とドーソンは語る。ギaskellが自らの理想を託そうとしたこの婦人は、一服の清涼剤のようにこの作品に生き生きとした息吹を吹き込んでいる。しかし、ガリンド嬢のユーモアにも関わらず、小説全体がある種の重苦しさを醸し出しているのは、語り手であるドーソンや、さらにその語りを書き写すグレイトレクス嬢が、ギaskell作品の女性特有の囚われの状態にあるからかもしれない。物語を語るドーソンは年配の女性となり、兄と一緒に暮らしているが、「目が悪いために、薄明りの暗くした部屋に横たわっていなくてはならない」(15)。グレイトレクス嬢も病身で、療養のため付き添いの女性と共に、エジンバラの暗く殺風景な部屋に下宿している。そして、枠物語という小説の構造そのものが、牢獄のように女性たちの語りを封じ込めているようにも感じられる。

女性の抑圧や階級間の分断、対立という問題は、『ラドロー卿の奥様』以降の長編小説においても解消されることはない。『ラドロー卿の奥様』に漂う閉塞感、包摂的社会の構築を目指して葛藤するギaskellのその後を、そして分断を克服できない社会のその後を予見しているのかもしれない。

注

*本稿は科学研究費基盤研究(C)(一般)「19世紀イギリス小説における共感と社会改革」(17K02523)の交付を受けて行った研究の成果である。ギaskellの作品からの引用はすべて筆者の拙訳による。

引用文献

- Altick, Richard D. *The English Common Reader: A Social History of the Mass Reading Public 1800-1900*. Phoenix, 1957.
- Bonaparte, Felicia. *The Gypsy-Bachelor of Manchester: The Life of Mrs. Gaskell's Demon*. UP of Virginia, 1992.
- Britton, Jeanne M. *Vicarious Narratives: A Literary History of Sympathy, 1750-1850*. Oxford UP, 2019.
- Deane, Bradley. *The Making of the Victorian Novelist: Anxieties of Authorship in the Mass Market*. Routledge, 2003.
- Gaskell, Elizabeth. *My Lady Ludlow*. 1858. Academy Chicago Publishers, 1995.

—. *Mary Barton*. 1848. Penguin, 1996.

Morris, Pam. *Imagining Inclusive Society in Nineteenth-Century Novels: The Code of Sincerity in the Public Sphere*. John Hopkins UP, 2004.

Schor, Hilary M. *Scheherazade in the Marketplace: Elizabeth Gaskell and the Victorian Novel*. Oxford UP, 1992.

Uglow, Jenny. *Elizabeth Gaskell: A Habit of Stories*. Faber and Faber, 1993.

アダム・スミス『道徳感情論』高哲男（訳），講談社，2013.

波多野葉子「ブラッドからブレインへ——*My Lady Ludlow* に見るギヤスケルの革新性」『ギヤスケル論集』第18号，2008，pp.81-94.

（同志社大学教授）

The Construction of an Inclusive Society and Its Limitation in *My Lady Ludlow*

Fumie TAMAI

Although it has attracted relatively little attention from critics, *My Lady Ludlow* (1858) is an intriguing work in considering the construction of an inclusive society in the nineteenth century. The plot centers around the eponymous character who holds an old-fashioned idea about the feudal hierarchal order of society at the beginning. As the story evolves, she gradually understands the need for reform and accepts a more liberal and egalitarian social order. Pam Morris maintains that around the 1840s into the 1850s, a remarkable transformation of public consciousness took place, that is, a transformation from an unquestioned acceptance of social hierarchy as a natural order to a general perception that society would evolve based upon the principles of inclusion of all voices in the population. *My Lady Ludlow* represents this process of constructing an inclusive society, in which every member is respected regardless of the differences in class, status, or gender. The novella, however, at the same time reveals the contradiction and limitation of the ideal of inclusiveness. Written in the transitional period of Gaskell's career, it gives us a deep insight into a female middle-class author's difficulty in imagining a truly inclusive society even in an idealized world of past rural England..

エリザベス・ギヤスケルの『ルース』における中産階級男性障害者の表象

星 志乃

1 はじめに

1970～80年代にイギリスやアメリカで創始された障害学（Disability Studies）では、医療的・福祉的な手法のみで克服を図るという「個人モデル」「医療モデル」に代わり、障害を生み出しているのは社会であると捉える「社会モデル」が提唱された。¹さらに今世紀初頭には、社会に存在する非障害者中心の価値基準を暴き出すクリップ・セオリー（Crip Theory）が提唱され、障害者に対する差別語の crip を、障害者や障害学者が政治的スローガンとしてあえて積極的に使用することで、正常／異常の境界の攪乱が意図された。² 同時期の David T. Mitchell と Sharon L. Snyder の共著 *Narrative Prosthesis: Disability and the Dependencies of Discourse*（2000）の出版は、障害学の英米文学研究への応用の契機となった。しかし、19世紀英文学における障害研究は、ヴィクトリア朝小説に登場する障害者の事例が障害学の理論に必ずしも当てはまらないことなどから、米文学や20世紀英文学に比べ先行研究が限られている。障害学者 Martha Stoddard Holmes の *Fictions of Affliction: Physical Disability in Victorian Literature and Culture*（2004）は、ヴィクトリア朝文学の障害に関する最初の包括的研究だが、「感情の過剰さ（emotional excess）」（*Fictions of Affliction* 3）と障害の関係に焦点を絞った結果、考察範囲が極めて限られているという指摘もある（Gore, *Plotting Disability* 13）。

エリザベス・ギヤスケル（Elizabeth Gaskell, 1810-65）は、『メアリ・バートン』（*Mary Barton*, 1848）や『北と南』（*North and South*, 1854-55）で労働者階級の困窮した生活を詳細に描き、さらに『ルース』（*Ruth*, 1853）でヴィクトリア朝のタブーであった墮ちた女（fallen woman）をヒロインにするなど、社会的弱者に焦点を当てた。障害者も、労働者や墮ちた女と同様に社会的弱者、あるいは非障害者から見て「他者」として描かれやすい傾向にある。社会的弱者に強い関心を抱いていたギヤスケルの作品に、障害あるいは障害と思われる身体的特徴の描写が多いことは

Holmes も指摘しており (“Embodying Affliction” 62)、「ペン・モーファの泉」 (“The Well of Pen-Morfa,” 1850) を中心に研究されてきた。Holmes は、「ペン・モーファの泉」では身体障害を持つヒロインと知的障害の間に、障害を媒介とするポジティブな相互依存関係が構築されていると指摘した (“Victorian Fictions of Interdependency” 31)。また、『ルース』における障害に着目した先行研究としては、Deborah Mae Fratz と Hunter Nicole Duncan の論文が挙げられる。『ルース』では、ヒロインのルース・ヒルトン (Ruth Hilton) の保護者・指導者として、背中に障害を持つ牧師サースタン・ベンスン (Thurstan Benson) が登場する。Fratz は、障害によるサースタンの優柔不断な気質の功罪を、ルースの更生や社会復帰の文脈において検証しており、墮ちた女の保護者としてのサースタンの適性を証明した。その一方、彼が障害者としてヴィクトリア朝の新たな男性性を提示できないのは、障害に対するギヤスケルの曖昧な立場の表れだと指摘している (“A Feminine Morbidity” 16)。また、Duncan は、クリップ・セオリーに基づいてルースを障害者のように活動を制限 (cripple) された存在と再定義し、『ルース』の新たな読みの可能性を提示した。両研究においても、社会的弱者としてのサースタンとルースの共通点や、ルースの保護者・指導者としての彼の適性は考察されているが、彼の障害の表象については十分に検討されていない。社会的弱者に関心を持ち、墮ちた女の救済にも携わっていた (Uglow 246-47) ギヤスケルの文学を研究する上で、障害の観点もさらに取り入れられるべきだと考える。

そこで本稿では、『ルース』におけるベンスンの障害の表象を再検討したい。ここでは、ヴィクトリア朝文学で比較的障害の研究が進んでいるジョージ・エリオット (George Eliot, 1819-80) の『フロス河の水車場』 (*The Mill on the Floss*, 1860) を適宜参照しつつ論じてゆく。マギー・タリバー (Maggie Tulliver) の成長を描いた『フロス河の水車場』には、彼女の友人・良き理解者として、サースタンと同様背中に障害を持つフィリップ・ウェイケム (Philip Wakem) が登場する。彼は、サースタンと同じく中産階級の男性障害者である。両者がコミュニティでどのように見られているか、家族のサポートはどのように描かれているか、さらに両者が持つ能力を発揮できているかという観点からサースタンの障害者表象を検証したい。さらに両者の比較を通じて、社会的弱者の表象に対するギヤスケルとエリオットそれぞれの姿勢の違いを明らかにしたい。

2 白人男性の視点と堕ちた女の視点

ヴィクトリア朝小説において、障害者はコミュニティの周縁、もしくは外部にいる存在として描かれがちである (Davis 9)。これはヴィクトリア朝で障害者がしばしば欠陥がある人 (the defective) と形容されるように (Holmes, “Embodying Affliction” 63)、非障害者から一方的に劣った存在として認識される傾向と無関係ではない。

『ルース』にも、障害の有無を社会的地位と結び付けようとする非障害者の言動が見られる。ルースの恋人ヘンリー・ベリングガム (Henry Bellingham) は、上流階級の白人男性非障害者という社会的強者である。お針子として働くルースの美しさに惹かれ、彼はルースと親しくなるが、その関係が雇人に知られるとルースは解雇されてしまう。職と居場所を失ったルースと共にベリングガムは北ウェールズを旅行し、そこで彼らはサースタンと出会う。ベリングガムがサースタンに対して抱いた印象は以下の通りである。

“I’ve seen your little hunchback. He looks like Riquet-with-the-Tuft. He’s not a gentleman, though. If it had not been for his deformity, I should not have made him out from your description; you called him a gentleman.” . . .

“[He’s] regularly shabby and seedy in his appearance; lodging, too, the ostler told me, over that horrible candle and cheese shop, the smell of which is insufferable twenty yards off—no gentleman could endure it; he must be a traveller or artist, or something of that kind.”

“Did you see his face, sir?” asked Ruth.

“No; but a man’s back—his tout ensemble has character enough in it to decide his rank.” (58 ; 下線は引用者)

ベリングガムは、他人から伝え聞いた服装などからサースタンを身分の低い人間だと妄信し、身体的特徴と階級を結びつける根拠のない持論も展開する。³ 彼はサースタンとの交流がないにもかかわらず、サースタンの人間性を断定し一方的に拒絶している。このようなベリングガムの人物描写は、堕ちた女の観点だけでなく障害の観点からも、彼が浅はかで偏見に満ちた人物だということを示している。

ベリンガムの障害者に対する態度は、『フロス河の水車場』のマギーの兄トム (Tom) のフィリップに対する態度に酷似している。トムも、ベリンガムと同じく白人男性非障害者という社会的強者である。またトムは、「活発な競技のすべてに上達し」、剣に強い関心を示すなどヴィクトリア朝の男性性を体現している (125, 164-65)。彼が障害者のフィリップに対し嫌悪感を抱いていることは、街中でフィリップを見かけるたびに「いつもできるだけ早く眼をそらして」いた様子からも明らかだ (151)。そのうえトムは、フィリップの障害が、弁護士である彼の父親の性格の悪さに由来していると信じている (151)。ベリンガムやトムのように、障害を内面的特徴に関連付けて階級を判断する行為は、障害者に対する非障害者の偏見を表している。そしてそれらの行為がすべて視覚情報によって行われているのである。

また、ヴィクトリア朝文学の障害者は当時の厳格な性規範から逸脱した人物として描かれる特徴がある。⁴ 男性身体障害者は、女性的とされた気質を持つ人物として描かれることが多い。『フロス河の水車場』でも、フィリップは「女性的な強い感受性」や「女のように感じやすい」神経を持つ点で、当時の女性性を示す人物である (307, 394)。このような男性障害者の性規範からの逸脱は、彼らの身体的弱さが精神的弱さに結び付けられたり、障害による身体的苦痛に悩まされる様子が、理性的で決断力に長けるとされたヴィクトリア朝の男性性と矛盾したりすることに起因していると考えられる。ゆえに、ヴィクトリア朝の男性性を体現するベリンガムやトムのような人物は障害者を「他者」として認識し、規範から逸脱する障害者を蔑む態度を示すのだ。

これまで社会的強者である白人男性の視点からの障害者表象を見てきたが、以下では、墮ちた女という社会的弱者であるルースの視点からの障害者表象を検証する。孤児のルースは親からの教育を十分に受けられず、ヴィクトリア朝の社会規範を理解していない。北ウェールズの森でサースタンに出会った彼女は、「小人のよう」に低い背丈の原因である彼の背中の障害に気づくと、彼に対する憐みの気持ちを示すかのように目を潤ませる (57)。そして、ルースの視点に基づく語りはサースタンを「紳士」と称しており、ベリンガムと対照的である (57)。また、サースタンの顔の描写においては、“something” が繰り返し使用されている。

When they had passed out of the wood into the pasture-land beyond, Ruth once more turned to mark him. She was struck afresh with the mild beauty of the face, though there was something in the countenance which told of the body's deformity, something more and beyond the pallor of habitual ill-health, something of a quick spiritual light in the deep set-eyes, a sensibility about the mouth; but altogether, though a peculiar, it was a most attractive face. (57; 下線は引用者)

サースタンの外見に関するこの不明瞭な描写は、ギヤスケルがリアリズム作家であることを考慮すると注目に値する。Duncan は、「作者が“something”という単語を多用しているのは、サースタンを障害者というアイデンティティに閉じ込めることへの拒絶の現れである」と分析する (64)。加えて注目すべきは、ルースの視点による語りがサースタンの顔や表情に焦点を当てている点である。曖昧な表現を多用する一方で、ギヤスケルはサースタンの表情の奥深さや顔の美しさを強調し、彼を魅力的な人物として読者に印象付けようとしている。ヴィクトリア朝の社会規範を持たないルースの視点からの障害者表象は、サースタンに新たな男性性を与えずとも、既存の社会規範からの脱却を図るギヤスケルの態度を反映していると言えよう。

サースタンやフィリップの例からは、社会的強者からの視点を明らかにした。強者は、障害という身体的特徴をその人物の身分や人格の判断材料として使用する。一方、ルースの例に見える社会的弱者の視点は、ヴィクトリア朝の価値観に固執せず、障害者を卑しい存在としても認識せず、むしろ障害者の魅力の表象さえ可能にすることがわかった。そして社会的強者と弱者の視点には、ギヤスケルの内面の葛藤が表れている。

次節ではさらに、家庭領域における非障害者との関わりという点からサースタンとフィリップの人間関係を整理し、非障害者による障害者へのサポートについて考察する。

3 障害者に対する非障害者家族のサポート

ヴィクトリア朝の社会規範を遵守する非障害者は、障害者に対する社会的優位性を信じて疑わない。そのような非障害者の態度は障害者に関わる機会を減少さ

せ、障害者の孤立を招く。しかし、サースタンは共同体全体から排除されているわけではない。その理由の一つは、彼の家族関係、特に非障害者家族からのサポートと考えられる。

サースタンの家族関係を検証する前に、『フロス河の水車場』におけるフィリップの家族関係を振り返りたい。彼は弁護士の父親ウェイケム氏 (Mr Wakem) と暮らしているが、父親と会話する場面の描写は極めて少ない。ウェイケム氏は、息子が絵を描くための道具や書斎など物質的・金銭的サポートをしているが、与えた支援に対する見返りも求めていた (391)。ウェイケム氏は、訴訟で対立するタリバー家の娘マギーに息子が恋愛感情を抱いていることを知り、「これが気儘気随を通させてやったお父さんへの返礼だということか？」と、フィリップの親不孝や障害を痛烈に責める (392)。つまりウェイケム氏は、サポートされている息子は自分に感謝し、従順であるべきだと考えていた。この発言に反論したフィリップとの口論の末、ウェイケム氏は息子への理解を深めるようになるが、ウェイケム氏の発言からは彼がそれまで息子を全く理解していなかったことが読み取れる (392-93)。加えて、自分に頼らなければ生活できない息子が、自分の意志に反する行動をとるはずがないという傲慢な姿勢も窺え、この傲慢さが息子とのコミュニケーション不足を招いた原因と考えられる。ウェイケム氏のフィリップに対する姿勢は、障害者の権利を無視している点において、非障害者による障害者への配慮の欠如を表している。

ギヤスケルも非障害者家族によるサースタンへのサポートを描いているが、その様子はエリオットの作品と異なる点をもつ。サースタンと同居する姉のフェイス (Faith) は、人生を障害のある弟のために捧げていると言っても過言ではない。彼女は「立派な紳士」から結婚を申し込まれた際、「弟を置き去りにすることは出来ない」とプロポーズを断った過去があることを、ベンスン家の召使サリー (Sally) がルースに説明する場面がある (135)。サリーは、プロポーズを断った後のフェイスの悲しみに言及しており、もしサースタンが障害者でなければ彼女にも結婚の意思があったと考えられる。ヴィクトリア朝の女性にとって結婚しないという選択は勇気の要る決断だが、フェイスは強い心痛をサースタンの前では隠し通す。また、ウェイケム氏と異なり、彼女は自分が払った犠牲に対する見返りを求めずにサースタンを支える。フェイスが自らの人生を犠牲にしてサースタ

ンを支える様子は、ケアラーとしての役割が女性に付与されやすい性別役割分業の社会構造を反映しているとも言える。しかし、このケアラーとしての役目は、他者から押し付けられたものではなくフェイスが自らの意思に基づいて引き受けたものだ。つまり、サースタンのケアを担うこともまた、彼女にとっての自己実現なのである。彼女のサポートはウェイケム氏のような物質的・金銭的なものではなく、精神的なものがほとんどである。また、何事に対しても思い悩みがちなサースタンは「女性的」、対照的にいざというときの決断力があるフェイスは「男性的」な人物として描かれている。「女性的」資質を持ったサースタンと「男性的」資質を持ったフェイスは相互補完関係にあり、その関係の良好さは「二人が相互に作用しあうことから、一時の揉め事が、やがてはすばらしい調和と平安をもたらす」と表現されている（115）。ベンスン姉弟の関係は、非障害者から障害者への一方的支援ではなく、障害者と非障害者が互いに支えあう様子を示している。障害者が非障害者からのサポートを受けるだけの人物になっている場合、二人の間には上下関係が発生しやすくなる。しかし相互補完関係であれば、どちらかが相手を見下す関係には発展しづらく、むしろ強い連帯が生まれる。『ルース』では、障害者とその非障害者家族の連帯やサポートが詳細に描かれている。

サースタンとフィリップの家族関係について分析すると、『フロス河の水車場』では障害者と非障害者の関係に権力構造やコミュニケーション不足が見られた。しかし、社会的立場が異なる者として障害者と非障害者が描かれていることを鑑みれば、それは自然なことでもある。エリオットは、障害者と非障害者の家族を描きながら、そもそも他者に理解してもらうことの難しさを提示している。一方『ルース』にみえる補完関係は、障害者と非障害者の連帯を可能にし、障害者の孤立を防ぐ上で重要な役割を担っている。

4 非障害者を救う障害者——牧師という設定の独自性

サースタンの家族との相互補完関係が明らかになったが、彼は牧師として家族以外の非障害者とも関わる機会を持っている。では、サースタンは家族以外の非障害者とどのように関わり、社会においてどのような役目を果たしているのだろうか。共感力や観察力の高さは、ヴィクトリア朝小説に描かれる障害者の特徴として挙げられる。障害者は、コミュニティの周縁に位置づけられたり排除された

りする結果、コミュニティの構成者というよりむしろ観察者 (observer) として機能することが多い。⁵ つまり障害を持つ登場人物は、「見る」ことによって社会にコミットしているのである。ヴィクトリア朝小説における他の障害者たちと同様、サースタンは観察力や共感力が鋭い人物として描かれている。サースタンの表情には「鋭敏な感受性があらわれていた」とルースが述べる通り、彼は感受性を活かして鋭い洞察を示している (56)。ルースとベリンガムの関係を疑問視し始めた北ウェールズの人々が皆ルースに対し批判的な姿勢を示すなか、サースタンは唯一彼女の身を案じていた。ルースがベリンガムと彼の母親に捨てられ絶望し、牧草地に身を隠していたのをサースタンが発見した場面では、彼の鋭い観察力が発揮されている。

There he saw the young girl whom he had noticed at first for her innocent beauty, and the second time for the idea he had gained respecting her situation; there he saw her, crouched up like some hunted creature, with a wild, scared look of despair, which almost made her lovely face seem fierce; he saw her dress soiled and dim, her bonnet crushed and battered with her tossings to and fro on the moorland bed; he saw the poor, lost wanderer, and when he saw her, he had compassion on her. (78; 下線は引用者)

上記の引用では“he saw”という表現が繰り返され、サースタンが詳細にルースを観察していることや、ルースの境遇を正確に把握していることがわかる。そして彼はその共感力の高さも示し、放浪者のルースに同情を抱いている。のちに、サースタンがルースの墮落を隠蔽していたことは、神の意志を伝える人物として不相応だとブラッドショー氏 (Mr Bradshaw) は非難するが (284)、サースタンの社会的弱者への強い共感力や寛容さこそ、牧師という職業に欠かせない資質である。

ヴィクトリア朝文学の障害者の多くが観察力を備える一方で、その能力を活かしているかは検討に値する。『フロス河の水車場』のフィリップは優れた洞察力をもちながらも、活用できていないと Fratz は論じている (“Disabling the Author” 63)。フィリップは、マギーとスティーヴン・ゲスト (Stephen Guest) の接近に伴う危険を察知するものの思い悩んで体調を崩し、結果的にスティーヴンが駆け落ちを実行する日に彼とマギーを二人きりの状態にしてしまう (427-28)。さらにフィ

リップは、彼らの駆け落ちに関してマギーの弁護を行うこともできず、町の人々は彼女に厳しい態度を取り続ける (448-49, 456-57)。フィリップは観察者としてマギーに関する出来事や人々の思惑を正確に把握していても、それを第三者に伝えられない人物として描かれているのだ。

優れた観察力を有効に役立てる点で、サースタンは障害者として特異なキャラクターである。まず、ベリンガムに捨てられたルースが自殺を試みていることを察知し、彼女の自殺の阻止に成功している。ルースを追うサースタンは、障害が原因で速く走ることができず転倒し、彼女を救えないのではと失望しかける (79)。しかし転倒した際の彼の悲痛な叫び声がルースに届き、そのおかげで我に返ったルースは自殺を思い留まる (79)。加えて、ルースの過去が暴露された時、ベンスン家から出て行こうとする彼女を引き留めることにも成功している (287-90)。優れた観察力や強い共感からルースを深く理解していたからこそ、サースタンは効果的な説得によって彼女を翻意させることができたのだ。サースタンは、障害があるために感受性の強い女性的な人物として描かれるが、ルースを救う過程ではその強い感受性が何度も役立っている。これは、障害者の非障害化の表現ともいえる。

さらにサースタンは、堕ちた女であるルースの名誉回復にも成功する。ルースの葬儀で彼が聖書から『黙示録』第七章の抜粋を引用して朗読すると、「その説教の言葉は、いかなる説教にもまさって、聞く者の肺腑をつき」、会葬者の涙を誘う (368)。ルースを勘当したブラッドショー氏さえも考えを改め、ルースの息子に支援を申し出る (369)。これは、マギーの名誉回復に貢献できないフィリップとは異なる表象であり、それを可能にしたのは説教という自身の考えを述べる機会のある牧師という職である。サースタンは説教を通じてルースの功績を称えただけでなく、一度失った自分への信頼や信仰心も取り戻す。確かに、葬儀前日まで原稿執筆に苦戦し、長時間かけて完成した原稿が「満足から程遠いもの」だったことから、サースタンは自分の言葉で考えを訴える力は持ち合わせていないのかもしれない (367)。しかし、フィリップのように沈黙せず、聖書の言葉 (黙示録7:14) を借りながらルースと自分の名誉回復を達成するサースタンは、彼女の一番の理解者としての役目を果たしている。

優れた観察力や共感力という共通点がありながら、その能力を発揮できるかと

いう点でサースタンとフィリップの表象は異なっていた。観察力によって得た情報をもとに、他者を説得・救済するサースタンに対し、フィリップは他者に働きかけられない人物として描かれている。特異な障害者としてのサースタンの表象を可能にした、人前で意見を述べる機会を持つ牧師という設定には、ギャスケルの独自性が表れている。

5 おわりに

ギャスケルの社会小説『ルース』におけるサースタンの表象を障害の観点から検討してきたが、社会的強者の視点による障害者表象には、偏見に基づく差別意識が反映されていた。これらの描写は、身体的特徴や外見を性格や人格に結び付けて判断しようとするヴィクトリア朝の偏見に対するギャスケルの問題提起としても解釈できる。また、家族関係においては、フィリップと父親の関係が一方的なサポートやコミュニケーションの欠如を露呈したのに対し、サースタンとその家族の関係は相互補完的であった。さらに、障害者が備え持つ能力の発揮という点において、サースタンは突出した観察力や共感力によって得られた情報を他者に伝えられる人物である。エリオットは、障害者の苦悩をありのままに描くことで社会の問題を浮き彫りにする。つまり、障害者が理不尽な社会的制約を受けている現実を描くこと自体が、彼らが置かれている状況への一番の理解につながると考えていたのではないか。一方ギャスケルは、障害者の限界克服や非障害者からの理解・共感を得られる様子など、社会問題が解決された状況を描くことで、理想の社会像を読者に示そうとしていると考えられる。『ルース』には、ルースの更生だけでなく障害者であるサースタンが備え持った能力を発揮する姿も描かれており、先行研究ではふれられてこなかったサースタンの独自性が証明された。『ルース』は、墮ちた女の問題だけでなく障害者に関する社会小説としても読むことができるのである。

注

本稿は日本ギャスケル協会第34回大会（2022年10月1日、於日本赤十字看護大学）での口頭発表「ギャスケルとジョージ・エリオットが描いた disability」に、加筆・修正を加えた

ものであり、JSPS 科研費 JP22K20003 の助成を受けたものです。

- 1 「障害」の表記に関しては、「害」の字のネガティブな意味合いから「障がい」や「障碍」と表記すべきとの議論もあるが、障害学やクリップ・セオリーでは障害は個人の体ではなく社会の側に存在するという考えに従って「障害」と表記するのが通例のため、本稿においても「障害」と表記する。また、障害を持たない人物については、障害学の知見を踏まえて「非障害者」の表記を使用する。なお、「障害」の表記は小川公代も『ケアの倫理とエンパワメント』（2021）において「身体障害者」の表記を採用している（131）。
- 2 辰巳一輝によると、障害者や障害研究者が政治的抵抗のスローガンとして *crip* という語を使用するようになったのは、*Desiring Disability: Queer Theory Meets Disability Studies*（2003）における Carrie Sandahl の宣言が発端である（30）。
- 3 本文中の『ルース』の引用の邦訳は、すべて日本ギヤスケル協会監修の『ギヤスケル全集3』（巽豊彦訳、大阪教育図書、2001年）を、『フロス河の水車場』の引用の邦訳は『ジョージ・エリオット著作集2』（工藤好美・淀川郁子訳、文泉堂出版、1994年）を使用した。また、引用の頁数はすべて Oxford 版による。
- 4 Gore は、ヴィクトリア朝小説において男性障害者が結婚する例は非常にまれだと述べる（“Of Wonderful Use to Everyone”120）。Holmes は、ヴィクトリア朝において稼ぎ手の役割を期待されている男性が障害者の場合、無職で家族に頼り切って生活するか路上で物乞いをする例が多いと指摘した（*Fictions of Affliction* 94）。Keren Bourrier は、女性的美德（“feminine virtues”）を体現するヴィクトリア朝小説の男性障害者は、男性非障害者の心を穏やかにし、彼らの感情の奥深さを引き出すと述べる（*The Measure of Manliness* 2）。
- 5 チャールズ・ディケンズ（Charles Dickens, 1812-70）の『互いの友』（*Our Mutual Friend*, 1864-65）では、足に障害のあるジェニー・レン（Jenny Wren）が社会の経済活動や結婚市場に参加できない分、社会全体を監視する客観的な語り手の立場に立つことができると Clayton Carlyle Tarr は分析する（657-59）。

引用文献

- Bourrier, Karen. “Orthopaedic Disability and the Nineteenth-Century Novel.” *Nineteenth-Century Contexts*, vol. 36, no.1, 2014, pp. 1-17.
- . *The Measure of Manliness: Disability and Masculinity in the Mid-Victorian Novel*. U of Michigan P,

- 2015.
- Davis, Lennard J. “Introduction: Disability, Normality, and Power.” *The Disability Studies Reader*, edited by Lennard J. Davis, Taylor & Francis Group, 2013, pp. 1-14.
- Duncan, Hunter Nicole. *Reforming Victorian Sense/Abilities: Disabilities in Elizabeth Gaskell’s Social Problem Novels*. 2020. Marquette U, PhD Dissertation.
- Eliot, George. *The Mill on the Floss*, edited by Gordon S. Haight, Oxford UP, 2015.
- Fratz, Deborah Mae. “‘A Feminine Morbidity of Conscience’: Disability, Gender, and the Economy of Agency in Elizabeth Gaskell’s *Ruth*.” *Victorians: A Journal of Culture and Literature*, no. 127, Spring 2015, pp. 4-17.
- . “Disabling the Author in Mid-Victorian Realist Fiction: Case Studies of George Eliot and Harriet Martineau.” *Disability and the Victorians: Attitudes, Interventions, Legacies*, edited by Iain Hutchison, Martin Atherton, and Jaipreet Virdi, Manchester UP, 2020, pp. 55-69.
- Gaskell, Elizabeth. *Ruth*, edited by Tim Dolin, Oxford UP, 2011.
- Gore, Clare Walker. “‘Of Wonderful Use to Everyone’: Disability and the Marriage Plot in the Nineteenth-Century Novel.” *The Routledge Companion to Literature and Disability*, edited by Alice Hall, Routledge, 2020, pp. 120-31.
- . *Plotting Disability in the Nineteenth-Century Novel*. Edinburgh UP, 2020.
- Holmes, Martha Stoddard. “Embodying Affliction in Nineteenth-Century Fiction.” *Cambridge Companion to Literature and Disability*, edited by Clare Barker and Stuart Murray, Cambridge UP, 2017, pp. 62-73.
- . *Fictions of Affliction: Physical Disability in Victorian Literature and Culture*, U of Michigan P, 2004.
- . “Victorian Fictions of Interdependency: Gaskell, Craik, and Yonge.” *Journal of Literary and Cultural Disability*, vol. 1, no. 2, 2007, pp. 29-38.
- Tarr, Clayton Carlyle. “Abnormal Narratives: Disability and Omniscience in the Victorian Novel.” *Victorian Literature and Culture*, vol. 45, 2017, pp. 645-64.
- Uglow, Jenny. *Elizabeth Gaskell: A Habit of Stories*. Faber and Faber, 1993.
- エリオット、ジョージ『ジョージ・エリオット著作集2』工藤好美・淀川郁子訳、文泉堂出版、1994年。
- 小川公代『ケアの倫理とエンパワメント』、講談社、2021年。
- ギヤスケル、エリザベス『ギヤスケル全集3』巽豊彦訳、日本ギヤスケル協会監修、大阪

教育図書、2001年。

辰巳一輝「2000年代以降の障害学における理論的展開／転回:「言葉」と「物」、あるいは「理論」と「実践」の狭間で」、『共生学ジャーナル』、第5号、2021年、pp.22-48。

(早稲田大学大学院生)

Elizabeth Gaskell's Representation of a Disabled Middle-Class Male Character in *Ruth*

Shino HOSHI

This paper examines Elizabeth Gaskell's representation of a disabled middle-class male character, Thurstan Benson, in *Ruth* (1853). In addition, it is compared with George Eliot's depiction of Philip Wakem in *The Mill on the Floss* (1860) to highlight Thurstan's distinctiveness. Following the general tendency of the Victorian novel, both Thurstan and Philip face discrimination for their femininity from non-disabled characters of their communities. Ruth Hilton in *Ruth* is also depicted as an outsider since she is a fallen woman. Because of her experiences as a social outsider, Ruth develops a close relationship with Thurstan without having antipathy towards the disabled minister. Moreover, this paper discusses the good observation of others and society by Thurstan and Philip. The representation of disabled characters differs between Gaskell and Eliot in terms of having a mutually complementary relationship with their family and exercising their abilities to save heroines. Thurstan's distinctiveness lies in his capacity to empathise and observe, but Philip fails to utilise the same abilities to guard the heroine, Maggie Tulliver, against an affair with Stephen Guest. Although Philip does not defend Maggie's honour, Thurstan fulfils the crucial role, as Ruth's understander and protector, in redeeming her honour by delivering a sermon in front of a large audience after her death. Through these discussions, this paper reveals that Gaskell's *Ruth* can be read as a social novel about not only a fallen woman but also the power of disabled people.

2023 年度日本ギヤスケル協会奨励賞応募論文審査報告

星 志乃「エリザベス・ギヤスケルの『ルース』における 中産階級男性障害者の表象」

日本ギヤスケル協会会長 大野 龍浩

日本ギヤスケル協会では、ギヤスケル文学に関心を持つ若手研究者の育成を目指し、今年度から「日本ギヤスケル協会奨励賞」を新設した。奨励賞は『ギヤスケル論集』への掲載を受諾された論文を選考対象としており、今年度は該当する論文は1編であった。対象論文は星志乃氏の「エリザベス・ギヤスケルの『ルース』における中産階級男性障害者の表象」で、審査委員による厳正な審査の結果、この論文は奨励賞受賞に値すると判断された。以下に審査委員会が出された意見を報告する。

対象論文は、既存の論文への言及をはじめ基礎が守られている手堅い論文である。原典からの引用も適切で、持論の証左となっている。ヴィクトリア朝の代表的小説である *Ruth* と George Eliot の *The Mill on the Floss* に登場する障害者の表象を比較することにより、ギヤスケルが描く牧師 Thurstan の障害者としての特徴と、彼を取り巻く周囲の人間関係の優位性を分析している。あるがままに描こうとするエリオットのリアリズムと、目指すべき社会を描こうとするギヤスケルのリアリズムの相違が推察できる。両者を比較することによって、ギヤスケルの独自性が浮き彫りになり、論文に説得力が増していると思われる。

また、障害者の「見る」能力に注目し、「見る」ことによって障害者がどのように社会にコミットしているのかという点が丁寧に論じられており、その際に、“he saw” という表現に注目するなど、精読を基本としてしっかりと原作を読み分析していく姿勢にも好感が持てる。

以上のように、対象論文を高く評価する意見が大勢を占める一方で、奨励賞が若手研究者の育成を目指して創設されたものであることを踏まえ、星氏の今後の研究活動が一層充実したものとなるよう期待を込めて、以下のような意見や研究課題も示された。

- ・生硬のそしりを免れない表現が散見され、文意が正しく伝わらない部分がある。今後の課題としてほしい。
- ・エリオットとの比較を入れたために、紙面の都合から仕方がなかったものと考えられるが、ヴィクトリア朝社会においてアッパーおよびアッパー・ミドル・クラスの白人男性非障害者が、障害者をどのようなものとして認識していたのか分かる資料が、できれば二次資料だけではなく一次資料も交えて適切に挿入されることで、より説得力のある論文になるのではないか。
- ・ヴィクトリア朝社会において、障害者に対する国の支援はどのようであったのか、教会での慈善的援助の有無など、当時の障害者に対する社会のスタンスを今後の研究で明らかにしていただきたい。また、障害者に関し、19世紀の現実と小説世界ではギャップが見られるのか、それとも現実を正確に反映していると捉えて構わないのかという疑問もある。
- ・本論文では、扱ったギヤスケルとエリオットの小説はともに地方都市における障害者の分析であるが、ロンドンなど都会における障害者の実情はどうであったのか。地方都市の方が偏見が大きいのか、都会でも事情は変わらないのか、今後の研究では都会を舞台にした小説から障害者の描写分析も必要ではないか。
- ・剽窃などの問題が取り沙汰されている昨今の状況を鑑み、先行研究との違いがはっきりとわかる主張をされ、論者のオリジナリティがどこにあるのかをさらに明確化するよう努めていただきたい。

なお、こうした意見が寄せられたのは、星氏のこれからの研究に対する高い期待からに他ならず、受賞論文の意義を損なうものではない。受賞論文は全体として読む者の気持ちを惹きつける、また学ぶところの多い論文である。奨励賞に相応しい、今後が期待される可能性を持った好論であり、受賞者の将来の活躍が俟たれる。

最後に、次年度も新進気鋭の若手研究者が本奨励賞を目指しご投稿いただけることを願っている。

Lesla Scholl,
Food Restraint and Fasting
in Victorian Religion and Literature:
New Directions in Religion and Literature
Bloomsbury Publishing, 2022, 154 pp.
Hardcover £80.00, ISBN: 9-781350-256514

村上 幸大郎

昨年 NETFLIX で配信された『聖なる証』(*The Wonder*, 2022) は、1860 年代のアイランドを舞台にした、四か月間断食を続ける「奇跡の少女」の虚実をめぐる物語である。この作品は実話を基にしているわけではないが、十九世紀イギリスでは“fasting girls”と呼ばれる、食事なしでも生きていけると主張する女性がしばしば現れた。彼女たちの断食は奇跡だと喧伝されることもあったが、そのほとんどが神経症的な摂食障害であった。こういった“fasting girls”については、Leslie Heywood (1996)、Anna Krugovoy Silver (2002) などが詳細な研究を行っている。

本稿で評する Lesla Scholl の新刊は、既にアカデミックな関心が多く寄せられている、病としての“food refusal” (13) を主題にしているわけではない。本書における“food restraint”あるいは“fasting”とは、“the imbalance of food ownership”の是正を目的とする“ethical food restraint” (6)、つまり富裕層による貧困層救済のための節食・断食のことを指している。慈善行為への関心の高まりには産業革命以降の経済的格差の拡大が背景にあるのはもちろんだが、Scholl は“ethical food restraint”と 1830 年代に始まったオックスフォード運動の關係に着目している。イングランド教会に宗教革命以前のカトリック性を取り戻そうとしたオックスフォード運動では断食の復活も提唱されたが、カトリック的な“punishing and diminishing the carnal flesh” (11-12) としての断食の再興を目指したわけではなかった。運動の中心人物の一人である Edward Pusey は、断食について論じた *Tract of the Times* 十八号 (1833) の中で“although religion is in one sense strictly individual, yet in the means by which it is kept alive, it is essentially expansive and social”と述べている。Scholl はこの言

葉を引用し、断食は孤独な苦行ではなく社会に深く関わる行為であったと指摘する。四人の作家の著作における節食・断食の表象を通してヴィクトリア朝の節食・断食を“a protest against the broader selfishness of a capitalist society” (12) として捉え直そうとするのが、本書における Scholl の目的である。

第一章では Elizabeth Gaskell の作品の“food restraint”について考察されている。まず、*Ruth* (1853) の“food restraint”の例として、Bradshaw が Benson 家では紅茶に砂糖を入れたり、ケーキを食べすぎたりしてはいけないと娘に忠告する場面が取り上げられる。この忠告は、Benson のような貧乏人にとって当時贅沢品であった砂糖の無駄遣いは不適切だという意識から発されたものであり、Benson 家でのお茶会に呼ばれた娘の飲食を制限することで裕福な Bradshaw は貧しい Benson 家の“economic agency” (28) に干渉していると Scholl は指摘する。個々の経済事情に応じて「何を食べてもよいのか」が決まると考える Bradshaw 氏の価値観は、客人を精一杯もてなそうとする Benson 家のホスピタリティーと衝突し、結果食を通じた友好関係の構築が妨げられている。このように *Ruth* で“the misuse and abuse of food restraint” (28) が示される一方で、*Cranford* (1851-53) では“food restraint”を通じた連帯が描かれている。この作品の女性たちは経済的に逼迫しているが、豪勢に來客をもてなさないことを“elegant economy” (33) と称して上品な作法だとしている。コミカルに描かれているが、彼女たちの“food restraint”はお互いの“dignity” (37) を傷つけまいとする相互の無言の思いやりであり、その配慮によってクランフォードは“social body” (34) として調和を保っていると指摘されている。そして *North and South* (1854-55) については、*Cranford* で描かれた調和が経済的・階級的格差のある人々の間で築かれる作品として、特に工場の食堂での Thornton と Higgins の食事の場面が注目されている。Higgins と食事を共にした Thornton は彼を“My friend Higgins”と呼び、両者の間には“mutual respect and common feeling” (41) が醸成される。平等な空間を形成する食事の場で生まれる垣根のない友情は、一時的救済にすぎない慈善行為よりも長期にわたって格差のある者同士の良好な関係を維持すると述べられている。

Christina Rossetti を扱う第二章では、Scholl はまずこれまでほとんど言及されたことのない Rossetti の宗教観への東方正教の影響を指摘する。東方正教の教義の重要な要素は“respect for the body”であり、霊肉一致を説く点にある。肉体

を尊重する東方正教の考えから、オックスフォード運動では“spiritual matters”を“material terms”で定義する“materialist theology” (51) が発展した。同様に Rossetti も断食を“a spiritual discipline”ではなく“a physical discipline” (55) と見なし、断食に対する身体的な反応からその意義を見出そうとした。Scholl によると、Rossetti は“the sensation of fasting”は“compassion for the hungry” (51) を感じさせ、断食中の“an attentiveness to the stomach”は“physical excess” (53) の罪を悟らせると考えていた。一部の者が富を独占して私腹を肥やし、片や弱者には食べ物も行き渡らない“the selfishness of the age” (54) に背を向ける彼女にとって、断食・節食は“an affective, active response to the world around us” (51) として肯定的に捉えられる行為であったと論じられる。彼女のこのような考えが表れている作品として、*The Face of the Deep* (1893) の中の、「マタイによる福音書」二十五章のキリストと信者との対話を基にした詩“Because He first loved us”が取り上げられている。この詩において、Rossetti は聖書の内容を少し変え、キリストから断食中の信者が貯えた食物を貧しい者に分け与えるよう命じられる内容にしている (60-61)。また、*Time Flies* (1886) に収められた四句節の断食についての詩“Mid-Lent”では、断食を通じて恵まれない人々の窮乏に思いを馳せる必要性が訴えられている (65-66)。Gaskell が“common feeling” (43) を持つことの必要性を訴えたのと同様に、Rossetti は社会の“health and well-being” (72) のためには他者への“fellow-feeling” (43) が大事で、それは断食・節食を通して感じられるものだと考えていたと述べられている。

第三章では Josephine Butler が取り上げられている。行き場のない娼婦を自宅で保護するほどの慈善家であった Butler の宗教観は Gaskell や Rossetti と同じく“practical”であり、彼女は著作を通じて“social justice” (78) を促進する“theological and spiritual teacher” (79) であった。Butler の断食に対する考えが特に窺える作品として、*Catharine of Siena* (1878) が挙げられている。ローマ法王にさえ影響力を持った Catharine of Siena は長期にわたる過剰な節制から節食障害に陥り衰弱死した人物であるが、Butler が彼女の拒食を病気ではなく、“a form of ethical fasting” (95) として描いている点に Scholl は注目する。悪徳が蔓延し、弱者が虐げられる Catharine の時代の社会の記述は、明らかに読者がヴィクトリア朝社会と重ね合わせるように描かれている。施しのために節食・断食を行った人物として Catharine

を表象したこの伝記をはじめとする一連の著作を通じて、Butler は読者が進んで“one’s own privilege” (98) を犠牲にして貧しい人々を救う行動を起こすことを期待していたと考察されている。なお、最後に Butler の自己犠牲的な奉仕精神には *Ruth* の影響があったのではないかと示唆されている。

第四章では詩人・随筆家として知られる Alice Meynell が取り上げられている。彼女は“full abstention”、“liturgical calendar”に従った断食、“vegetarianism” (114) などさまざまな断食を実践した人物である。カトリックである Meynell にとって、断食は自身の“spiritual discipline” (113) のための行為であった。しかし、彼女は断食で切り詰めた金銭や食物を貧しい者に与えることも重視していた。禁欲的な彼女の価値観は随筆や詩に表れており、例えばエッセイ“The Rhythm of Life”(1889)において、Meynell は人生とは詩と同じく“metrical”なもので、“the ebbs and flows”が交互に訪れる“periodicity”が基調にあるため、飽くなき欲望の追求は無益だと述べている。Scholl はここで強調される人生の“periodicity” (120) と、“feasts and fasts” (121) を繰り返す、典礼暦に従った Meynell の規則的な食生活に類似点を見出し、エッセイの主張は断食の実践を通して形成されたものだと述べている。また、*The Poor Sisters of Nazareth* (1889) については、Meynell がナザレの尼僧たちの清貧の誓いを“something pragmatic, ethically and socially motivated”なものだと記している点に注目している。尼僧たちの断食・節食の目的が“personal spiritual growth” (127-28) ではなく貧しい者の救済であったと描いていることから、キリスト教社会主義者としての Meynell の一面が窺えると指摘されている。

本書の功績は、“fasting girls”のようなインパクトのあるトピックに関心が向けられることが多い中で、ヴィクトリア朝の節食・断食には慈善行為としての意味合いもあったという導入部での主張の妥当性を、四人の女性作家の作品の分析を通じて示したことであろう。彼女たちは当時の社会に対し共通の問題意識があり、必然的に節食や断食に対する考え方も似通っているため、特に二章以降はどの章を読んでも同じようなことが書いてあるようにも思えたが、根拠の積み上げとしては効果的である。また、“gluttony”は“excessive starvation” (14) よりも健康リスクが高いことを見出した当時の栄養学の発展についても論考がされており、取り上げられている作家たち（生涯健康問題を抱えていた Meynell は特に）は適度な食事制限を体に良いと考えていたという指摘からは、当時の節食や断食が栄養学

的観点と宗教的観点が複雑に絡んだものであることが窺えて興味深かった。そのため節食・断食は自らの“body”と“the social body”（138）に健全さをもたらす行為であったという結論も説得力があった。

Gaskell 研究者にとって最も関心が高いのは第一章だと思われるが、他章とのつながりという点では少し疑問を感じた。章の冒頭で、ユニテリアンとして知られる Gaskell であるが、彼女の社会的、神学的、文学的影響には“ecumenical”（25）なところがあり、メソジスト的な面があると Scholl は指摘している。しかし、“ecumenical”、“Methodism”（25）といった言葉が使われているのはここだけで、Gaskell 作品のどういう点がユニテリアン的でなくメソジスト的なのか具体的な説明がない。また、*Ruth* と *North and South* については、本書で言うところの“food restraint”に関する話ではないように思った。第一章だけを切り離して読めば *Ruth* の解釈などは面白く読めたが、Gaskell の宗教観と節食・断食の関係については十分な議論がなされていないようにも思えた。

とはいえ本書がヴィクトリア朝における節食・断食に関する新たな視点を提示していることは間違いない。先行研究についても手際よくまとめられているため、“food restraint”がどう捉えられてきたかを知る上でも有益な書である。

（宮崎公立大学准教授）

日本ギヤスケル協会会則

第一条 (名称)

本会は日本ギヤスケル協会 (The Gaskell Society of Japan) と称する。

第二条 (事務局)

本会の所在地は事務局とし、事務局は原則として事務局長の所属する研究機関に置く。

第三条 (目的)

本会はエリザベス・ギヤスケルの文学および関連分野の研究に寄与し、あわせて会員相互の親睦を図ることを目的とする。

第四条 (事業)

本会は前条の目的を達成するために次の事業を行う。

- (1) 総会および全国大会の開催
- (2) 研究会、講演会その他の会合の開催
- (3) 機関誌、ニューズレター、その他の刊行物の発行
- (4) 国内外各種研究団体との交流
- (5) その他必要と認められる事業

第五条 (会員)

本会は原則として、本会の趣旨に賛同して入会した個人をもって会員とする。なお本会の目的、事業に賛同する法人を賛助会員とすることができる。会員の入会・退会は役員会がこれを審議し承認する。会員は所定の会費を毎年度末までに納入しなければならない。

第六条 (組織)

本会に次の議決機関および執行機関を置く。

議決機関

- (1) 総会
- (2) 役員会

執行機関

- (1) 各種委員会
- (2) 事務局

第七条 (役員、名誉会長、名誉会員)

1. 本会に次の役員を置く。

- (1) 会長 1名
- (2) 副会長 1名
- (3) 幹事 若干名
- (4) 各種委員会委員長各1名
- (5) 事務局長 1名
- (6) 会計監査 2名

2. このほか役員会の推薦により、名誉会長、名誉会員を置くことができる。

第八条 (任務)

役員は任務を次のように定める。

- (1) 会長は本会を代表し、会務を統括する。
- (2) 副会長は会長を補佐し、会長に事故あるときはその職務を代行する。
- (3) 幹事は会務の運営にあたる。
- (4) 事務局長は事務局を統括する。
- (5) 会計監査は会計を監査する。

第九条 (選任・任期)

役員を選出方法および任期を次のように定める。

- (1) 役員のうち、会長・副会長および幹事は、役員会の推薦にもつぎ総会において選出し、事務局長・各種委員会委員長および会計監査は、役員会において選出する。
- (2) 役員の任期は2年とし、連続2期4年を超えて重任しない。ただし会長・副会長・事務局長の任期は就任時から始まるものとする。会長の任期は2期4年を限度とする。

第十条 (総会)

- (1) 総会は本会の最高の議決機関であり、毎年1回会長が招集する。ただし会長が必要と認めるとき、または会員の3分の1以上の要求があったとき、会長は臨時総会を招集する。
- (2) 総会の議決は出席会員の過半数とする。

第十一条 (役員会)

- (1) 役員会は本会会則および総会の議に沿って、本会の目的達成に必要な事項の企画および審議決定にあたる。
- (2) 役員会は第七条第1項(1)から(5)に記した役員によって構成され、会長が招集する。
- (3) 役員会は各種委員会を組織することができる。

第十二条 (経理)

- (1) 本会の経理は会員の会費、寄付金、その他の収入をもってあてる。
- (2) 本会の会計年度は毎年4月1日に始まり翌年3月31日に終了する。
- (3) 本会の会計報告ならびに監査報告は、毎年1回、総会において行う。

第十三条 (メーリング・リスト)

本会の情報交換のために、メーリング・リストを開設する。原則として全会員が登録され、自由に投稿できる。ただし、問題が生じた場合には会長の権限で停止することもあ

第十四条 (会則の改廃)

本会則の変更は総会の議決を経なければならない。

付則

この規約は昭和63年10月16日から実施する。この改定規約は平成4年10月18日から施行する。この改定規約は平成16年10月3日から施行する。この改定会則は平成17年10月2日から施行する。この改定規約は平成18年10月1日から施行する。この改定会則は平成19年6月2日から施行する。この改定会則は平成28年10月1日から施行する。

本会は事務局を、〒422-8545 静岡県駿河区池田1769 静岡英和学院大学短期大学部芦澤久江研究室に置く。

編集後記

『ギヤスケル論集』第33号をお届けします。今号は、2023年4月13日に逝去された小池滋先生追悼号です。多くの先生方に追悼文を書いて頂きました。また、石塚裕子先生から小池先生のご略歴・主要業績表を、松岡光治先生から写真を提供して頂きました。この場をお借りして御礼申し上げます。編集委員一同、小池先生のご冥福をお祈りいたします。◆第34回大会でのご講演を論文として寄稿して下さいました石塚裕子先生と松本三枝子先生に感謝申し上げます。◆投稿論文は3本で、すべて審査を経て本号に掲載されました。論文の掲載順は、ご講演に基づく論文・投稿論文共に、慣例に従い執筆者のアルファベット順です。また、今年度創設された奨励賞の受賞論文を掲載することができました。次号以降も多くの投稿があることを願います。◆書評は近年の新刊書に関するものです。『論集』では、ギヤスケルに関連する新刊書をできるだけ書評に取り上げます。希望の書籍がございましたら、編集委員会までご一報ください。(杉村)

ギヤスケル論集第33号

2023年9月29日 印刷

2023年10月1日 発行

発行者 大野 龍浩

編集者 『ギヤスケル論集』編集委員会

発行所 日本ギヤスケル協会

〒422-8545

静岡県静岡市駿河区池田 1769

静岡英和学院大学短期大学部

芦澤久江研究室内

ashizawa@shizuoka-eiwa.ac.jp

印刷所 株式会社篠原印刷所

〒422-8033

静岡市駿河区登呂 6 丁目 7 番 5 号

TEL:054-286-5141 FAX:054-285-6261

『ギヤスケル論集』投稿規程

【資格】投稿者は日本ギヤスケル協会会員であることを原則とする。

【内容】原稿はエリザベス・ギヤスケル、およびその周辺に関する研究とし、未発表のものに限る。ただし、すでに口頭発表し、その旨を別紙に明記している場合には審査の対象とする。

【執筆要項】

- 1) 書式は *MLA Handbook for Writers of Research Papers* の最新版に準ずる。
- 2) 原稿は原則として Microsoft Word で作成する。執筆用テンプレートが協会のホームページにあるので利用されたい。
- 3) 日本語原稿の場合は 14,000 字以内とし、別に英訳題名をつけ、200～300 語程度の英文による要約をつける。
- 4) 英語原稿の場合は 6,000 語以内とする。要約は不要。
- 5) 日本語原稿、英語原稿とも、題名、注、文献目録その他一切を規定文字数のうちに収める。
- 6) 注は本文中に算用数字で表記し、本文の最後に通し番号でまとめる。注番号にはカッコは使用しない。Word の参考資料メニューの脚注および文末注の挿入機能を使用しない。

【締切】4 月末日。

【提出】1) 原稿のファイル (MS Word 版と PDF 版) を電子メールに添付して事務局に送付する。氏名は原稿には記載しないこと。2) 英文要約 (和文論文の場合) 3) 投稿シート (様式は協会 HP よりダウンロード)。

【審査】原稿掲載の可否は編集委員会が決定する。審査の公平と査読者の自由な知見を守るために、査読者の氏名は公表しない。

【校正】執筆者の校正は初校までとし、訂正加筆は印字上の誤りのみとする。

細則

1. 論文執筆者には『論集』5 部、論文以外の (エッセイや書評など) 執筆者には会員 1 部、非会員 2 部および各論文、記事等の PDF を進呈する。なお、執筆者が希望すれば、実費 (含送料) にて抜刷購入可とする。
2. 執筆者に掲載料の負担が発生する場合がある。
3. 掲載された論文は一定期間を経た後に電子化され、インターネット上に公開される。公開を望まない場合は、事務局に申し出ることにより、非公開とすることができる。
4. 英文の論文および要約の原稿は英語母語話者の校閲を受けること。

※尚、この投稿規程は 2022 年 10 月 1 日改定、2023 年 4 月 1 日より施行。

日本ギヤスケル協会奨励賞論文応募規程

【資格】投稿者は日本ギヤスケル協会会員で、投稿時に満 40 歳未満であること。ただし、満 40 歳以上であっても、大学院生の場合はこの限りではない。応募前にそれ以前の会費が納入済みであること。

【審査】奨励賞論文は最新号の『ギヤスケル論集』に掲載されることになった論文のなかから審査される。審査の公平性を守るため、審査員の氏名は公表しない。

その他、内容、執筆要項、締め切り、提出、校正などについては、『ギヤスケル論集』投稿規程に準ずる。

細則

1. 奨励賞受賞者には、論文執筆者として『ギヤスケル論集』5 部、さらに奨励賞受賞者として『ギヤスケル論集』5 部、合計 10 部及び PDF を進呈する。
2. 掲載された論文は一定期間を経た後に電子化され、インターネット上に公開される。
3. 英文の論文および要約の原稿は英語母語話者の校閲を受けること。

※尚、この投稿規程は 2022 年 10 月 1 日に制定、2023 年 4 月 1 日より施行。

Gaskell Studies

Vol. 33

— CONTENTS —

In Memoriam: Professor Shigeru Koike

Professor Shigeru Koike: The Leader and Guardian of Our Society Akiko SUZUE	1
My Academic Mentor, Prof. Shigeru Koike Mitsuharu MATSUOKA ...	3
The Days Never to Be Forgotten.....Hiroko ISHIZUKA	7
The Unceasing Wheel of Life: See You in the Next World, Professor KOIKE! Tatsuhiro OHNO	9

Lectures

A Comparative Study of the Victorian Problem Novels and the Proletariat Novels in Japan Hiroko ISHIZUKA	13
Elizabeth Gaskell and the Sensation Novel Mieko MATSUMOTO	31

Articles

Whispering Mothers: Reading Women's Speech and Silence in "Lizzie Leigh" Yuriko HAYAKAWA	45
The Construction of an Inclusive Society and Its Limitation in <i>My Lady Ludlow</i> Fumie TAMAI	61

The Essay Awarded the Gaskell Society of Japan Encouragement Prize

Elizabeth Gaskell's Representation of a Disabled Middle-Class Male Character in <i>Ruth</i> Shino HOSHI.....	77
--	----

The Encouragement Prize Screening Committee Report

..... Tatsuhiro OHNO	91
----------------------------	----

Review

Lesa Scholl, <i>Food Restraint and Fasting in Victorian Religion and Literature: New Directions in Religion and Literature</i> Kotaro MURAKAMI.....	93
--	----